Cross　～夢の架け橋～

やえかわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｃｒｏｓｓ　～夢の架け橋～

【Ｎコード】
Ｎ９１９０Ｗ

【作者名】
やえかわ

【あらすじ】
Ｃｒｏｓｓ　Ｍｙｔｈｏｌｏｇｙ――それは、バーチャルリアリティシステムの稼動に合わせて発売された、ＭＭＯＲＰＧタイトルである。その完成度の高さに、多くのユーザーが魅了され、圧倒的な支持を得ていた。しかし、新種の魔物が発生したという噂が立ったその日から、徐々に不穏な影が忍び寄る。現実（リアル）世界と、ゲーム世界と、そして、もう一つ……。これは、交錯する世界の物語。

ヒュドラと私

九つの首を持った龍――ヒュドラが、六つ目の首が切り落とされた苦痛に暴れ狂う。

「よし、後三つ！」

たった今、自身の身長の二倍辺りの高さにある、太い丸太ほどある首を空中攻撃で切り飛ばしたのは、大剣装備の戦士であるシンゴだ。

彼は身軽に着地した後、暴れるヒュドラの足から逃れるべく、すかさず距離を取った。

「フレイム！」

私は、炎の中級魔法を、今切られたばかりのヒュドラの傷口めがけて発動した。

傷口に塩、ならぬ、傷口に炎。

えげつない、ということなかれ。こうしておかないと、ヒュドラはその驚異的な再生能力で首を生やしてしまうのだ。しかも、一つの首元から、二本も。

ということで、ヒュドラの傷口を、焼く、あるいは氷漬けにするのは、合理的な攻略方法なのである。

「四の型、疾風！」

残り三つの首のうち、右側にあるやつ目掛けて、刀装備の戦士――侍であるリーンが駆け込み、居合い抜き。

キン、キン！　という金属的な効果音の後、細い銀光が二筋走り、ヒュドラの首根元に食い込んだ。
が、まだ浅い。
畳み掛ける追撃が欲しいところだが……。

「え、ええと……っ」

次の行動順は、ユラ。
彼女は治療師（ヒーラー）として育てているので、現時点では攻撃術技を身につけていない。いや、皆無ではないが、ヒュドラと真っ向勝負できるほどのものではないのだ。

「ユラ、ボムを」
「あ、はい！」

私の指示に、ユラが慌てて爆発系投擲アイテムを取り出した。
ピッチャー、第一球、振りかぶって……投げました！

「あ……」

おおっと、ピッチャー暴投！　ボールはキャッチャーの頭を大きく越しました！
いや、ヒュドラの頭を越すって、どれだけフライさせたのだ。ピッチャーなのに。
さて、ボムはヒュドラの巨体の向こうに飛んだので視認はできないが、ほどなく、どっかん、と爆発した。

「す、すいません……っ」
「仕方ない。投擲スキルが低いんだ。気にするな」

身の置き所がないというように身を縮めるユラを、慰めた。
投擲スキルが低いと、標的に上手く当たらない。器用さが高ければそれなりに補正は受けられるが、それでも判定は投擲スキルに準拠する。
当たればいいな、程度であったし、スキルを使用することでもらえる若干の経験値ボーナスが目的であったので、失敗は気にしないし、気にしてもらうことでもない。

「斬月！」

なんて言っている間に、敏捷度が高いリーンが、再度攻撃。自分よりも大きな相手、リーチが届かない相手に対して効果的な斬り上げ技だ。
右の首は一刀両断されて地面に落ち、一、二度のたうってから、光が弾けるエフェクトでかき消えた。

……ちなみに、切り落とされてものたうつのは、蛇系だからだそうだ。
変に凝っている。いや、この凝り様が人気の一つではあるのだけれど……あれだ、蛇嫌いの人間って、結構いると思うんだが……ぞわっとくるんじゃないか？　ぞわっと。

いや、今はぞわっとしてていい状況ではなかったな。
行動順は各キャラクターの敏捷度が決定するから、次は私だ。
どうしようか、攻撃してもいいけれど……。

「――バインド」

私は、ヒュドラの足を止めることを優先した。
バインドは行動束縛の魔法で、相手との魔力差で効果に違いが出

る。
私の魔力は高いし、ヒュドラの魔力は中程度であるから、2回くらいは行動を止められるはずだ。

「も、もう一度、行きます！」
「ああ、どうぞ」

今度こそ！　と意気込んでユラはボムを投げ――お、ストライク！

「お見事」
「は、はい！」

私の短い褒め言葉に、ユラは頬を染めて喜んだ。
まあ、ヒュドラはバインドで動けないから、投擲スキルがいくら低くても、あさっての方向に投げない限り、補正が加わって当たる仕様なのだが。
――はにかむ美少女。
うむ、目の保養だ。

「よし、ようやく俺か！」

大剣、それも重装備の戦士ゆえに敏捷度が低く、必然的に攻撃回数が少なくなるシンゴは、待ってましたとばかりに大剣を振りかぶる。

「クリティカル・ストライク！」

ぶおん！　と重量級の音を鳴らして、大剣が風を切る。
リーンの刀スキルから発した銀光とは太さからして違う軌跡が、ヒュドラの左の首を襲う。

それは、ずしゃあ！　と、通常攻撃のヒット時よりも低く重い音で食い込んだ。

「よっしゃ、当ったりー！」

シンゴがガッツポーズをした。

今シンゴが使ったのは、クリティカルの発生確率が五十パーセントの大剣スキル。当たればクリティカル、外れればミス、という落差が激しい技だ。

そして今回、見事に当たった。今の重い音が、大剣攻撃がクリティカルヒットした時の効果音だ。クリティカルは通常攻撃の二倍の威力だが、シンゴはクリティカル効果倍のスキルを取得しているので、実質、通常攻撃四倍の威力だ。

シンゴのこの攻撃を喰らって無事に済む魔物はそうおらず、タフなヒュドラもその例には漏れなかった。

シンゴの攻撃はヒュドラの左の首を一刀両断、しかもその余波で、真ん中に残っていた最後の首の半分近くをも切断していた。

「きゃあ、凄いです、シンゴさん！」

「はっはー！　だろだろ！？　流石俺！」

ユラの声援に、シンゴは振り返って得意げに胸を張った。

って、そんな調子に乗っていると……。

「っシンゴ殿！」

リーンが、叫びながらシンゴにタックルをかました。

「ぐぼえあ！？」

シンゴの愉快な声とともに、二人は地面に倒れこんで――そして、寸前までシンゴが胸を張っていたところに、ヒュドラの首が落ちてきた。

「おおお……あ、危ねえええ」

シンゴが冷や汗を拭う。

あのままいたら、シンゴはヒュドラの首の重みでダメージを受けていただろう。運が悪ければ、一撃死判定まで受けていたかもしれない。

ヒュドラの首が、その重みでシンゴの首をへし折るという状況は、このゲームではキャラクターの死亡を意味する。

一般的なゲームではＨＰ――生命力数値の残量が減るだけなのだろうが、このゲームは違う。首をへし折られたり、心臓を一突きさせられたり、脳に致命的なダメージを受けたとしたら、どんなにＨＰに余裕があっても死亡判定。

リアル志向ととるか、変な凝り性ととるかは……個人の判断にゆだねよう。

「さて、では私か」

シンゴへのタックルが、リーンの行動とカウントされるので、ヒュドラのトドメは私に回ってきたことになる。

「――では、エクスプロードを」

選んだのは炎系上級魔法。

最早、暴れる余力もなくなりつつあるヒュドラの足元に、一瞬に

して大規模な魔法陣が敷かれる。
そして、吹き上がる炎。
逆巻く炎は、ヒュドラの巨体を容赦なく焼き尽くした。

仲間と私

「流石クライヴさんです！　あの炎、格好良かったです！」

いや、炎格好良いのはエフェクトのおかげ、ゲームプログラマーさんたちのセンスと努力の結晶なんですけどね。

「ああ、ありがとう」

それでも、褒められるのはやはり単純に嬉しいから、お礼をいう。

無事にヒュドラを討伐した私たちは、街に戻ってきていた。

「おーい、ユラ？　何か、忘れてやしませんか？」

冒険者ギルド目指して先行する私とユラの背後から、もしもーし、とシンゴが声をかけてきた。

心なし、背中が丸まっているように見えるのは……自らの失態に心当たりがあるためだろう。

「何か？　あ、覚えていますよ、勿論！　忘れるはずないじゃないですか！」

可愛らしく小首を傾げた後、ぱん！　とひとつ手を打って笑顔を見せるユラに、シンゴの背筋がぴんと伸びた。

「！　そうだよな！？　俺は信じてたぜ、ユラ！」

そして。

「リーンさんのタックル！　お見事でした！」
「うぐっ」
「は？　あ、いや……光栄でござる……？」

ユラの無邪気を装った言葉にシンゴは胸を押さえ、その隣を歩いていたリーンは、戸惑いつつ礼を言う。
うむ、見事な「上げて落とす」だぞ、ユラ。

「あはは、ごめんなさい、シンゴさん。シンゴさんも格好良かったですよ、あのクリティカル」
「っそうだろそうだろ！？」

流石にいじめすぎたと思ったのか、ユラがフォローすれば、胸を押さえて蹲っていたシンゴは飛び起きて胸を張った。
まったく、調子の良い。

「――クライヴ殿、何か良い道具は手に入ったでござるか？」
「いや」

じゃれあうシンゴとユラを置いて私に並んだリーンの質問に、首を振る。
ヒュドラは、倒したら稀に鉱石を落とす。この鉱石、結構稀少なアイテムで、上手く加工すればいい武器防具になるのだ。

倒した敵がアイテムを落とした場合、戦闘終了後、各自のアイテム欄にランダムに振り分けられる。また、トドメを刺したプレイヤーに若干のプラス補正がつくので、レアものを手に入れる可能性は私が一番高かったのだろうが、残念なことに入っていたのは毒牙だけだ。

いや、ヒュドラの毒は強力だから、これだって高値で売れる。有難いことである。

ちなみに、戦闘後に手に入るドロップアイテムの分配方法には、いくつかある。

どんなアイテムを手に入れても仲良く融通します、というプレイヤー同士なら、ドロップ品をパーティー共有アイテム欄に入る設定にして、公平に分配すればいいだろう。

だが、多人数参加型のゲームには、当然のことながら、多くの人が参加する。いつもいつでも、仲の良いメンバーと組めるわけでもない。時には初対面の人間とパーティーを組むこともある。

そんなときに発生しかねない、アイテムをめぐってのいざこざを少しでも減らそうという目的から、個人へランダムに、それも誰が何を手に入れたか分からないよう非公開で分配される設定をとることも多いのだ。

私は、リーンとシンゴとは何度か組んだことがある。彼らだけなら、共有設定にしても問題なかったのだが、ユラはシンゴの紹介で、今日が初顔合わせだった。

初対面の人間がいるのにドロップ品を共有にするのは、普通ない。それはユラもわかっているから、パーティーを組むときに個人・非公開設定を選択したことに対して異議は出なかった。

まあ、ユラも悪い子ではないようだし、次は共有でも良さそうだ。

そんなことを考えながら進んでいるうちに、私たちはパルテノン神殿を模した冒険者ギルドの前までやってきた。

内部では、依頼――クエストを受けるために掲示板を覗いている人、クエストをこなすために仲間を募っている人、そして私たちのように、クエストを終えて報告、報酬の受け取りに来た人とで盛況だった。

まあ、無理もないか。現実（リアル）の時間では、今は夕方。放課後、その足で来たプレイヤーが多い時間帯だ。
かくいう私も、放課後直行した人間の一人だけれど。

「報告確認お願いします」
「はい、お帰りなさい……って、あら、クライヴ君！」

顔を上げつつされるマニュアル通りのご挨拶が、途中で親しみを帯びた。

「ああ、今日はネネさんが受け付けですか」

黒髪に黒瞳、黒縁眼鏡の知的美人に、私は微笑み返した。

今受け付けに座っているネネさんは、プログラムで操作されているＮＰＣ（ノンプレイヤーキャラクター）ではなく、私やリーンたちと同じ、生身の人間が動かしているＰＣ（プレイヤーキャラクター）――更に言うならば、このゲームを運営管理しているサイドの人間だ。
通常、ギルドはＮＰＣが対応しているのだが、運営者側が気まぐれで参加することもある。
その中でもネネさんはマメに参加し、積極的にプレイヤーと交流してくれる人だ。

「何！？　ネネさん！？　やったー、お久しぶりです！！」

私の背後から、シンゴが大喜びで受付に飛びついた。
ちなみに、シンゴのキャラクターの外見は、クルーカットの金髪に青い瞳。二十代前半の男である。

そのシンゴの後ろで、水色の瞳を呆れたように眇めているのは、十代後半の少女、ユラだ。肩を竦めた動きに合わせて、ツインテールに結われた水色の髪が揺れる。

美女に弱いシンゴにはもう慣れっこで、取り立てて反応を見せずに淡々としているのは、黒髪ポニーテイルで青い瞳、二十代半ばの男性、リーンだ。

そして、私、クライヴの外見設定は、濃紺の短髪に紅い瞳、二十代前半の男である。

「シンゴ君も、お帰りなさい。あら、ヒュドラ退治にいって来たのね。大変だったでしょう？　怪我はなかった？」

「らーくしょうっすよ！　なんたって俺、クリティカル倍もちの大剣戦士ですから！」

えっへんと誇らしげに胸を張るシンゴ。

「それで危うく、落ちてきた首に死亡判定くらうところだったんですよねー」

「ぐさ！」

ユラの棘ある言葉に、シンゴは胸を押さえて腰を折った。いささかオーバーリアクションではあるが、これがシンゴの通常反応であったりする。

「まあ、良かったわね、助かって。そちらの……ヒーラーのお嬢さんかしら？　貴方とは初めましてよね。ユラちゃん？　貴方が治してあげたの？」

「あ、いえ、違います。間一髪のところでリーンさんが助けたん

です。見事なタックルで！」
「ぐふっ」

短い呻き声とともにシンゴは身を捩る。が、誰も注意を払わない。
一応、内心で実況中継している私ではあるが、ツッコミ待ちのシンゴを喜ばせてなどやらない。

「そうなの。流石はリーン君。頼りになるわね」
「否。拙者は、仲間として当然のことをしたまででござる」
「うふふ、素敵な言葉だわ。よし、お姉さん、ちょっとサービスしちゃうから」
「やた！　さっすがネネさん、話がわかるう！」

ツッコミ待ちの姿勢をあっさりやめて、シンゴは万歳した。

……まあ、この「サービス」こそ、運営者が受付についているときの最大のメリットであるため、万歳したくなる気持ちはわかる。
いや、クライヴのキャラじゃないから、私はやらないけれど。

ああ、サービスといっても、勿論ゲームバランスが第一なので、報酬一割り増しとか、能力値ポイント＋1程度。
とはいえ、塵も積もれば山となる。
有難く頂いて、早速、魔法攻撃力に振っておいた。

「ログアウトが選択されました。ただ今処理中です。そのままでお待ちください」

コンピューターの合成音声の指示に従い、少女は暗闇の中、椅子に深く腰掛けたまま、じっと待つ。

「――処理が終了しました。お疲れ様でした。またのお越しをお待ちしております」

合成音声がいい終わるのとほぼ同時に、がしゃん、と少女の目の前のドアが、小さく上方向にずれた。

「……」

少女は椅子に腰掛けたまま、緑ランプで光るｏｐｅｎボタンを押す。

すると、目の前のドアがゆっくりと上がり始め、外の光を細く差し込ませていた足元の隙間も広がっていく。

完全にドアが開いたことを知らせる電子音を聞いてから、少女は立ち上がった。

「ん～！」

そして、大きく伸びをする。

二時間座りっぱなしでいたのだ、固まった気がするのも無理はない。

「やっぱりリクライニングしとけばよかったかな」

呟きながら少女は、ドアの傍についているスロットから、自分のＩＤカードを取り出した。

少女が使っていた椅子が空いたのを見て、順番待ちをしていた少年がいそいそと立ち上がる。

すれ違いざまに見えた少年の口元は、笑っていた。

無理もない、と少女は思う。

少女が今座っていた椅子は、ただのリクライニングシートではない。

ＶＲ――バーチャルリアリティ、仮想現実を体験するための、シートなのだから。

大手ゲームメーカーが、社運を賭けて開発、実用化にこぎつけた、ＶＲシステム。それが世界同時発表されたのは、一年ほど前だ。

一見すると、一人乗り用小型自動車のように思えるそれがＶＲシステムだとは、初めは誰も思わなかった。

とはいえ、その性能は確かだった。

リクライニングシート――一見、普通のリクライニングシートだが、そのシート内側の表面には、特殊電子部品が配列されている――に腰掛け、ヘッドレストの位置を正しくセット。準備を整えて、インストールさせたプログラムを実行させれば、そこはシートの上でも車内でもなく、風吹きぬける爽やかな草原であり、珊瑚が美しい青き海中であり、遮るもののない広大な空であった。

更に設定を細かく行うことで、草原駆ける狼に、優雅に泳ぐ魚に、自由に飛び交う鳥にもなれた。

その素晴らしい技術に、世界中が沸いた。
問い合わせが殺到した。

しかし――である。

素晴らしい技術であることは間違いないが……見過ごせない問題もあった。
ＶＲを体験するのに必要とはいえ、その大きさ。一般家庭に置くには、かさばる。はっきり言って、邪魔だ。小型化は、現在進行形で取り組まれている、最重要課題である。
そして、コストパフォーマンスにも大きな問題があった。

そう――高価なのである。
一台八十万越え。
それだけでもとても敷居が高いのに、身体への影響を考えて、一日プレイ時間は二時間まで。

「……元取るのに何年かかるんだって話よね」

いくつも並ぶＶＲシステムの間を歩きながら、少女は小さく呟いた。
一般家庭の、一般的な学生さんには、とてもではないが手が出せない。
が、売れなければ開発会社だって元が取れないのである。

ということで、開発会社は最初から、まずは街のゲームセンターに数台配置することを考えていた。これは開発会社からゲームセンターへのリース契約となっている。
ＶＲシステムの発表から半年後。一般公募テストを経て正式に稼動した当初は、その数が少なすぎて多くの客があぶれていたが、こ

こ最近になってようやく落ち着いてきた。

ＶＲシステムを多く集めたゲームセンター……ＶＲ喫茶なるものが各地に出店したためだ。

数を揃えたから、待ち時間は減った。それでもタイミングが悪くて待つことになったとしても、喫茶店でもあるので、時間を潰せる。むしろ十数分程度の待ち時間であれば、他の客と情報交換が出来ると、歓迎されることすらあった。

「お、吉野、お帰り！」

少女――桜庭（さくらば）　吉野（よしの）が喫茶スペースに足を踏み入れた途端、中年男性が明るく出迎えた。

「うん」

カウンター内部にいる男性――このＶＲ喫茶の店長だ――とは結構な温度差のある、非常に淡々とした反応で、吉野はカウンターの端、彼女にとっての指定席に座った。

「さあ、召し上がれ」

座るなり並べられたのは、カフェオレとショートケーキ。

「……何これ」

何これ、と聞かなくても一目瞭然ではあるのだが、吉野は声低く問わずにはいられなかった。

「何って、」

「カフェオレとケーキっていうのは見れば分かる。でも私、頼んでない」

「心配するな、奢りだ！」

ぐっと親指立てて良い笑顔をみせる店長だが、その良い笑顔は無視して、吉野は半眼で店長を見上げた。

「そうじゃなくて。私、昨日も一昨日も、その前も、ケーキ食べた記憶があるんだけど」

「おう、奢ったからな。頭使った後には甘いもの！　好きだろ？美味かっただろ？」

「好きだし、美味しかったけどっ。でもね、そんな毎日毎日ケーキなんか食べてたら、太るでしょうが。昨日も一昨日も、ちゃんとぼやいたでしょうがっ」

ぼやいた割には、完食した吉野であった。出されたからには食べる主義なのだ。美味しかったのも事実であるし。

だが、それを続けていると確実に太るのだ。何しろ吉野はインドア派。運動は、苦手とは言わないが、面倒と敬遠するタイプ。体育の授業以外での運動習慣はない。

故に、着実に増えてきているのだ。何が、とは、改めて言うまでもないだろう。

「大丈夫、吉野はスレンダーだ。俺としては、もうちょっと、こう、肉付きがいいほうが……」

「セクハラ！」

視線が胸元に降りた瞬間、吉野は店長――実は父方の叔父、桜庭守（さくらばまもる）だ――に、ハリセンによる制裁を加えた。ちなみにこのハリセン、吉野の指定席に常備されているものである。

すぱーん！　という軽快な音に、ちらほらと他の客の視線が集まるが、大半は気にせずにそれぞれ過ごしていることからわかるよう

に、吉野によるハリセン制裁は珍しいことではない。

「ううん、吉野が冷たい。おじさんは悲しいぞ。小さい頃は、おじちゃんと結婚するんだって笑顔でいってくれたのに……」

ハリセンで叩かれた頬を手で押さえ、よよ、と泣きまねする守。

しかしそんな大根演技に騙されるほど吉野は単純ではないし、ノッてあげるほど寛大でもない。いや、一度や二度なら付き合う気もあるが、これはもう飽きるほどに繰り返されたやりとりだ。

「幼稚園児のリップサービスをいつまでも何度でも掘り返すなんて、ホント、ウザい」

なので、吉野は吐き捨てた。絶対零度の視線とともに。

「ぐっ。しかし、その冷たい瞳もまた……」

――なのに、守はめげなかった。むしろ、少し喜びまで芽生えさせている。

「……」

どうしよう、これ。

吉野は非常に困った。

困ったところを見せると、「困ってる吉野もかわいい！」とかいって復活するので、憮然とした表情を作りつつ、内心困っていた。

「相変わらずだなー、桜庭」

「あ、夏崎君」

救いの手は、すぐに現れた。
吉野の高校のクラスメイト、夏崎（なつざき）　健治（けんじ）。
その登場に、吉野は諸手を挙げて喜びたい気分だった。

Ｃｒｏｓｓ　Ｍｙｔｈｏｌｏｇｙ

「夏崎君はこれから？　それとも終わった？」
「終わったところ。あ、店長さん、アイスコーヒーをください」
「……」

吉野の隣に、ごく自然に座った夏崎のオーダーに、守は返事をしなかった。客商売にあるまじき愛想のなさであるが、夏崎は苦笑しただけで流す。守のこの反応もまた、よくあること、であるのだ。

「桜庭も、Ｃｒｏｓｓやってたんだろ？　どこの地域で？」

Ｃｒｏｓｓというのは、「Ｃｒｏｓｓ　Ｍｙｔｈｏｌｏｇｙ」という、ＶＲを使用した、ＭＭＯＲＰＧ――多人数同時参加型オンラインロールプレイングゲームだ。

その世界観は、主に神話が元になっている。それも、一つの神話ではない。有名どころのギリシア・ローマ神話を始め、北欧神話、インド神話、日本神話、その他、各地域の神話も含め、緻密に作りこまれている。

ＶＲによる初のＭＭＯＲＰＧということもあるが、その完成度の高さのため、ＶＲユーザーの８０％を抱え込んだ、社会現象の真っ只中にあるゲームだ。

「今日はギリシア・ローマ地区」

ギリシア・ローマ地区は、その名の通り、ギリシア・ローマ神話をベースに作りこまれたエリアである。

「マジ？　俺も今日そこでプレイしてたんだ。んー、じゃあ、ギルドですれ違ってたかもしれないんだよな。気付かなかったなー」

ギリシア・ローマ地区のギルドといえば、パルテノン神殿を模した建物のことだ。

ギルドの外観は、基本的にその地区の神殿を採用しているため、日本ならば神社であるし、キリスト教圏ならば教会だ。

とはいえ、ギルドは一地区に複数あるので、同じ室内にいたとは限らない。

「なあ、やっぱ向こうでも会おうぜ？　桜庭のキャラ、教えてくれよ」

夏崎が、吉野に向けて身を乗り出した、その時。

だん！　と、その鼻先すれすれを通って、アイスコーヒーのグラスが置かれた。

「アイスコーヒー、お待ち」

「あ……ありがとう、ございます……」

声にドスをきかせた守からの警告を受けて、夏崎は固い動きで身を引いた。

あまり吉野に近づきすぎると、この店に出入り禁止を喰らってしまう。

それは避けたい夏崎は、冷静になるべく、深呼吸を試みた。

「前からいっているけど、それはお断り。私、向こうでは、なりきってるんだから」

吉野は、Ｃｒｏｓｓの世界ではキャラクターに「なりきっている」。

吉野本人の性格と、まるっきり違うとまではいわないが、やはり、吉野の理想というか憧れ的なキャラを作っている。

それをリアルの知り合いに見られるのは、どうにも気恥ずかしかしいし、気を抜いてキャラの言動がぶれるのも御免被りたかった。

故に、このＶＲ喫茶の常連になった夏崎がＣｒｏｓｓのユーザーであると知ったときも、一緒に協力プレイしようと誘われたときも、吉野は自らのキャラクターを教えることはしなかった。

ちなみに、キャラクターを教えないだけではなく、夏崎のキャラクターを聞くことも拒否した。フェアじゃないと思ったからだ。変なところで律儀である。

なので、夏崎が吉野を見つけるには、ノーヒントの状態で看破しなければならないのだが、そうそう出来る事ではない。

「……本当に、向こうで確信を持って話しかけたら、嘘はつかないでくれるんだろうな？」

「その時はね、仕方ない。覚悟を決めておくよ」

難しいとわかりきっているのに、それでも諦めないのは――意地になっているからか。

めげない夏崎に、吉野は軽く肩を竦めつつも頷いた。

簡素な木造の部屋に、独りでいた。

室内には様々な鉢植えが並べられているが、蕾をつけているものは、一つもない。

花が咲いていないことが、とても悲しい。
残念で、悔しい。
咲かせたい。
どうしても。

――私は――

――彼女は――

強く、願っている。

そして――吉野は、目を覚ました。

「……」

今は何時かと、半ば寝ぼけた意識のまま目覚まし時計に手を伸ばせば、針は二時半を指していた。

「……うう……」

変な時間に目が覚めた、と枕に顔をうずめる。

「眠れるかなー……」

吉野はあまり寝つきが良くない。
良いときはいいのだが、どうかすると、一時間二時間、ベッドの上をごろごろする破目になる。
特に、今のように夜中に目が覚めたときは要注意だった。

「……久しぶり、だったかな」

目を閉じ、眠りが訪れるのを待ちながら、吉野は思い返す。
小屋に居た彼女――今日の夢では女性かどうかも分からなかったが、それでも吉野は知っていた。あの人は女性だと。

夢の中では、いつもあの人こそが、自分自身だった。
いつの頃からかは、覚えていない。
けれど、何度か夢に見ていた。

森の奥、ひっそりとした場所に建つ小屋。
そこに住む女性は、いつも必死に、花を咲かせようとしていた。
けれど、咲いたところを一度も見ていない。
咲かせたいという願いは痛いほど伝わってくるし、夢を見ている時点では吉野自身が強くそう思っているのに。

「……なんで、あんなに一生懸命なんだろ」

何故咲かせたいのかは、見た記憶がない。

「……まあ、夢なんだから、覚えてなくても仕方ないんだけど」

もしかしたら、見たのに忘れただけかもしれない。
ふと思いたったときに、覚えておくぞ！　という意気込みを抱いて眠りについたこともあるが、得てしてそういうときほど、夢を見ない。あるいは、夢見たことすら忘れているものだ。

「……でも……」

何故だろう。

抱いた焦りは、今まで以上であったように思う。
そして、彼女自身が弱っていた、と感じたのは。

「……」

一体何故か――その答えに至る前に、吉野は眠りに落ちていた。

鍛冶師と私　1

さて、健康への配慮から、ＶＲは一日二時間までとされています。
……まあ、何処の世界にも抜け道というのはあるもので、十分な知識と技術を持っている人なら、二時間以上をプレイすることも可能らしい。

けれど、それをするには、まず、ＩＤカードに記録される利用履歴を改竄する必要がある。
そしてその上で、ＶＲ製造元の管理者サーバーにハッキングして、転送された利用履歴も改竄するのだ。

――流石にそこまでする人はいないと思うんだけれど、それでも一度か二度、ハッキングで逮捕されたっていうニュースを聞いたんだから、世の中にはえらい執念をもった人もいるものだ。
で、何度か上手いことやった人がいたらしいけれど、管理者側も中々厳しくチェックする。予測を超えた成長を見せるキャラクターは、徹底的に調査されるのだ。

なんでも、一日二時間で育てることができる限界なんて、結構簡単に予想がつくらしい。
……いや、私にはどうやるのかなんて、さっぱりですけどね？
まあとにかく、それで違法が発覚したら、ＩＤ、アカウント削除。
ゲームで遊べなくなってしまうので、その対応が発表・実行されたあとは、普通に清く正しくプレイが行われているようだ。

で、まあ、私も清く正しく美しく？　正々堂々と、でも時は金なりで遊んでいるところです。

今日も今日とて学校帰りに、ＶＲ喫茶から、Ｃｒｏｓｓに魔道士クライヴとしてログイン。
まずはクライヴの私室にて、メールチェックをする。

「お、カリファから連絡が来ているな」

メールボックスに、昨日ログアウトする前にメールを送っておいた相手からの返事を見つけた。
昨日会えればそのほうが良かったのだけれど、カリファは昨日、私がいる間にログインしていなかったので、メールだけしておいたのだ。
どうやら昨日の彼女は、私がログアウトした後に、ログインしたようだ。

ちなみに、ゲームプレイ中に二時間のリミットが来た場合、運営者側から強制ログアウトさせられる。
仮に戦闘中であっても、その場でぶったぎられる。容赦なく。次にログインしたときは、その戦闘に突入する直前のデータからだ。ぶった切られるまでの戦闘データは消去されている。
ので、例えばエリアボスとかの強敵相手には、逆にそれを利用する場合もある。
ちょっとちょっかい出してみて、敵いそうになかったら、次回ログインしたときは敵前逃亡してレベルアップに勤しむ。そして頃合を見てリベンジ、というわけだ。

そういう目的がない場合は、やはり切りのいいところで、と思うのが人情であろうし、そのほうが運営者側のメモリ的にも若干の余裕が出来るらしいので、各キャラクターには、初ログインと同時に個室が与えられる。

いうなればその個室が、Ｃｒｏｓｓ世界のスタート地点にして、拠点だ。
で、この拠点でログアウトすれば、ちょっとした特典がもらえる。
少しのお金、少しの経験値、ちょっとしたアイテム。
どれが貰えるかは、目押しの出来ないルーレット決定だけれど、序盤にそういったものが私室ログアウトのみで手に入るなんて非常に有難いし、中盤以降は、ルーレットの権利を持ち越しすることで、よりレアなアイテムが候補に並ぶ。
単純に強力な武器防具とか、レアな回復アイテムだとか、果てはネタアイテムまで。

これは、可能な限り私室ログアウトしようと思わせる、強力な動機付けだ。
勿論、私も私室ログアウトをするようにしている。
おおっと、話がずれたか。

「カリファは……」

システムのフレンドリストをチェックする。
Ｃｒｏｓｓ世界で友好関係を築いた相手の名前が一覧表示され、その中に、カリファの名前は白い文字であった。
白い表示は現在ログイン中、黒い表示はログアウト中、だ。

「丁度いい、Ｃａｌｌしてみるか」

トゥルル、と現実世界の電話同様の呼び出し音がなる。

「はい、カリファ。クライヴ、久しぶりね」
「ああ、久しぶり、カリファ」

ワンコールで音声通信が繋がった。
声だけでも上機嫌とわかる相手に、見えないけれど笑顔を返す。
「最近ご無沙汰だったじゃない。どうしてた？」
「モンスター狩りをしていた。ギリシア・ローマ地域で。カリファは？」
「順調よ。鍛冶スキルが5上がったわ」
「それは凄いな」

カリファの誇らしげな声に、私は素直に驚いた。
カリファは、ケルト地域を拠点とする鍛冶師だ。

鍛冶スキルは、その名の通り、武器防具を製作するための技術だ。
NPCも店を出しているが、鍛冶スキルの高いプレイヤーが作ったもののほうが性能が良いので、プレイを通じて鍛冶師と親しくなったプレイヤーは、その縁を大事にする。
かくいう私も、カリファとは積極的に交流を図っている。
いや、勿論、気が合ったというのも大事な理由だけれど。

「それで？　私のことを忘れかけてたクライヴは、一体なにを手に入れて、思い出してくれたの？」
「……なんだろうな、この、浮気を責められているような心境は……」

しかも、必要なとき、都合の良いときにしか連絡を取らない、嫌な男っぽい。
うわ、最低。それが私だとしたら、へこむなー。

「うふふ、まあ、苛めるのはこれくらいにしておいてあげる。で？」

「――直接、そっちに届けようと思うんだが」

これでアイテムだけ送ったら、余計詰られそうな気がして、私はお伺いをたててみた。

「あら、来てくれるの？　嬉しいわ。じゃ、お店で待ってるから」

「ああ」

訪問の許可を快く頂いたのでＣａｌｌを終了させ、私は愛用の杖をもつ。

「テレポート」

瞬間移動魔法を選択し、杖の石突で床を軽くトン、と叩く。

白い魔法陣が、私の足元に一瞬で展開された。

そして。

次の瞬間、私は、カリファの店の待合室に立っていた。

「いらっしゃい、クライヴ」

目の前で、赤い髪に赤い瞳の、スタイル抜群の美女が笑んでいる。

「お邪魔するよ、カリファ」

「いつでも来てっていったのを忘れた？」

カリファは、私の腕をするりと絡め取ると、豊満なバストを押し付けた。

……腕に感じる柔らかさとか、暖かさとか、本当、芸が細かい……。

噂では、とあるプログラマーが、その感触をリアルに近づけるた

めに、研究に研究を重ねたのだとか。
……一体どんな研究を重ねたのかは……あえて考えないことにする。

「……早速だけれど、頼んでもいいかな？」
「……もう、本当、つれないんだから」

カリファは溜息を一つつくと、腕を引いて腰に当てた。
いや、誘惑されてもですね。カリファさんは目の保養ではあるし、魅力的でありますけどね。

あ、誤解のない様に言っておきますと、ＶＲの造形力が低いとかじゃないです。バッチリ、リアルの人間と同じ質感とか、動きの滑らかさとか、表情の豊かさとか、感じられます。
それに、やっぱりゲームの世界。基本、皆さん美形で目の保養ですけどね。

ですがほら、如何せん、クライヴ君を演じている――いわゆる、「中の人」である私は、生物学上、女性なものですから。
カリファの大人の色気にどきりとすることはあっても、襲い掛かっちゃいたい、みたいな衝動とは縁がないのですよ。それがカリファの女性としてのプライドを傷つけているのだとしても、そこは勘弁してくださいって感じで。

あ、ちなみに、Ｃｒｏｓｓは全年齢対象です。お子様お断りな内容を実行に移そうとしても、視界が暗転、一泊した効果音がなって、そして夜が明けた状態です。

更に補足するならば、ＩＤ作成時に身分証明書の提示を求められます。年齢確認いたします。学生証がなくて、ＩＤ作成時に保護者

同伴が必要な小学生以下さんたちには、お色気イベントは徹底カットでございます。ＰＴＡに配慮したつくりになっているのですよ。

開発者さんたちも大変ですね、お疲れ様です。

鍛冶師と私　2

「いいわ。何をして欲しいの？」

お誘いを諦めて、鍛冶師として聞いてくれたカリファ。

早速、ヒュドラの毒牙をアイテム一覧から選択して、実体化させた。

「この毒牙を加工して欲しい」

「あら、ヒュドラの毒牙じゃない」

「ああ、カリファも、何度か加工したことがあったよな？」

「ふふ、ええ。イベントに必要だしね」

そう、ヒュドラの毒牙は、ある討伐系イベントに必要なのだ。

なにしろ猛毒で、神話では、不死持ちのケンタウロスがあまりの苦しさに不死を手放したというほどの代物。その関係で、Ｃｒｏｓｓでは、不死ステータスを持つイベントモンスターを討伐するために必要なアイテムとなっている。

「……というかクライヴ、貴方のために加工したのは私よ？」

「勿論覚えているよ」

まさか忘れたんじゃないでしょうね、というカリファの視線に、私は勿論、を強調して頷いた。

私から依頼したのだから、忘れるわけがない。

しかし、カリファの場合、私から以外にも依頼が来ていたはずだ。

客の依頼内容をしっかり覚えているなんて、客商売の鑑だな。

「私には今更この毒牙は必要ないからな。なにかに加工できるのならと思って」

このアイテムは、鍛冶スキルの高いＰＣでないと加工できない。そしてカリファは、ヒュドラの毒牙を加工できる数少ない人間の一人だ。

「……そうね、何にしたい？」

カリファの赤い瞳が、きらきら輝いているように見える。期待の眼差しというやつだ。

「特に決めていない。カリファが作りたいものがあるのなら、それにしてくれていい」

私は微苦笑しつつ答えた。

何しろ私は、今のところ杖と短剣スキルしか育てていない。杖は魔法攻撃力にプラス補正がかかるから優先的に育てているが、短剣スキルは護身用みたいなもので、あまり育てていない。

私の知識では、杖にも短剣にも、ヒュドラの毒を有意義に使える心当たりはないから、専門家のカリファに丸投げするつもりでやってきたのだ。

そんな私の答えは、カリファにとって、願ってもないものだったらしい。

「うふふ。そういう嬉しい提案をしてくれるから、大好きよ、クライヴ」

「光栄だよ」

妖艶に笑うカリファに、私は微笑み返した。

カリファがヒュドラの毒牙を作業台に置いて考え込んでいる間、私は工房内を眺めて待つことにした。

剣、槍、弓、刀、斧……実に様々な武器が並べられている。

「……剣も惹かれるものがあるが……」

私は腕組みしつつ、剣を見つめた。

Ｃｒｏｓｓには、職業が設定されていない。

あるのは、レベルアップによるポイント割り振り制度。

レベルが１上がるごとに１０の身体能力値ポイントと、５のスキルポイントが手に入り、それをそれぞれ任意に振り分けるのだ。

私が魔道士を名乗っているのは、単に魔法関係の能力とスキルを集中して育てているからにすぎない。

とはいえ、Ｃｒｏｓｓのシステム的に職業が存在しないとは言っても、プレイヤーたちが理解しやすいよう、過去のＲＰＧの概念が持ち込まれたのは驚くことでもないし、初対面の人への自己紹介に、戦士です、とかヒーラーですと名乗るのが定着したのも不思議ではない。便宜上、というやつだ。

そして、そもそも職業がないのだから、職業で装備できる品が変わることもない。装備できるかどうかは、装備品ごとに設定された必要能力値を有しているかで決定される。

「かといって、今から剣スキルを育ててもな」

魔道士として育てている私は、あまり筋力にポイントを振ってこなかった。
剣スキルと筋力を育てなければいけないことを考えると、非常に効率が悪い。中途半端になってしまうのがオチだ。

「クライヴ、槍を作ってもいい？」
「槍？」

どうやら作りたいものを決めたらしい。
顔を上げたカリファに、私は聞き返した。

「そう。ヒュドラの毒牙を少し加工してね、それにしてみたいの」
「期待できる効果は？」
「一撃死ではないけれど、どんな術やアイテムでも決して癒せない傷を負うわ」
「……治せない？」

治療魔法や、回復アイテムでも？　と確認するが、それでもカリファは頷いた。

「ええ。その槍の穂先を削った粉末をかけることでしか、ね。これはまだ誰も作っていないから、恐らくだけど」
「有名な武器なのか？」

生憎と、私は知らないが。
Ｃｒｏｓｓ世界の武器防具、アイテムは、神話が元になっているものが多い。特に高レベル帯になると、それらはほぼ神話原案のアイテムだ。

鍛冶スキルを持っていると、今までにプレイヤーによって作成さ

れたアイテムの一覧が確認出来る。これは鍛冶師に限らず、剣スキルや魔法スキルにもある。それぞれのスキルに応じた一覧があるのだ。

魔法スキルであれば、例えばフレイム――炎系中級魔法を一番最初に覚えたのは誰、と名前が一覧に記される。ちなみに、初級魔法はキャラ作成時に一つ選択できるので、一覧表示にはない。

ええと、話を戻すとだ。

神話にある武器ならば、大抵はＣｒｏｓｓにも採用されているはずで、鍛冶の一覧にまだその名が載っていないのならば……作成に成功した場合、そこにカリファの名が記されることになる。それはやはり名誉なことで、多くのプレイヤーが、自らの名前を一覧に載せることを目指している。

「少し調べれば出てくる程度にはね。実は前から狙って研究していたんだけど、ヒュドラの毒牙を私の好きに使っていいって剛毅な人は誰も居なかったのよ」

「そうか。任せるよ」

特別作ってもらいたいものもないし、と、全面的に任せた……といえば聞こえはいいが、要は丸投げた私に。

「ふふ、だからクライヴ大好きなのよ」

カリファは、ちゅ、と投げキッスのエフェクトを起こして寄越した。

作成には少し時間がかかるというので、私はケルト地区を歩いて

回ることにした。
少し前までは、ここケルト地区でクエストをこなしていたが、ギリシア・ローマ地区に移動してからはすっかりご無沙汰だった。
目新しいクエストが発生しているかもしれないしと、私はケルト地区のギルドを目指す。
途中、露店――ＮＰＣが出しているものもあれば、プレイヤーが出しているものもある――を覗きながら進む。
が、めぼしいものはなかったので、ドリンクだけ購入。
ちなみに、ＶＲシステムの性能的には味覚の再現も出来るらしいけれど……「やらない」らしい。あんまりリアルにしてしまうと、リアルとバーチャルの区別がつかなくなってしまうからだとか。
だから、今私が買ったリンゴジュースも、甘みは感じるけれど、リンゴ味ではない。これは、オレンジジュースでも、そのほかでも同じ。
甘味、苦味、塩味、辛味、酸味は抑え目で感じられるけれど、甘酸っぱさとかコクとかいうのは感じない。
……そこらへんを追求すれば、ダイエットしたい人には喜ばれると思うんだけど。ＶＲなら、いくら食べても太らないわけだし。
ああでも、美味しいだけじゃ満足しないのかなあ？　やっぱり、お腹一杯、食べたい？
私だったらどうかな、と自問自答しながら、ギルド前にやってきた。

執事さんとお嬢様と私

ここケルト地区のギルドは、イギリスの世界遺産、ストーンヘンジである。
ストーンヘンジには、ケルトの神官・ドルイドの礼拝堂説があるらしく、それを採用したらしい。

……ちなみに、雨ざらし。雨が降ったら濡れます。リアルですねー。

濡れるのが不快なので、ここのギルドにはあまり、運営者権限をもった受付嬢は出現しないそうです。
運営者権限でどうにかしちゃえばいいのに、と思うけど、そこらへんは、変なポリシーがあるらしい。

私はといえば、「潮干珠（しおふるたま）」という日本神話の宝珠を装備して凌いでいる。
海幸彦と山幸彦のお話に出てくるもので、潮干珠は、海を干上がらせることが出来るという代物だ。
これを装備していると、あら不思議、雨が勝手に避けていく仕様だった。

……実はこの作用、あんまり知られて無いんじゃないかな？　だって知ってたら皆使うでしょ？　私も雨よけに便利だと知ったのは、イベントに必要で装備していた時に、雨が降った偶然からだった。
まあ、デザイン的にも気に入っているし、アクセサリー装備枠にも余裕あるしで、有難く利用させてもらっている。

「おや、クライヴ様ではありませんか」

「ああ、スチュアートさん。お久しぶりです」
「はい、ご無沙汰いたしておりました。ご健勝のようで、何よりで御座います」

白髪を綺麗になでつけ、淡い青の瞳に燕尾服の渋いご老人は、スチュアートさん。
職業――執事、だそうである。
いや、スチュアートさんの雇い主にいわせると、「スチュアートはハウス・スチュワードだよ！」とのこと。
なんでも、執事さんの上司にあたる役職らしいけれど……いまいち、そのあたりの違いがよくわからない。なので、執事さんと呼ばせてもらっている。

「スチュアートさんも。アリスは元気ですか？」
「はい」

アリスの名前を聞くなり、スチュアートさんの相好は崩れた。まるっきり、孫に甘い祖父である。

「アリスお嬢様は、クライヴ様に会いたがっていらっしゃいます。お時間があるようでしたら、是非、当邸にお越しいただきたく存じます」
「そうですね……そちらのご都合がよろしければ、今からお伺いしても……？」
「光栄に御座います。ささ、どうぞ馬車へ」

スチュアートさんが、ぱんぱんと手を打ち合わせると、道の向こうから馬車がやってきた。それも、そこらへんのＮＰＣが動かす乗り合い馬車ではなく、豪華なつくりの、お金持ち専用馬車だ。
スチュアートさんが開けてくれたドアから乗り込んで、スチュア

ートさんは御者台に乗って、いざ出発。

馬車は、ギルドに面した大通りから離れて郊外へと進み、ほどなく、広いお邸――というか、もうアレは城だ――までやってきた。

何しろ、門を過ぎても、邸に入るためのドアには、更に馬車で進まないと着かないんだから、無駄に広い。広すぎる。

「お足元にお気をつけください」

「ありがとうございます」

馬車が止まると、スタンバイしていた使用人さんが馬車のドアを開け、そして踏み台までセットしてくれた。

なんて至れり尽くせり。いやあスチュアートさん、いい教育してますね。

「っクライヴお兄ちゃん！」

私が馬車から降りたところで、既にスチュアートさんから連絡がいっていたのだろう、邸の正面玄関から、少女が飛び出してきた。

金髪に、青い瞳。そして、フリル増量ドレープ増量の青いドレス。

多少アレンジ入っているものの、不思議の国のアリスを体現した美少女が、私に抱きついてきた。

「久しぶり、アリス。元気にしていたかい？」

「ええ！　クライヴお兄ちゃんは？　怪我してない？」

「大丈夫だよ」

「クライヴお兄ちゃんは、魔法使いさんで、防御力低いんだから、無理しちゃ駄目なんだよ！」

「ああ、わかってるよ」

十歳くらいの少女が、背伸びしてお姉さんぶった口調で私を窘めてくるのが微笑ましい。

……いや、あくまでも外見が十歳なのであって、中の人の実年齢がもっと上の可能性があることは、十分承知していますとも。

でもまあ、可愛いし。そういった夢を壊すようなことは口に出さないのがマナーだ。

「スチュアートも、おかえり」

「はい、ただ今戻りました。アリスお嬢様」

「クライヴお兄ちゃんを連れてきてくれてありがとう」

「勿体無いお言葉にございます、お嬢様」

スチュアートさんは、アリスの労いの言葉に深く腰を折って答えた。

「クライヴお兄ちゃん、お茶の支度ができているんだよ。いこ！」

「ああ」

アリスに手を引かれるがまま、私は邸の庭に歩いていった。

壮麗な城を取り囲む、手入れの行き届いた、様々な花が溢れる広大な庭。

……これらを手に入れるために必要なお金を考えると、気が遠くなりそうだ。

維持費も凄いんだろうなあ。ＮＰＣのメイドさんを始め、使用人も多いから人件費とか。

このＣｒｏｓｓ世界に、最初に与えられた私室以外にも家を持つことは可能だが、現実世界相応の資金がいる。

ちなみに、金貨一枚が五万円、穴あき金貨一枚が一万円。銀貨一枚が五千円、穴あき銀貨一枚が千円、白銅貨一枚が五百円、穴あき白銅貨一枚で百円、青銅貨一枚が五十円、穴あき青銅貨一枚が十円相当、といったところだろうか。

あ、日本人感覚の一例ですので、あしからず。諸外国にはまた別の基準があるものと思われます。何しろ世界中でプレイされていますから。

今までのゲームなら数字のやり取りで済んでいたところを、使いやすさのためにデザインを数種類用意したというのだから、ＶＲというのは大変ですね。グラフィックデザイナーさん？　や、プログラマーさん？　たち、お疲れ様です。おかげさまで快適に遊ばせてもらっています。

さて、数が多くなったら、金貨を持ち歩くのもなかなか大変なので、ある程度貯まったら、運営者側が管理している銀行に預けて、そちらで決済してもらうのが一般的だ。

他には、同程度の価値のある宝石とか、アイテムでのトレードも行われている。

「ねえ、クライヴお兄ちゃん、ブチの狼って見たことある？」

甘いお茶と、少し酸味のあるフルーツを頂きながら、アリスが話を振ってきた。

「？　ブチ？　灰色狼ではなくて？」

灰色狼であれば、それは低レベルの獣系モンスターで、目新しいものではない。

「ブチ」

けれどアリスはブチと断言した。

「いや……ないな。新種が生まれたのか？」

時々、新種のアイテムや魔物、エリアを増やす目的で、アップデートが行われる。その一環かと思ったのだが、アリスの反応を見るあたり、そうでもないらしい。

「うーん、まだ、噂の段階なんだけどね？」

アリスは、小首を傾げながら続ける。

「ブチの狼が現れて、人を襲ったんだって。それも、普通の消え方じゃないの。なんか、変な消え方だったんだって」

「変？　白く弾けるように消えるんじゃなく？」

普通のモンスターは、倒したあと、身体全体が光の粒子に変換され、弾けて消える。そうじゃない消え方というのは、聞いたことがない。

「うん、なんか、しばらく身体が残ってたみたい。でね、遭遇した人は怪我して疲れちゃったから一旦街に戻って、回復してからもう一度現場にいってみたんだけど、そしたら消えてたんだって」

「……場所を間違えたとかは……ないよな」

「ないよ。マップにマーキングしてったっていうから」

それなら間違えるはずがない。

システムの一つにマップ機能があって、自分が踏破したところなら好きにマークをつけられるし、ナビ機能を使えば、マークをつけた方向に矢印を立ててくれるのだ。

「でね、ここからが大事なの。その襲われた人、ログアウトした後に気分が悪くなっちゃったんだって。ヘビーユーザーなのに」

「……本当か？」

「あー、クライヴお兄ちゃん、アリスを疑うのー？」

「すまない、アリスをじゃないんだ。……ただ、初めて聞くことだから」

むくれたアリスに素直に謝る。

健康のために二時間まで、という設定があるＶＲだけれど、実際体調を悪くしたという話はあまり聞かない。

初めてのＶＲで、初めての感覚に、いわゆる「酔った」という例ならば聞いたことはあるし、実際私もそうだったが……。

「仕方ないなあ。許してあげる。アリスも、ちょっと信じられなかったから。続けて調べてみるつもりだけど、クライヴお兄ちゃんも気をつけてね？」

「ああ、ありがとう。気をつけるよ」

私を心配してくれるアリスに微笑みながらお礼を言って……胸にわだかまるもやもや感は、甘いお茶で飲み下した。

忍び寄る不安

本日のＶＲを終えて、吉野は喫茶スペースに向かった。

「！　あ、吉野！　大丈夫か！？」

「？　何が？」

カウンター内でうろうろしていた守が、吉野の姿を見て明らかにほっとしている。

「今、様子を見に行こうと思っていたんだが、Ｃｒｏｓｓをして体調崩した人間がいるって聞いて、それで」

「とりあえず平気」

「本当に！？　だが頭の中のことだし、念のため、知り合いの病院に……っ」

「行かない」

心配性の守を、吉野は押し留めた。

特別不調は感じていない。変に心配するほうが、かえってその気になって体調を崩すのではないかと、吉野は大きく構えるつもりでいる。

……とはいえ、吉野がそう心がけていても、周りでこう騒がれては、努力が無になりかねないが。

「ところで、その情報は、いつ、どこから？　あ、烏龍茶ね」

甘いものを拒否して、吉野は指定席に座る。

「う」

懲りずにケーキとカフェオレを出そうとしていた守は、釘を刺されて固まった。

「……ええと、三十分くらい前だな。海外の大学生だと」

気を取り直して守は、ノートパソコンに表示された海外のＣｒｏｓｓ情報掲示板を吉野に見せた。

「……っていうか、英語読めないです」

英語を見せられても、内容は理解不能だった。

一応、本職は高校生。英語の授業も嗜んでいるが、あまりに見覚えのない単語が多すぎてお手上げだ。

「この掲示板は非公式で、プレイヤーの噂とか情報交換の場になっているやつなんだが、一緒にプレイしていた友人が、Ｃｒｏｓｓで見覚えのないブチの狼に襲われて、気分不良を訴えたそうだ」

「……へえ……」

注文通りに出してもらえた烏龍茶のコップを手に取りながら、吉野は感心した。

吉野が、アリスのところでその噂を聞いたのは、丁度三十分前。

アリスは、開示されたのとほぼ同時に情報を入手していたことになる。それも、ログインした状態で、外の――現実世界の情報を、だ。

一体どうやったのか、吉野には見当もつかないが、実はアリスはああ見えて腕利きの情報屋だ。何かしら、伝手や技があるのだろうと、納得する。

「とはいえ、この友人というのが曲者でな。一日二時間の限度を越えて、プレイしていたらしい」
「ああ、ハッカーだったんだ」
「そういうことだな。まあ、販売元は一日二時間の規制をかけているし、それを無視してプレイしたやつのほうに非はある。ＣｒｏｓｓＳの運営に問題はないだろう」
「そっか、良かった」

風評被害でプレイ人数は若干減るだろうが、運営そのものがストップするのでなければ、吉野的には問題ない。

「いいか、吉野。ちょっとでもおかしいと感じたら、すぐに俺にいうんだぞ？　いい医者に伝手があるからな！」
「――うん、その時はよろしく」

がっしと吉野の両手を掴んで真剣に心配してくれる守は、精悍で格好良い。
普段はおちゃらけていることも多く、からかわれることが鬱陶しいと思うこともあるが、大事に思ってくれているのは本当に嬉しいし有難いことだと、吉野は素直に思う。

……あとは、もうちょっと、今みたいなシリアスモードを増やしてもらえればな、という希望は、心の中で呟くに留めた。

同日夜。
夕食を終えた吉野が、居間でテレビをつけながら雑誌を読んでいるときに、そのニュースは流れた。

「……ＶＲのゲーム、「Ｃｒｏｓｓ　Ｍｙｔｈｏｌｏｇｙ」で遊んでいた大学生が、終了後、気分不良を訴え、病院に搬送されました」

「……」

吉野は僅かに身を乗り出し、テレビを見つめる。

「青年は病院にて数時間の睡眠をとったのち、退院しました。青年は最近体調不良であり、更に寝不足の状態で、ＶＲの一日限度時間を越えて利用していたとの証言があり、現在、ＶＲシステムとの関連を調査中です」

「……」

アナウンサーは次のニュースの読み上げに移っていたが、吉野の注意はもう、アナウンサーにはなかった。

翌日、学校ではＣｒｏｓｓの噂で持ちきりだった――などということは、なかった。

ちらほらとＣｒｏｓｓの話をしているのを聞きつけることはあっても、それは殆どが攻略の情報交換であり、吉野が耳にした、体調不良者の話題は一度。それも、さらりと流された程度だった。

「皆、案外図太い」

「何が？」

吉野の呟きに反応したのは、友人の梅沢（うめざわ）　千鳥（ちどり）だ。

「昨日のニュース、見なかった？　ＶＲで体調不良」

「え、そんなのあったの？」

軽く目を瞠って、千鳥は、吉野の隣の空席に座る。

「あったの」

吉野は簡単に、昨日のニュースを伝えた。

「……なんだ、自業自得じゃない」

「やっぱり、そう思うよね？」

話を聞き終えるなりの千鳥の第一声に、吉野は我が意を得た。

「そうよ。だって、ＶＲは二時間までなのに、勝手にいじって二時間以上、それも体調不良、寝不足の状態でやったんだもの。天罰よ。……羨ましいなんて、思わないわよ！」

最後に強がりを入れたが、そんなところまで、千鳥の反応は吉野と同じだった。

出来ることなら二時間以上プレイしたい。それは、ＶＲユーザーの多くが望むことだろう。

「千鳥は、ＶＲやってて体調悪くなったことある？」

「んー、あんまりないかなあ。あ、でも、頭痛が酷くなったことはある」

「頭痛？」

「そう、たまーに、ほら、頭痛くなるときがあって」

「ああ、知恵熱みたいな」

「そうそう、普段使ってないから、テスト前に一夜漬けすると……ってコラ！」

ノリツッコミに軽く笑いあってから、千鳥は話を戻す。

「で、それでもやっぱりＣｒｏｓｓやりたいから、やっちゃえー！　ってログインしたら、ログアウトしたときにはズキズキが酷くなってたことがある」

「ログイン中は？」

「そんなの気にしてないよ、Ｃｒｏｓｓしてるんだもん」

「うむ、立派なＣｒｏｓｓ中毒ですな」

千鳥のゲーマー魂に、吉野は腕組みしつつ、重々しく頷いた。

「人のことといえないでしょ」

「痛み止めには、はいＣｒｏｓｓ♪　用法用量を守って、正しくご活用ください」

「ぴんぽーん」

医薬品ＣＭの定番音を口に出したところで、四時間目開始のチャイムが鳴り響いた。

水仙と私

私室にて、昨日カリファに作ってもらった槍を眺める。
カリファは、見事狙い通り、発見者として鍛冶師リストに名を記した。

この槍の名は、アキレウスの槍、だった。

アキレウスはギリシア神話の人で、不死身だけれど、踵だけが弱点で、そこが死因になった英雄だ。たしか、アキレス腱の語源になったとかならなかったとか？
不死身エピソードは知っていたけれど、そうか、業物の槍も持っていたのか。勉強不足だった。

「しかし……」

カリファに喜んでもらえたのはいいが……私には使えない。
知り合いに槍使いもいないし、当分はお蔵入りだな。

いや、槍スキルがなくても、普通に武器として使うことはできる。ただ、スキルポイントをつぎこんでレベルを上げておかないと、技を発動できないのだ。
それに、武器に設定されているレベルと、本人のスキルレベルにあまりに差がありすぎる――この場合、私の槍スキルが低すぎて、槍の武器レベルが高い――と、攻撃力や命中率にマイナス補正がついてしまうのだ。それは非常に勿体無い話だ。

「やっぱり、なにか武器スキルを育てるかな。剣、槍、斧……いやしかし、日本人の心はやはり刀……」

あの優美な片刃のフォルムを眺め、手入れのために、白いふわふわで、ぽんぽんと叩いてみたい気もするが――

「刀はリーンがいるしな」

リーンは、おそらく一番多く一緒にプレイしている相手だ。

今更私が刀スキルを育てても、自己満足以外に意味は見出せない。

……というか、リーンがいるのになんでそんなの選択したんだ、と後悔する事うけあいだ。

「まあ、とりあえず保留保留」

困ったときの、問題先送り。

この槍をタンスの肥やしにすることで、誰かに迷惑かけるでもなし。

私はアキレウスの槍をアイテム欄にしまうと、待ち合わせの場所に向かうべく、私室のドアを開けた。

「あ、クライヴさん！」

待ち合わせに指定されていた、ギリシア・ローマ地区の第二ギルド横の喫茶店では、すでにユラが待っていた。

「すまない、待たせてしまったか」

ユラだけでなく、シンゴもリーンも揃っていた。約束時間より五分ほど早いが、待たせてしまったことには変わりないので、潔く謝罪する。

「大丈夫ですよ。今、立て続けに揃ったところですから」
「そうか」

空いていた、リーンの隣の席に座りつつテーブルに目をやれば、ユラの前にオレンジジュースがあるだけで、シンゴとリーンの席にはお冷すらない。

「いらっしゃいませ、何になさいますか」

三つのお冷グラスをもって、ＮＰＣのウェイトレスさんがオーダーとりにやってきた。

「緑茶を」
「コーヒーを」
「ビール！」
「はい、かしこまりました」

念のためにいっておくと、オーダー順はリーン、私、シンゴだ。シンゴは自称、二十歳以上とのこと。
……まあ、Ｃｒｏｓｓ内では、ビールやワインと言っても、ノンアルコールだ。未成年だ何だと神経質になることもない。

「んじゃ、早速。今日は何処で狩る？」
ユラの隣で、シンゴがやる気を見せた。

「あ、あの、私、ナルキッソスのイベントを、やってみたいんですけど……」
「ん？　何だ、それ？」

ユラの提案に、シンゴが首を傾げた。

「……本当に、討伐系しか興味がないんだな、シンゴ」

私はちょっと呆れた。

だって、ナルキッソスだ。ナルキッソスというとちょっと馴染みがないかもしれないが、ナルシストの語源になった美青年と、彼に恋した精霊エコーの物語は有名……あれ？　たまたま私が知っていただけで、実はそう有名でもないのか？

「ああ、その探索は、拙者もまだやったことがござらぬ。クライヴ殿は如何でござる？」

「クリアした」

「あ……じゃあ、駄目ですね……」

ユラが少し肩を落とした。

「いや、私がクリアしていたからって、ユラが諦めることはないぞ？」

リーンもやっていないというし、シンゴは……あんまり興味なさそうだが、たまには討伐系以外もやってみたらいいのだ。

「でも、クライヴさんは、つまらないでしょう？」

「そうでもない。手のかかるイベントでもないし、あそこの森では薬草採取も出来るし」

「じゃあ……」

「ああ。ナルキッソスイベントで行こう」

「はい！」

「え、結局それって、どんなイベントなんだよ？」

若干一名、ついてこれていない人がいますが、多数決です。数の暴力です。

ということで、本日のクエストは、ナルキッソスイベントに決定されました。

ぱちぱちぱち。

ナルキッソスのイベントは、手酷く女性を振りまくっていたナルキッソスに恋をした、森の精霊エコーの悲しみの記録を見た後、傲慢男ナルキッソスに、神様が天罰として、泉に映った己自身に恋をさせ、衰弱死するエピソードを追うイベントである。

……以上、独断と偏見によるナルキッソスイベントの簡易説明をお送りしました。悪意に満ち溢れている自覚はきっちりありますが、何か？

で、まあ、最後には、ナルキッソスが変化した水仙の花を、エコーに捧げて終了するわけだけれど。

「おや？」

それぞれ一輪ずつ水仙を手に持って祭壇に捧げようとしたのだが、何故だか私は、水辺に咲いた水仙を摘めなかった。

「何遊んでんだよ、クライヴ」

「遊んでいない」

取ろうとしているのに、私の手は水仙の茎を素通りしてしまう。

「何でしょう？」

ユラが不思議そうに、しっかり摘み取れた水仙と、素通りする私

の手とを交互に見る。

「――クライヴ殿、もしや、これのせいではござらぬか？」

「何だ？」

摘み取れない水仙は一先ず置いて、私はリーンが覗き込む祭壇の前に立った。

「あ」

そこには、水仙の花があった。

普通、他のパーティーがイベントをクリアした痕跡は見えない。

見えるのは、パーティー内の仲間がつけた痕跡だけ。

この場合は、水仙のことだが……。

「……取れた」

祭壇に捧げられた水仙は、私の指を素通りすることなく、持ち上がった。

「？　クライヴさん、まだ、有効期限が切れてなかったんですか？」

クエストは何度でも受けられるが、一度受けたら、ある程度期間を空けないと受注できない。

今回のように、他のキャラが受けてきたなら、パーティーを組んでいる私も参加することに問題はないが、その場合、経験値は入らなくなる。

「いや、そんなはずは……」

だが、私がこのイベントをクリアしたのは確か先月だ。受注不可能な期間はとっくに過ぎているはず。

「……」

けれど、この水仙が手に取れている以上、これは以前私が捧げた水仙のはずだ。摘まれた水仙は、他のキャラでは手に持てない仕様になっているのだから。

「……ああ、気にせず、続けてくれ」

色々気になるが、リーンたちのほうに問題はないのだから、ＶＲの制限時間が来る前に、イベントを終わらせてもらわないと。

「……うむ、承知仕った。シンゴ殿、ユラ殿、拙者らは探索を終わらせると致そう」

私の勧めに応じて、リーンがユラとシンゴを促す。

「あ、はい……」

「そうだな！」

三人がイベントを進めている間、私はジッと手元に視線を落とし――

「……ん？」

何かに見られているような気がして、周囲を見回した。

だが、三人がイベントのラストに差し掛かっている他は、目に付

くものは……ん？

「魔物？」

森の中を、さっとよぎる影があったような気がして、私はそちらを注視したが――気のせいだったのか？　魔物の気配はない。

そもそも、私には索敵スキルがある。近づく魔物があれば、視界の右上に固定させているマップ上に、赤いアイコンで居場所が表示されるのだ。

それがなかったということは、魔物ではないということ。

「……なら……人か？」

索敵スキルは、あくまで敵――主に魔物に対してのものだ。ＰＣやＮＰＣは、通常、表示されない。

しかし――ＰＣであろうと、ＮＰＣであろうと、わざわざ人目を避けるような動きをとる理由がわからない。

「……」

「お待たせ致した、クライヴ殿」

「あ、ああ……」

無事、ナルキッソスイベントをクリアした三人が戻ってきた。

「……どうなされた？　大事無いか？」

「……ああ、大丈夫だ。……なんでもない」

心配げなリーンに首を振り、私は気持ちを切り替えた。

運営者たちの奮闘

東京・某所、とあるビルの一室にて。
部屋の壁には大型スクリーンが設置され、数台のＶＲシステムが並ぶその部屋には、緊張の面持ちの男たちが集まっていた。

「あー……それじゃあ、いいか、始めるぞ？」

思い思いの場所に立つ男たちを、若干……いや、かなりやる気のなさそうな視線で見渡したのは、所々跳ねた髪に無精ひげ、くたびれた煙草を口に咥えた三十歳半ばの男だ。

「はい、チーフ」

かなり緩い開始の言葉に、それでも緊張感を保持したままの数人が、ＶＲシステムに乗り込んでいく。
ＶＲシステムの外面にはランプがついており、人が乗っていないときは無灯、シートに人が座っているときは黄色、そしてログイン中の場合は、赤く点灯している。

全てのＶＲシステムが赤く灯ったのを見てから、チーフと呼ばれた男――榊（さかき）　雅人（まさと）は、煙草を灰皿に押し付けた。

「――あー、こちらＡｌｆａ１。準備できたか？　Ｂｒａｖｏ１、２、３。Ｃｈａｒｌｉｅ１、２、３」

デスクに据えられたマイクに近づいて、呼びかける。

「ブラボー1、2、3、完了してます」

「チャーリー1、2、3、完了しました」

たった今、Ｃｒｏｓｓにログインしていった部下たちから、明瞭な返事が届いた。

それとほぼ同時に、壁スクリーンにも、Ｃｒｏｓｓ世界のギリシア・ローマ地区の風景が映し出される。

本来、ＶＲシステムに入り込んだプレイヤーは外部との連絡は不可能であるし、ＶＲ内の光景を現実世界に投影することも不可能だ。それが出来るのは、Ｃｒｏｓｓ世界を構築し、運営している側の人間だけ。

「よし。分かっていると思うが、まずは徹底調査だ。もし噂の元を見つけたとしても、下手にちょっかいはかけるなよ」

「ブラボー、了解」

「チャーリー、了解です」

榊の確認に返事をして、ブラボーチームの三人と、チャーリーチームの三人は、二手に別れて移動し始めた。

そう、彼らはＣｒｏｓｓの管理運営者。昨日起きた学生の体調不良の件について調査するために集まったメンバーだった。

「榊さん、あれって、本当なんですかね？」

壁スクリーンの画面を二分割し、ブラボーチームとチャーリーチームをそれぞれ表示させながら、パソコン前に座るオペレーターことアルファ2は、榊こと アルファ1に尋ねた。

「さあなあ……」

壁スクリーンを眺めながら、榊は気のない返事をする。
本当かどうかなど、実際遭遇してみなくてはわからない。

ブチの狼が現れたくらいならば、大した問題ではない。
実は前回の大型アップデート時に、ランダムで新種の魔物が生まれるよう、設定したからだ。
新種と言っても、外見が変わるだけ。能力値は、元となった魔物と、そう大きくは変わらない。それに本当に低い確率で設定したので、今まで新種が生まれることはなかった。
だから、ブチの狼を目撃したという情報だけであったなら、新種ですよと公式発表すればすんだのだ。

「……面倒なことになっちまったなあ……」

榊は、がりがりと髪をかき混ぜた。
ＶＲシステムで体調不良者が出たのは勿論だが、何より、倒したあとすぐに消滅しなかったというのは、非常に不穏な話だ。
そんなことは――プログラム上、ありえない。

「単純なバグだとありがたいんだがなあ……」

基本、面倒くさがりな榊は、切実にそう願う。

「アルファ１、こちら、チャーリー！」

ギリシア・ローマ地区の南、ナルキッソスの森に進んでいたチャーリーチームから、声を押し殺した様子の通信が入った。

「おう、どうした」

チャーリーチームの画面を見るが、とくに変わったところは見つけられない。

「……ｂ－５地点に、ターゲットらしきものを確認」

「何？」

榊はアルファ２に拡大表示をさせたが、しかしｂ－５地点には何もない。

少し視点を引いて、隣接する地点も見てみるが、やはり何も表示されなかった。

「……こちらでは確認できない。本当にいるのか？」

「います……！」

「……」

チャーリー１の声には怯えも混じっているようだ。演技や冗談だとは思えない。

「……Ｃｈａｒｌｉｅ２、３。カメラを使ってみろ。Ｃｈａｒｌｉｅ１は２、３の護衛だ。Ｂｒａｖｏ１、２、３、Ｃｈａｒｌｉｅの援護に向かえ。但し、まだ合流はするな。離れて様子を見ろ」

「チャーリー了解しました。撮影を試みます」

「ブラボー了解」

壁スクリーンの左側ではブラボーチームが瞬間移動魔法を発動させ、右側では、チャーリー１が周囲を警戒、チャーリー２、３はそれぞれカメラを構えた。

カメラ機能は、ＶＲ内の映像の完成度の高さに惚れ込んだユーザーたちが、冒険の記念として欲したもので、Ｃｒｏｓｓ世界でアルバムに加工すれば、自由に閲覧できる。
また、待ち受け加工を施せば、リアルのパソコンの壁紙や、携帯の待ち受けにダウンロードできるシステムであり、大変好評を博している。

「どこを狙っている？　ｂ－５か？」
「はい、そうです。一枚目が送られてきました」
「見せろ」
「左下に表示します」

早速撮影された映像を、ブラボーチームの画面を更に分割して表示させた。

「……何も写ってないな」
「はい。チャーリー２、３とも、同じ場所を狙っているようですので、彼らには本当に何か見えているのでしょうが……」

アルファ２が困惑するのも無理はない。
運営者権限をフル活用して全てを監視しているはずのこの場所で、見えていないものがある。それも、ログインしているチャーリー三人には見えているのに、現実世界から俯瞰しているこちらには見えていないなど……俄かには信じがたいことだった。

「……Ｂｒａｖｏ、そちらからは相手が確認できているか？」
「こちらブラボー１。いいえ、チャーリーたちは確認できますが……！？」

その時、チャーリー1が動いた！
慌てて剣を振り回し、見えない何かに向けて、やみくもに切りつけている。

「こっちに来た！　逃げ……うわあああ！？」
「Ｃｈａｒｌｉｅ１！　どうした！？　Ｂｒａｖｏ、援護開始！　Ｃｈａｒｌｉｅ１、２、３！　後退してＢｒａｖｏと合流しろ！」
「な、なんだこいつら、ぐ！？」
「く、くるな！　わあああっ」
「Ｃｈａｒｌｉｅ１、Ｃｈａｒｌｉｅ２、Ｃｈａｒｌｉｅ３！？」

壁スクリーンからは、パニックに陥ったチャーリーたちが勝手に転び、悲鳴を上げているようにしか見えない。
アルファ2がモニターしているチャーリーたちのＨＰにも、目に見える変化はない。

「か、肩が……！」
「痛ぇ……っ！　なんなんだ、一体……！」
「っチャーリー3、左肩を押さえています！　チャーリー2は、右腕です！」

アルファ2はそう伝えるものの、やはりＨＰに変化はない。
だが、チャーリーたちが痛がっているのが嘘だとも思えない。

「Ｂｒａｖｏ２、回復魔法！　Ｂｒａｖｏ１、敵は視認できているか！？」

榊は、ブラボーチームのヒーラーに回復を指示した。
そして、相変わらずこちらでは敵を確認できないことにイラつきつつ、報告を求める。

「ぶ、ブラボー1、い、います！　ブチの狼が、チャーリー1に噛み付いています……！」
「何匹だ！」
「さ、三匹です！」
「場所は！？」
「チャーリーたちにそれぞれ一匹！」
「Ａｌｆａ2、バインド発動！」
「は、はい！」

榊の指示を受けて、アルファ2は慌てて行動束縛魔法を発動させた。

「――効くか……！？」

バインドは本来、設定範囲内に存在する全てに影響を及ぼす魔法であるから、ブチ狼と接触しているチャーリーたちの動きも止めてしまうものなのだが、そこは運営者権限で、あらかじめチャーリーとブラボーには効かない設定にしてある。
そのため、それぞれ混乱しているチャーリーたちは、バインド発動中にも関らず闇雲に動き回れており、バインドの効果が出ているかどうかは今いちはっきりしない。

「Ｂｒａｖｏ1！　奴らはどうだ！？」

榊の側からは、その効果を見ることが出来ないため、榊はバインドの効果範囲外にいるブラボーに報告を求めた。

「ま、まだ動いています……！」
「な……！？」

ブラボー1の報告に、榊はぎゅ、と眉間に皺を寄せた。
こちらの魔法が通じないということは、物理攻撃も、いや、もしかしたらこちらからの働きかけ全てが相手に通じない可能性が出てくる。
そんな相手を、どうやって止めろというのか。

「あ、いえ、止まりました！」

ブラボー1が叫んだ。

「……そうか……」

榊は、ふう、と長く息を吐くと、チャーリーたちと一緒に画面に映るようになったブラボーに命じる。

「Ｂｒａｖｏ、Ｃｈａｒｌｉｅたちを救出。可能な限り、ブチのデータをとれ。バインドの効果が切れる前には、殲滅しろ」

「ブラボー、了解」

「……はあ、やれやれだな」

榊は、椅子に倒れこむように腰掛けた。
そして、壁スクリーンからは目を逸らさずに、煙草を一本、咥えた。

運営者たちの困惑

「あー……全員、無事か？」
「……」

榊の問いかけに、しかし返事はなかった。
たった今、Ｃｒｏｓｓからログアウトしてきたばかりのブラボーとチャーリーの六名は、皆一様に顔色が悪く、動揺していた。

……無理もない、と榊は思う。
全てが、不可解だった。

いるはずのない魔物、システムコンピューターに認識されない魔物。
だというのに、遭遇したものたちは同じものを見て、痛みを訴えた。

「……とりあえず全員、医務室へ行け。検査を受けて、明日は一日休み。具合が悪いようだったらすぐに受診すること」
「……」

それでも変わりのない六人に、榊は気付かれないようそっと息を吐き――仕方なく、業務連絡を続けてみる。

「他に、俺が聞いておくべきことは？　もしくは、お前たちが聞いておきたいことは？」
「……」

それでも反応がない。
もう一度最初から指示を繰り返したほうがいいかと、榊が考え始めたその時。

「……あの……」
「ん？」

恐る恐る、ブラボー1が、小さく挙手をした。

「……今回の結果については……いつ、教えていただけるのでしょうか……」
「……あー……」

当然といえば当然の質問に、榊は火のついていない煙草をがじりと噛んだ。

「……正直、結果を出せるほどのものが見つかったとは思えん」

捕らえたブチの狼を調査しようとしても、思うようにデータは取れなかった。
ログイン中は触れることが出来たが、それをデータとして外に持ち出すこと、送ることは出来なかったのだ。
結局、榊の側で受け取ることが出来たのは、ブラボーたちが見たこと、触ったことの、ごく簡単な感想程度。

そうして何も出来ないうちに、行動束縛の効果が薄れてきた。
再度束縛しようという案も出たが——今度も上手く効くとは限らないし、正直、それ以上調べられることもなかったので、やむなく殲滅を行った。

トドメを刺したあと、ブチの狼の身体は通常の魔物とは異なり、揺らぐように掻き消えた。

「一応、画像データを詳しく解析してみるが……どうだろうな」

今回のことは、想定外のことが多すぎる。

「……だが、まあ、とりあえずは明後日だ。お前たちが検査を受けて、特別異常がないようだったら、明後日、通常通りに出勤して来い」

「……はい」

「わかりました……」

「失礼、します……」

ようやく、鈍いながらもちらほらと返事があって、榊は安堵した。先程ログインしてもらった六人は、皆優秀な部下たちだ。この一件で一気に潰してしまったとなれば悔やんでも悔やみきれないし、Ｃｒｏｓｓの運営に一部支障がでることは間違いない。

「いいか、ちゃんと休むんだぞ」

足取り重い六人が、それぞれ退出していくのを見送って――

「……さてと。俺たちはこれからが本番だ」

「はい」

既に解析に取り掛かっているアルファ２の後ろに立って画面を覗き込みながら、榊は煙草に火をつけた。

「やっぱり、何も撮れていませんね……」
「……まあ、こっちでは何も見えんかったからなあ……」

Ｃｒｏｓｓにログイン中の人間は見れて、ログインしていない人間は見えない。
一体何が原因なのか。

「……とりあえず、バグチェックはしてみているが……」

Ｃｒｏｓｓ世界を構成するデータは膨大だ。そう簡単に終わる作業ではない。数日かかることも覚悟しなければいけなかった。

「……」

数字やアルファベットが表示されては消えていき、めまぐるしくチェックが進められていくのを眺めながら、榊は椅子にだらしなく腰掛け、天井へ向けて、ふう、と煙草の煙を吐き出す。今のご時勢、喫煙お断りの場所が多いが、ヘビースモーカーの榊は、強い要望を出して排煙装置を設置してもらった。なので、心置きなく一服する。

そして何気なく、プリントアウトされた画像データを手に取った。

「……ん？」

そのデータは、襲われた後、カメラを取り落とした拍子にシャッターが切られたものだろう。森の木々が斜めに写りこんでいた。
だが、榊の目を引いたのは、ずれた角度ではなかった。
木の陰に、何かが写っている――ように、榊には見えた。

「……ちょっと、このデータ呼び出してくれ」

「？　はい」

画像データに色々手を加えて何とか解析しようとしていたアルファ2は、榊の要望に応えて、問題のデータを壁スクリーンに表示させた。

「右側の木の陰だ」

「……ああ、なんだか、ぼやけていますね」

榊が何を気にしたのかには納得したが、しかし、アルファ2には、落ちた衝撃でブレただけとしか思えなかった。

「拡大して……ブレを修正してくれ」

「拡大は出来ますが……」

言いながら、アルファ2は直ちに問題の場所を拡大表示させた。だが、ブレを修正するというのは不可能だ。

「……代われ」

榊は、アルファ2の代わりにキーボードを操作する。手早く、しかし複雑な計算式を入力し、実行。

「っえ!?」

ブレた画像データは、数段階を経て徐々に矯正されていき、ついにははっきりとした像を結んだ。

「な、ど、どうやったんですか!?　榊さん!?」

「……」

常識を超えた結果を出した榊に、アルファ2は心底驚いて説明を請うが、しかし榊は答えない。

彼がやったのは、他の画像データ、そしてＣｒｏｓｓの通常運営時の該当地点データとも照合し、相違点を検出。一致したものは本来あるべきはずの位置にそれぞれずらし、一致しなかったもの――本来そこにはないはずのものは、見当をつけて、空いた場所に埋め込んだのだ。

大雑把に言うと、完成図が一部見えなくなったジグソーパズルを、確認出来る完成図のところを先に固め、残ったピースを、空いている場所にざくっとはめ込んだ……というところか。

が、榊はそのことを詳しく説明しなかった。彼の性格上、面倒くさいというのも大きなポイントではあったが――最大の理由は。

「……人、か……？」

「え……？」

木の陰に見える銀の色。その内側には、白っぽい輪郭。

それは――人の髪と顔のように、見えた。

「え、でも、まさか……」

言われればそのようにも見える。だが、それはありえないはずだと、アルファ2は首を振る。

「あのエリアはメンテナンスを理由に立ち入り禁止にしました！ユーザーが入り込めるはずがありません……！」

「……」

アルファ2の言葉は正しい。
運営者権限で立ち入り禁止にした場所に入り込むのは、至難の業だ。
だが……と、榊は考える。
現実世界からは見えない魔物というものに比べれば……立ち入り禁止区域にいるユーザーぐらい、可愛いものではないか？　凄腕のハッカーでありさえすればいいのだから。
「……」
問題は、どの程度の腕があればそれが可能で、何より、相手の目的は何か、ということだった。

狼と青年と私　1

海外の学生の体調不良事件後、運営者による調査が行われたようだが、原因らしい原因はハード側には発見できなかったらしい。
今では、やはり体調不良時に時間を越えてログインしていたことが原因だろう、ということで落ち着いている。
まあ、そのせいか若干、深夜あたりのログインが減っているそうだけれど、とりあえず健全に夕方ログイン、ログアウトを行っている私には実感できないことだ。

「……とはいえ……」

私はギリシア・ローマ地区にあるナルキッソスの森の手前で、一人ジェラートを食べながら、黄色いｋｅｅｐ　ｏｕｔテープを眺めている。

実はこのナルキッソスの森、現在、運営者によって立ち入り禁止区域に指定されている。
なぜかというと、どうやらこの森が、あの事件で少し話題になった新種狼の発見現場であったらしい。

「やはり、何か変だったのか？」

私が水仙を持てなかったことと、新種狼や体調不良事件の根は同じだったのだろうか。

「単純なバグならいいんだが……」

深刻なバグになったら、Ｃｒｏｓｓの閉鎖も有り得てしまう。それは非常に悲しいお知らせであるので、可及的速やかに解決していただきたいところだ。

頑張れ、運営者さん。

と、私がこっそり運営者さんにエールを送ったところで。

「ん？」

少し離れたところから、戦闘音が聞こえてきた。

私はぐるりと周囲を見渡して探索を行うが――敵の赤アイコンは表示されていない。

「……」

だが、少しずつ音が近づいてくるのは、私の気のせいではない。

もしかしたら、この前と同じバグ……障害が発生しているのかもしれない。

私はとりあえず杖を構え、警戒態勢をとった。

音は、立ち入り禁止の森のほうから聞こえてくるようだが……立ち入り禁止区域に指定したら、それこそ魔物たちだって出現しないものではないのか？

これすらも障害の一つだとしたら、問題は深刻そうだ。

「っ！？」

私がＣｒｏｓｓの未来を案じたとき、森から一人の青年が飛び出してきた。

しかもそのすぐ後には、馬ほどの大きさの――ブチの狼!?

「く……っ!」

追われるように走ってきた青年は、足をもつれさせ、地面に倒れこんだ。

「っまずい!」

新種の魔物。どれだけの魔力を持っていて、どれだけの間動きを止められるかは分からないが、とにかく青年を助ける隙をつくらなくては!

幸い、そのための魔法は、最短で起動できる設定にしてある。

「バインド!」

私のボイスコマンドを受けて、大型ブチ狼にバインドが発動される。

が――

「っ効かない!?」

大型ブチ狼は、ぴたとも足を止めることなく、立ち上がろうとする青年めがけて突進し続ける。

「どうして……っ止まれ!!」

私は、バトルメニューの魔法一覧から、青年を保護するための防御魔法を探しながらも、そう叫んでいた。

バインドを発動するための一言でもなければ、なんらかの魔法効

果がある一言でもない。
ただ純粋に、青年を襲う前に止まってくれ、という願いが篭っただけの一言だった。

「!?」
「……え……?」

だというのに――その一言の後に、大型ブチ狼の動きは、ぴたりと止まった。
青年は、目の前で突如動きを止めた大型ブチ狼に驚いているし、私だって驚きだ。

そして、やがて自分が動けないことを自覚したのか、大型ブチ狼の表情が一際獰猛になる。どうにか動き出そうとしていることが、私にもひしひしと伝わってくるのだが――その身体は、ぴくりとも動かなかった。

「――っ」

まるで三竦みのように固まった状況の中、真っ先に動いたのは青年だった。
倒れた拍子に取り落とした剣を左手で掴みとると、動けない大型ブチ狼の額中央に突き立てる!
ガッ! と、鈍い音がしたと思った次には、剣は、大型ブチ狼の額に深々と刺さっていた。

「――――ッ」

行動全てが縛られているせいで、大型ブチ狼の断末魔の悲鳴は発せられなかった。

急速に、大型ブチ狼の瞳から光が失せていくのが、私にも分かった。

「……」

ずるり、と剣を引き抜いた青年が――力を使い果たしたのか、その場に座り込んだ。

「っだ、大丈夫か!?」

そこでようやく、私は動けるようになった。いや、別に私にバインドがかかっていたわけではないから、動くということを思い出した、だろうか。

「……」

青年は――銀色の髪に、抜けるような白い肌をしている細身の彼は、血に染まっている右腕を上げ、一点を押さえていた。止血だ。

「怪我か。待て、今ヒールをかける」

「……？」

青年が、訝しげに私を見てきた。

なぜ治療してくれるのかとでもいいたいのだろうが、治療手段を持っているのに怪我人を放置する主義ではない。

「ヒール」

私は彼に向けて手をかざしながら、回復魔法を発動させた。

淡く黄色い光が、私の手から発生する。

「……」
「……」

沈黙。

……なんともいえない沈黙が、その場を支配した。
うっ。だって、どうしてか、何も起こらなかったんだ！
ヒールは確かに発動したはずなのに、青年の腕からは血が流れ続けている。
青年も、無言。
回復魔法発動させたくせに回復しないって、どんな高度ないやがらせだと思われている気がする……！　その無言は、私を責めている気がする……！

ううう、い、いたたまれない！　せめて、ボケかツッコミを！

が、私の願いも空しく、彼のほうからのアクションはなかったので、私のほうからアクションを仕掛ける。
つまり。

「ひ、ヒール！」

もう一度、唱えてみたのだ。
今度は、なーおーれー！　と念じながら。

「……あ……」

青年の口から、驚きの声が漏れた。
淡く黄色い光が、青年の怪我を暖かく包む中、みるみるうちに血

が止まり、傷が塞がっていき、そして戦闘で破れた服以外は、何事もなかったかのように綺麗になった。

「良かった。治ったな」

いや、本当に良かった。今度は効いて。これで、嫌がらせではないと思っていただけたことだろう。

「他に、痛いところはないか？」

ぱっと見、怪我は右腕だけだったが、もしかしたら他にも怪我をしているかもしれない。

切り傷打ち身ぐらいなら、今の回復魔法で一緒に完治したはずだが、もしまだ他に痛いところがあるのだったら、もう一度唱えるつもりだった。

「……いえ、ありません。……その、感謝いたします」

「どういたしまして」

頭を下げて、丁重にお礼をいってくれた彼に、私はにっこり笑って見せた。

狼と青年と私　2

「いや、驚きだな」

私は、ようやくバインドの効力が切れたのか、どすん！　と大きな音を立てて地面に倒れこんだ大型ブチ狼に歩み寄り、その身体を眺めて呟いた。

「……何がでありますか」

「この大型ブチ。初めて見る。それに……身体が消えていない」

通常、魔物は、トドメを刺したら光となって弾け飛ぶのに。

大型ブチ狼は、まだその身体をさらしている。

……少し、気味が悪いな。

「……」

青年が、無言で私の隣に並んだ。

彼にとっても初めてのことだったのだろう。まだ緊張が続いているのかもしれない。

わかるぞ、うん。こんなのに一人で、しかも怪我した状態で追い回されるのは怖いよな。

私は、青年の精神状態を慮って、話題を変えることにした。

「ところで、なんで立ち入り禁止区域に入っていたんだ？　というか、どうやって入ったんだ？」

普通、運営者権限で立ち入り禁止にされたところには、踏み込めない。警告音とともに弾き返されるのがオチだ。

「……」

私の質問に、青年は無言。

まあ、不法侵入したんなら、それは犯罪なのだから、黙秘したくなる気持ちもわかるが。

「――ああ、それともしかして、貴方は運営者のプレイヤー？」

もう一つの可能性に思い至って、私は、ぽんと一つ手を打った。

「……」

が、これにも青年は乗ってこない。

……なんだ？　あれかな？　運営者プレイヤーですとは、そうそう言っちゃあいけない決まりでもあるのかな？　運営者権限もちのギルド受付嬢ネネさんも、最初は隠していたし。

「……最近、ここでブチ狼が目撃されたと聞いたが、その件を調査に？」

「……はい」

もう一歩踏み込んだ私の質問に、青年はようやく頷いてくれた。

運営者プレイヤーさんなら、敬意を払って口調を変えようかと思わないでもなかったけれど……結局彼は肯定していないし、クライヴのキャラを通すことにする。

「だがそれなら、一人で来るのは……ああ、もしかして、他の仲

間は……？」

あの森で既にやられてしまったのかと、私は森に視線を戻した。

「――いえ、もともと自分一人で調査に来ました。……適任が、自分だけでしたので」

「なるほど？」

適任、というのがちょっと引っかかったけれど、要は、いつもパーティーを組んでいる人の都合がつかなかったということで、いいんですよね？

でも調査は急がなくてはいけないから、とりあえず一人で来てみた、と。

なんにしろ、森の中に倒れている人が居るんじゃなくて良かった。立ち入り禁止区域には、私では入れないからな。

「その……ご迷惑を、おかけしまして、申し訳御座いません」

「？　ああ、怪我の治療のことなら、気にするな。それくらい、大した手間ではない」

何しろ、回復魔法を二度だけだ。ああ、バインドも一度使ったけれど、それらが消費するＭＰ程度、痛くも痒くもない。

「……」

なので気にするなと告げたのだが、青年は何か考え込んでいる顔だ。

「もしお礼を考えてくれているのなら、このブチ狼の情報を聞かせてもらえると有難いのだが……って、消える？」

私の目の前で、大型ブチ狼は、じんわりと……まるで、水が土にしみこむような感じに薄くなり、消えていった。

「……」

その様子を、私と青年は声もなく見守った。

……これは……いよいよ本格的なバグですか？
あー……参ったなあ。Ｃｒｏｓｓ休止かなあ。

「……ご安心ください」
「ん？」

困った私が、溜息一つついて腕組みで悩んでいると、青年がぽつりと呟いた。

「あれらは……自分たちが近いうちに殲滅致します」
「あれらとは……ブチ狼？」
「はい」

青年ははっきりと頷いた。

ふむ、そうですか。
運営者様の名誉にかけて、ブチ狼という名のバグは、近々一掃してくださるのですね？

「わかった。頼りにしている」
「――はい、お任せください」

私の言葉に、青年ははっきりと頷き――微かに、笑んだ。
おお、クール系美人の微笑み！
私は思わず見惚れた。

何しろ彼は、美形が多いこのＣｒｏｓｓ世界の中でも、飛びぬけて美人さんだ。
美しい銀色の髪のさらさらさ。
シミ一つない白い肌。……この肌に怪我させたなんて、あの大型ブチめ、何度苛めても苛めたりん！　まあ、回復魔法かければいいんだけどね。
そして深く透き通った、綺麗な蒼い瞳。

いやあ、眼福ですね。
なんだか、口調が固くて、ちょっと軍隊チックなところも、ストイックな感じで、いいキャラ作ってますね、お兄さん！

「……そういえば、まだ名前も知らなかったな。……聞いてもいいか？」
「はい、自分はロアと申します」
「クライヴだ。よろしく」
「よろしくお願い致します」

私が差し出した手を見て、一瞬戸惑ったロアだったけれど、すぐに私の手を取ってくれた。

「……はあ」

ロアと別れて街に戻ってきた私は、彼と出会ったナルキッソスの森のほうを眺めながら溜息をついた。

何故って、振られてしまったのだ。ロアに。
せっかくの美人さんとの出会い。私はこれからも仲良くしたいと思ってフレンドリストへの登録を申し出たのだが。

「……フレンド登録、ですか……？　……いえ、申し訳ありません、辞退させていただきます」

と、拒否されてしまった。

「……まあ、ガード固そうだったからな」

私はまた、溜息をついていた。
相手の承諾がないと、自分のフレンドリストに登録ができない。フレンドリストに登録していないと、音声通信やメールを送ることも出来ない。
つまり、ロアと連絡を取ることが出来ないので、彼に会うには、偶然を願うしかないわけだ。

「……今日はもう、上がるかな」

まだ少し時間は残っているけれど、美人さんにふられたショックで、ゲームを楽しむ気力をなくした私であった。

先輩と後輩

「あれ、吉野!?」

吉野が喫茶スペースに入るなり、守が驚いた。
カウンターから出て、吉野に駆け寄る。

「まだ二時間じゃないぞ、どうした?」
「あー、平気。ちょっとキリが良かったから、早めに終わらせただけ」

心配する守に、吉野は笑いかけた。

「キリが良かったって……そのくらいで早めに上がるお前じゃないだろう!? いっつも時間ぎりぎりまで粘って、スキルの熟練度上げをしているのに!」

が、その程度の言葉では、守を宥めることはできなかった。

「……いや、まあ、そうだけど……」

吉野の笑いが引きつった
確かに、たとえ五分しか残っていなかったとしても、吉野はちまちまと魔法を使って、スキルの熟練度をあげていた。
そんな吉野が、三十分も早く上がってきたのだ。心配性な叔父でなくとも心配する……かもしれない。

「どこか痛いか!? 気分が悪くなったか!? そうだ、救急車

を……！」

「やめい！」

大慌てで携帯を構えた守に、吉野はハリセンアタックした。

すぱーん！　と景気のよい音がする。

「ん？　いつもの感触だ」

さして痛がる素振りも見せず、守は叩かれた頭を軽くなでた。

「何だ、本当に早く上がってきただけか？　テレビの録画でも忘れたか？」

「……あー、もう、それでいいから」

吉野は訂正する気力もなく、重い足を引きずって、指定席に座った。

「今日はペパーミントティーね。お茶菓子無しで」

今は甘いものではなく、すっきりしたものが欲しい気分だったので、吉野は素早くオーダーした。

「……おう」

オーダー前になにやら取り出しかけていた守は、吉野に気付かれないよう、手に持っていたものをそっと隠した。今日も懲りずに用意していたケーキだ。

「いやあ、先輩も姪っ子ちゃんにかかったら形無しですねえ」

「？」

くすくすという笑い声を聞きつけてそちらを見れば、吉野の指定席から三つほど離れたカウンター席に、所々跳ねた髪に無精ひげ、咥え煙草の男――榊が座っていた。

「ええと……叔父の後輩さん？　ですか」

「そ。榊　雅人。大学時代に、桜庭先輩の後輩やってました。よろしくね、吉野ちゃん」

「はい、初めまして、よろしくお願いします」

榊は煙草をもみ消しながら自己紹介し、吉野は応じて丁寧に頭を下げた。

そして。

「叔父なんかの後輩をしてらしたとは……さぞ、ご苦労なさったことでしょう……」

しみじみ呟いた。

「……ああ、わかるー？　吉野ちゃん」

一瞬、きょとんとした榊だったが、すぐににやりと笑うと、吉野の隣に移って切々と語り始めた。

「もうね、この人横暴でね。いや、確かに腕はいいのよ？　けど、わが道をとことんいって、一般人の俺らまで無理矢理ハイレベルの予定につき合わせて、そのくせ、ついていけない人間はとことんこき下ろして、俺たち後輩のガラスのハートを粉砕しまくってくれちゃったのよー」

「まあ、酷いですねえ」

「酷いよねえ」
「な、なんだなんだ吉野！　お前はそんなやつのいうことを信じるのか！？」
最愛の姪の非難を受けた守は、蒼ざめ、無実を訴える。
「俺は、ついてこれると判断した奴らしか、しごきぬいていない！」
あれは愛の鞭だ！　と熱弁する守だったが、熱血ドラマは吉野の好みではなかった。
「いや、そもそもしごきっていうのが信じらんなーい」
「俺も信じらんなーい」
吉野の言動にあからさまに動揺する、前・傍若無人先輩、現・姪っ子溺愛先輩が面白くて、榊は吉野に肩寄せて便乗した。
「「ねー」」
吉野も吉野でノリがいい。短いやり取り中にも相性の良さを実感した二人は、声を揃え、顔見合わせて笑いあった。
「っが――――ん！」
守はショックの余り立っていられなくなり、座り込んで、カウンターの陰に隠れてしまった。「がーん、がーん」とショックの擬音を呟き続けている。
「それで、榊さんはどうしてここに？」

守がショックを受ける前に用意してくれていたペパーミントティーのカップを手に取りながら、吉野は訊いた。ショックを受けている叔父へのフォローは、まだしない。

「あー、まあ、たまには先輩と交流をもっておこうと？」

「ああ、たまでいいなら、まあ……付き合うのも楽しい……です？」

どちらも疑問系であった。

「あはは、楽しい……かはともかく、有意義であることもあるのよ、これが」

「まあ、そういうことも、ないでもないでしょう」

二人とも、息を合わせて守を貶しているが、そこに悪意は存在しない。根底には、確固として、親愛が存在している。お互いの表情や声の調子から、その点では合意した。

二人は笑いあうと、揃って、カウンター下部に消えている守を見やった。立ちもせず、座ったままなのでカウンターしか見えないが。

「今回は有意義でした？」

「うん、まあまあかな？　吉野ちゃんのことについて、随分詳しくなったと思うのよ、この短時間で」

「え」

吉野は固まった。

「いやー、可愛い女の子の話を聞くのなんて、どれぐらいぶりかしら。若いっていいねえ、青春っていいねえ」

「……あー……そんな、若さや青春を謳歌しているとは……ちょっと思えない今日この頃だったりしますが……」

我が身を振り返ると、Ｃｒｏｓｓ漬けの毎日である。勿論、それだけではないが――もし今、走馬灯を見る破目になったら、それは一連Ｃｒｏｓｓだろうと、吉野は思う。

悔いはない。何十年経ったって、Ｃｒｏｓｓに費やした日々を無駄に思うことはないと、そう思うのだが――しかし、この毎日が、若さ、青春であるとは……それも少し違うような気がする。

「そう？　うん、でもまあ、今を楽しんじゃってちょうだい。勉強でもスポーツでも、ＶＲでも。今の吉野ちゃんが好きなものをね」

「あ、はい。もう、一日二時間、きっちり楽しませてもらってます」

「……の、割に、今日は早かったらしいけど？」

「……あー……ちょっと、フレンド登録を拒否されちゃいまして。精神的ショックが」

「何！？　俺の吉野を拒否するとは、一体どこのどいつだ！？」

がばり！　と守が復活した。

「銀髪に蒼い目の、イケメン」

「なっにいいいいい！？」

本日一番の衝撃発言に、守は頬に手を当てて絶叫した。ムンクである。

可愛い可愛い吉野が拒絶され、心に傷を負ったのは許せないが、しかし悪い虫がつかなかったことに対しては、感謝したい。

そんな二律背反に陥り、守は混乱している。

「へえ、そんなに？　おじさんなんかは、美人が氾濫しすぎて、なんかもう、似たような感じにしか見えなくなっちゃってるんだけど……これもトシかしら」

「あ、それちょっとわかります！　特に、プリセットが基本にされているキャラは、私も区別つかなくなったりします！」

Ｃｒｏｓｓは、拘りぬいて、一から全てを作り上げることも可能だが、そこまでキャラクターの造形に興味がない、もっと手軽に楽しみたいプレイヤーのために、二十くらいの男女の基本容姿を用意してある。それをそのまま使うもよし、そこから自分好みに色を変えたり、パーツを変えたり、形を微調整することも可能だ。

手を抜いた、というと言葉は悪いが、プリセットを基本にしたキャラクターも多く、知り合いと姿が被ったという話もたまに聞く。

「でも、その人は多分プリセットじゃない美人さんですよ。それか、かなり拘ったプリセット。今までＣｒｏｓｓ世界で美人はたくさん見てきましたけど、その中でもトップクラス！　また会えれば眼福だな、と思うほどでした。まあ、それも無理そうですけど」

Ｃｒｏｓｓの世界は広い。偶然出会える可能性は低いだろう。

「そうなの？　名前は？　そんなに美人さんなら、俺もみてみたいわー」

「ロアです」

「ロア、ね。銀髪の美人さん。よし、今度ログインしたら、ちょっと注意して捜してみちゃおう。もし見つけたら、吉野ちゃんにも教えようか？」

「あー、非常に心惹かれるお申し出ですが……私、プレイキャラは秘密主義なんです」

「そうなの？　じゃあ、目撃情報だけ、ここで教えちゃおう」

「あ、それなら大歓迎です！　ちなみに、最終目撃地点は、ギリシア・ローマ地区の、ナルキッソスの森周辺です」

吉野は、ロア捜索の参考になればと、軽い気持ちで教えたのだが。

「……へえ」

その情報は、榊には別の意味を持った。

ナルキッソスの森。そこは、ブラボーとチャーリーたちが、ブチ狼に遭遇した場所。

そして――画像データにあった、銀色。

「……わかった、じゃあ、今度そこも見てみるわ」

それも、早急に。

榊は、帰ったらすぐに確認しようと、心に決めた。

報告と沈黙

テントの中、毛布を敷いただけの寝床で、青年は目を覚ました。
銀色の髪がさらりと動き、蒼い瞳が覗く。

「――おお、戻ったか、ロア」
「……はい、隊長」

ロアはすぐさま身を起こして姿勢を正すと、隊長に敬礼をした。

「ただ今帰還いたしました」
「うむ」

隊長は、傍にいた副隊長に部隊の指揮を任せ、テント内の人払いをした。
テントには、隊長とロアの二人だけになる。
人払いは済んでいるし、隊長用のテントには、盗み聞き対策のために防音の魔法が使用されているので、ここでの会話が外に漏れることはない。

「すでにこちらでも成果は出ている。良くやったな」
「は、光栄です」

上官の労いに、ロアは再度の敬礼で応じた。
ロアの任務は、逃げだした魔物の討伐だった。

クライヴ曰くの「大型ブチ狼」は、ロアたちには「マナ喰い」という通称で知られている。

その名の通り、マナ――魔法を行使するために必要な、世界に満ちているエネルギーと定義されている――を喰うのだ。大量に。
そして喰った分だけ、強く、大きくなる。

その被害を放っておけなくなったので、討伐することになったのだが……勿論、ロア一人に全てが任されたわけではない。
隊長以下、ロアを含めて、総勢十数名で討伐に当たった。

で、あるのに、クライヴと遭遇したのがロアだけだったのには、理由がある。

マナ喰いたちに対する包囲作戦を展開し、順調に倒していたのはいいが、群れのリーダーである、あの大きな魔物が、囲みを強引に突破して逃げ出してしまったのだ。
当然、逃がすわけにはいかない。だが、あの状況下で、逃げ出したマナ喰いを追えたのは、ロアだけだった。

「しかし、あれだけ大きなものは初めて見たな。お前一人で戦うのは大変ではなかったか」

数人がかりで相対していたのに取り逃がしてしまったのだ。いくらロアが優秀な剣士であっても荷が重いと、隊長は判断していた。
だが、ロアは隊長の予想を裏切って、見事討伐を成功させた。これは嬉しい驚きであった。

「はい。実は……現場に居合わせた方に、ご助力いただきました」
「何？　……どのような人物だった？」
「はい。……強いマナを、感じました」

ロアは、怪我をしていた右腕を差し出した。

「自分は、対象の討伐に苦戦しておりました。この引き裂かれた箇所は、対象の爪によって引き裂かれたものであります」
「何？」
隊長は早足でロアに寄ると、その右腕を掴んだ。
まじまじと観察するが、どこにも傷跡は見られない。
もし服が切られていなければ、嘘をつくなと叱責していたところだ。
「……どういうことだ？」
「現地の方が、自分に回復魔法を使用してくださったのです」
「……驚きだな」
隊長はもう一度ロアの腕に目を落としたが、何度見ても、そこを怪我したとは思えなかった。
それほど完璧に治療することは、彼らの常識では有り得なかった。
「……流石、というべきか……」
「……」
意見を求められたわけではないので、ロアは沈黙を守った。
実はロアには、報告するべきかどうか迷っていることがあった。
彼――クライヴの魔法のことだ。
回復魔法の効果は勿論だが、動きを止めるための魔法を、ロアはあの時初めて見た。
そもそも、ロアが討伐しようとしていたあの魔物は、魔法に対しての抵抗力が強く、ちょっとやそっとの魔法では効果がない。

だというのに、魔法を標準の威力で発動させるには必要不可欠であるはずの詠唱をカットした状態で――つまり、本来よりも低い威力の発動で――あの魔物の動きを、止めて見せた。

そして何より驚いたのが、彼が使用した魔法に対して消費されたマナの少なさだ。

あの時に彼が消費した、あの程度のマナでは、あれだけ強力な魔法効果は発揮できない。少なくともそれが、ロアたちの常識である。

報告すれば、隊長は確実に興味を抱くだろう。

再度の接触を試み、彼に対して協力要請をしろというだろう。

――報告するべきであると、ロアの理性は告げる。

「……」

だが、それをしたら、あの人の迷惑になるのではないかと思うと、報告は躊躇われた。

隊長のことは信頼している。だが、その上に居るものたちのことを、ロアは信用していなかった。

彼のことが上にまで知られれば、彼は……きっと、研究対象として扱われる。

人としてではなく、実験動物として扱われてしまう。

「……」

未だ隊長が考え込んでいるので、ロアも沈黙を守ったまま、ゆっくりと瞳を閉じた。

脳裏に浮かぶのは、濃紺の髪に紅い瞳の彼。

ロアが知る魔道士とは違って、偉ぶらず、気さく。慈悲深く、ロアを心配して助けてくれた彼。

助けてくれた彼に、恩を仇で返すようなことはしたくない。
そのためには――

「――よし、わかった。上には私から報告しておこう。他に、何か気にかかることはあったか？」

「……いえ、ありません」

気がつけば、ロアは、そう答えていた。

「うむ。では、下がってよい。ゆっくり休むといい」

「は」

退出の許可を得たロアは、敬礼をした後、踵を返す。
そして、「やはり報告を」などと考えて足を鈍らすこともなく、速やかにテントを出ていった。

噂と私

私がＣｒｏｓｓにログイン出来たのは、約束の時間を少し過ぎてからのことだった。

「――っすまない、遅れた」

ギルド隣のカフェで、既に集まっていたリーンたちに、まず詫びる。

「おっせーよ、クライヴ。怖気づいたのかと思ったぜ」

「クライヴさんが怖気づくわけないじゃないですか、シンゴさんじゃあるまいし」

茶化したシンゴに、ユラが若干冷たい視線とともに言い放った。

「……なあ、なんで俺ってそんなに評価低いの？」

……うむ、それは今私も思った。

シンゴは、気弱なタイプではないと思うのだが。

「日頃の行いじゃないですか？」

「え、俺ってば、頼れる戦士、リーダータイプなのに！？」

「え、どこがですか？　このパーティーの、頼れる魔道士、冷静沈着なリーダーはクライヴさんですよ！」

「えええ！？」

シンゴの声に、私も内心で、えええ！？　とハモった。

一体いつの間に、私はリーダー認定されていたのだ？　むしろ私は、その手の役職は避けたいところだぞ。

「クライヴ殿、何か大事でもござったか？」

「いや、ただ……少し、心配性な身内がいてな……」

いつも通りに漫才的なやり取りをするシンゴとユラを、これもまたいつも通り聞き流しながらリーンが尋ねてきたのに、私は遠い目をした。

結局、学生の体調不良事件の真相ははっきりしないままだ。

その上で最近、Ｃｒｏｓｓ中、あるいはログアウト後に体調不良を起こす人間が続いた。

そのため……まあ、騒いだのだ、叔父が。

「あんな危ないものに、吉野を任せられるか！！」と。

叔父の心配は、有難くもあるけれど、それでも私はＣｒｏｓｓをしたいのだ。

今日のリーンたちとの約束は、体調不調事件の前から計画されていたことだし、何としてもログインするつもりでいた私は、ＶＲ喫茶で叔父を宥めるのに手間取ってしまった。それゆえの遅刻である。

「ああ、それ、なんか、新種の魔物が出たんだって？」

ユラとの漫才的会話を中断して、シンゴが身を乗り出した。

「あ、私も聞きました。体調不良になった人は、その新種に襲われた人たちが多いって」

「ああ、そのようだな」

シンゴとユラが仕入れた情報は、私の耳に入ったのと同じだった。
ちなみに、私の情報源はアリスだ。

その新種は、当初ナルキッソスの森周辺に現れたらしいが、今はもっと広範囲に目撃情報があり、出現が確認された地点は立ち入り禁止区域に指定された。
そのため、現在Ｃｒｏｓｓ世界は行動可能地域がかなり制限されてしまっていて……ユーザーからの不満の声が目立ち始めている。

「……どうやら、かなり深刻なバグのようだな。索敵マップにアイコン表示がされないし、カメラを向けたものもいたようだが、撮ったはずなのに、撮れていなかったらしい」

なんと、凄腕情報屋のあのアリスすら、新種の詳しい情報を持っていなかった。
どうやら、簡単に終わる障害ではなさそうだ。

「拙者が聞いた話では、それだけではなく、攻撃が通りにくいらしいでござるよ」
「固いのか？　俺、ぶったぎるぜ、クリティカル倍で！」
「クライヴさんの魔法もありますし！」

シンゴがぐっと腕を曲げて力瘤を見せつけ、ユラが私にきらきらとした瞳を向ける。
……ユラは、私に対する評価が高すぎる気がするのだが……何故だろうな？

「否、厄介なことに、物理も魔法も、効き辛いと聞いたでござるよ」

「では、何か弱点が？」

物理も魔法も効き辛いとなると、イベントモンスターの可能性が出てくる。

一部のイベントモンスターだと、特殊アイテムが必要だとか、身体の一部に弱点ポイントがあるだかして、的確にそこを突かないと倒せなかったりするのだ。

そんなイベントモンスターが、そこらの雑魚敵の如く一般フィールドに出没するのは、妙といえば妙だが……まあ、だからこそバグだともいえる。

「否。とにかく手数で少しずつ少しずつ削り、どうにか討伐したそうでござる」

「うわー、戦いたくねえー」

シンゴが嘆いた。

うむ、激しく同感だ。

シンゴと私は、方向性が違うとはいえ、一撃必殺を望む点は同じだ。

シンゴは敵を一刀両断する爽快感をバトルに求め、私は、敵を一網打尽に出来る火力を魔法に求めた。

……シンゴと違い、私は、戦闘はなるべく早く、手軽に終わらせたいのですよ。

ええ、ものぐさです、面倒くさがりです、ナマケモノです。自覚してますよ。

ということで、私もシンゴも、さくっと殺れない敵は極力ご遠慮申し上げたい次第だ。

「……いや、待てよ。いくら新種でも、急所はあるだろう」

ふと思いついて、私は訊ねた。

このＣｒｏｓｓでは、首を折るとか、心臓を貫かれるとかすれば、ＨＰに余裕があっても一撃死判定だ。それだけ面倒な魔物を相手にしたのなら、一撃死を狙わないはずがない。

「……一度、剣攻撃が喉元に、偶然のように入ったそうでござるが……弾かれたとのことでござる」

「……固かったのか」

「左様でござる」

頭痛を感じて、私は額を抑えた。

物理攻撃に対して固いのなら、刃は弾かれるだろう。いくら急所でも、突き刺さらなければ意味がない。

隙がないな、新種。

「その、新種の魔物って、どんなものなんですか？」

ユラがリーンに訊ねた。

リーンもまだ遭遇していないと言っていたが、倒しきったフレンドがいるのなら、その外見くらいは聞いているだろう。

私も、リーンの情報が欲しくて答えを待った。

「ブチの灰色狼といっていたでござるよ」

「へえ……灰色狼って、序盤の魔物ですよね？　それが新種になったからって、いきなりそこまで強くなるなんて……そんなにゲームバランス、悪くないはずですよね」

ユラの言う通り、Ｃｒｏｓｓはゲーム内のバランスが良好だった。少なくとも、今までは。

だが、それよりも私が気になるのは……ブチの灰色狼、というところだ。

以前、私が遭遇した大型ブチ狼。あの外見がまさに、ブチの灰色狼をそのまま大きくしたものだった。

――しかし、である。

「……」

確かにあいつは、最初、私のバインドに微塵も反応しなかった。その点は、魔法が効き辛いと見ていいだろう。もしかしたら、魔法そのものが効かないことも有り得るかもしれない。

だが――彼は……ロアは。

大型ブチ狼を倒した。それも、一撃で。

アリスから外見を聞いたときにも思ったことだが……今話題になっている新種の灰色ブチ狼と、私が遭遇した大型ブチ狼は、同一存在と考えていいのだろうか？　それとも、別の存在なのだろうか？

あるいは、バグであるから――その個体、討伐方法に、バラつきがあるのだろうか？

ロアが偶然、大型ブチ狼の弱点を突いたことだって十分有り得る。渾身の力を込めて一突きすれば、固い表皮も貫けるのかもしれない。

……どちらにせよ、論じて答えが見つかるものでもないし……ならば実地で検証だ！　などという熱い展開などには、私はしない。

「――ね、どうですか、クライヴさん！」
「？　ああ、すまない、聞いていなかった。なんだ？」

考えに耽っていたところに、ユラがずずいと顔を寄せてきて、私は我に返った。

「もうっ。もしかしたら、大規模メンテナンスで、こちらで会えなくなるかもしれないじゃないですか。ですから、よければオフ会しませんかって」

オフ会――Ｃｒｏｓｓ世界でクライヴとしてではなく、現実世界の吉野で会おうということだけれど……。

「……すまないな。私は不参加で」
「ええー！？　どうしてですか！？」
「なんでだよー、クライヴ。あ、もしかして、ものすっごいダサ男だとか！？」

提案者らしいユラが残念がるのは当然だが、オフ会に乗り気だったらしいシンゴも不満を露にした。

……というか、なんだ、そのダサ男とは。いや、それだけ私の男演技が素晴らしいのだな。うむうむ。

「なあ、リーンは？　こうなったら数の暴力だぜ！？」
「む……申し訳ござらぬ。拙者も参加できぬでござるよ」

シンゴはリーンを引き入れて三対一にしようとしたが、リーンは私にちらりと視線を向けた後、苦笑しつつ辞退した。

「「ええー」」

シンゴとユラが不満の声を上げた。

「……というかユラ、シンゴ。お前たちは、このＣｒｏｓｓは世界規模だということを、忘れてないか？」

ＶＲシステムの、非常に優秀な同時通訳機能によって自動翻訳されて、各自の母国語に聞こえている仕様ですが、同国人とは限らないのですよー？

下手したら、オフ会のために、国境越えろということなのですよー？

「「……あ」」

案の定、そんな可能性は綺麗さっぱり忘れ去っていたらしいユラとシンゴは、声を揃えて固まった。

運営者たちの対応

「……まいったねえ……」

がりがりと、榊は苛立たしげに髪をかき混ぜた。もともと収まりの悪い髪が、更に収拾のつけられない状況になっている。

「どうしますか、主任」

「問題はそれなんだよ……」

榊は煙草のフィルターをがじりと噛んだ。

海外の学生が倒れた事件は、とりあえず疲労状態における違法接続ということで収まった感じだが、それ以降の体調不良報告には、そうではないものもかなり含まれていた。

共通するのは、例のブチ狼との交戦だ。

どうにか殲滅したいところだが、モニター越しではどこにいるのかもわからない。外側から捜せない状況では、ログインして地道にやるしかない。

ただでさえ遭遇率が低くて効率が悪いというのに、それに拍車をかけるのが……有効な討伐手段がない、ということだ。

「魔法も物理もきかないって、どんだけチートよ」

心底疲れた声で、榊はぼやいた。

手段を選んでいられないから、運営者チームは、キャラクターを、チート……卑怯なくらいに徹底的に強化して臨んだ。

レベル最高、装備最強。ＨＰ満タン、ＭＰ満タンは当然。そして、一撃掠れば即死という、本当に卑怯なアイテムを特別に作って持たせまでしたのに――効果がなかった。

あのブチ狼たちには、運営者権限など、なんの効果もみせなかったのだ。

「自信なくなるわぁ……」

榊の知る常識が全く通用しない相手。

これでもコンピュータープログラムの世界では名が知られていた榊は、非常にがっくりときていた。

「……開発者の人は、なんていっていたんですか？」

榊が、外部の人間――ＶＲシステムの根本を作った人間にアドバイスを求めにいったのを知っていた部下が尋ねるが。

「……知らんってさ」

「そんなあ」

部下の反応は、まさにあの時の榊の反応であった。

新種の魔物が、運営者の手に負えない可能性というのは、二つある。

一つは、物凄い、凄腕のハッカーが、なんらかの目的でＣｒｏｓｓ世界にちょっかいをかけてきていること。

この可能性に対する答えは、「そんなやつらの目的なんて、俺が知るかよ」という、ある意味、道理なお答えであった。

運営者以上に腕利きなのであれば――これでも、ここにいるＣｒ

ＯＳＳ運営者たちは、日本でも有数の技術者たちなので、彼らの目と腕を掻い潜ったとしたら、その腕前は非常に優秀で恐ろしいものである――こちらに何の痕跡もつかませないのも仕方ない。

これに対抗するには、相手以上の技術者を味方に引き入れるしかない。

そしてもう一つの可能性は……可能性の一つに数えはしたが、榊は、こちらの可能性はほぼないだろうと、考えていた。

考えてはいたが――一応、訊ねてみた。

もし、仮に、万が一！　自動生成プログラムが変に進化して、コンピューターが自我を持ったりした場合、どうなるか。

コレに対しては、「コンピューターの考えなんざ、俺が知るかよ」というものであった。

全く持って参考にならないお答えに、榊はがっくりと項垂れた。

流石にそれだけでは悪いと思ったのか、苦労している榊を憐れに思ったのか。意見が付け足された。

曰く、「自動生成」はともかく、「自己進化型」のプログラムは、まだまだ未知数なので使用できない設定にしてある。全く新しい技術で作った自己進化型プログラムを搭載したのでない限り、プログラムの制限を越える反応が出ることはない……つまり、現状、コンピューターが自我を持つことは有り得ない、ということらしい。

「……少なくとも、一つの可能性が消えた、と思っちゃったんだけどねえ……」

少しだけ浮上した榊に、更なるショックが落とされた。

「物凄い天才ハッカーが、ＶＲシステムに不正アクセスして新型自己進化プログラムを投入して、結果コンピューターに自我が生まれたのだとしたら、どうしようもねえな」と。

非常に大変そうで、面倒くさそうな事態を想定されて、榊は――そのことについて考えることを、放棄した。

そんなことが起きていたとしたら、本当にどうしようもない。一体どういう対応を取ればいいのか、さっぱり予測が出来ない――ので、現実に起きたときに考えよう、と丸投げにしたのである。問題の先送りだ。

まあ、実際どういうことになっているかもわかっていないのだ。結局的の外れた推測かもしれないのだから、今心配しなくてもいいだろうと自分に言い訳した。榊は基本、ものぐさなのである。

「……まあ、不幸中の幸いというか、協力はしてくれるっていってくれたから」

まず、知る限りの、ＶＲシステムをハッキング出来そうな人間のリストをくれた。

このリストは、今、他の部下が地道に検証作業中である。

そしてもう一つ。

ＶＲシステムの根本を設計し、更にはＣｒｏｓｓのアイディアを出し、プログラムにも参加した彼自らが、裏コードも駆使して原因究明に尽力してくれるそうだ。

「なので、今俺たちがしなくちゃならないことは、被害を最小限に抑えること」

運営者権限を持ったキャラをＣｒｏｓｓ世界に警備目的で配置し、

警戒に当たらせる。可能ならば、灰色ブチ狼を討伐する。

「そんでもって、もう一つ。こっちは俺らの雇い主さんから。客を逃がすな、とのお達しだ」

「はあ……」

露骨な言い方に、部下は眉を顰めた。

それは確かに、ここ最近の噂のせいでユーザー離れが見受けられるし、他のゲームにユーザーが流れていく傾向も見受けられる。

ユーザーの減少は利益の減少であるから、逃がしたくないのはわかるが……。

「だからといって、ユーザーの安全を無視するなんて……」

「……そこで俺は考えた」

「なんですか？」

「ＡＲＧをしてみよう」

「ＡＲＧ……ですか」

ＡＲ――Ａｕｇｍｅｎｔｅｄ　Ｒｅａｌｉｔｙ。拡張現実。

ＶＲと対を成す概念で、現実の環境の一部に、バーチャルな物体を電子情報として合成提示することだ。

例えば、対応機械のカメラで、現実世界に置かれた仕掛けにピントを合わせると、対応画面に、その現場風景と、画像なり文字列なりを合成して表示する技術である。

つまり榊は、Ｃｒｏｓｓの世界を閉じる必要が生じたのなら、その間は現実世界でＣｒｏｓｓを楽しんでもらってユーザーを繋ぎとめておこうというのだ。

「Ｃｒｏｓｓで役立つ装備・アイテムのパスワードが手に入るの

なら……乗ってくれるユーザーもいるだろう。当然、プレミアものにする必要があるけれど」

「そうですね……そうなると、現実世界にも仕掛けをしなくてはいけません。具体的には、どこに……？」

ＡＲＧをするために必要なのはカメラ機能と、情報を表示させるためのコードだ。

カメラ機能のほうは携帯電話のもので十分だ。今時の携帯内臓カメラは、ＡＲＧをするのに十分の性能を持っている。

だが問題は、コードを置く場所だ。

「まずは、ＶＲ喫茶」

主なユーザーはＶＲ喫茶を利用している。そこでの告知と、まずは手軽に体験してもらうために、コードを置くことは外せない。

「とはいえ、ＶＲ喫茶だけじゃあねえ……」

榊はがりがりと髪をかき混ぜた。

「世界規模ですからね……仕掛けるのは大変ですよ」

下手に都市部に設定して、地方のユーザーがアクセス出来ないというのはいただけない。

人が集中しすぎて周辺に迷惑をかけることや、また、だからといって辺鄙な場所に設定して、コードを探しにいったユーザーに、万が一にも何かあるのもまずい。

それらを考えると、コードの設置場所はよく選ばなくてはならない。

「……やっぱやめる？」

先行きを見通して面倒になった榊は、ぽつりと呟いた。

「って早！　そんな簡単に諦めちゃっていいんですか！？」

あっさり意見を翻そうとする榊に、部下は思わず突っ込んだ。

「……だって面倒じゃないの」

「……わかりました。では、協力企業を募集しましょう」

「ん？」

「デパートとか、チェーン店とか……なるべく全国規模で出店しているところがいいですね。その店頭にコードを置かせてもらえばいい。店側としても集客が見込めますから、立候補はいくつか出ると思います」

「おおー、頭いいね、お前さん」

榊はぱちぱちと拍手を送った。

「……有難う御座います」

「じゃ、お前さん、ちょいとそのあたりの企画書、よろしく」

「……はい」

ものぐさな上司を持ったのが運の尽き。

増えてしまった仕事に、部下はがっくりと肩を落とした。

魔道士の策謀

「……」

ロアは、閑散とした街並みを無言で眺めていた。
ここは、マナ喰いと遭遇した森から東の方向にある街である。

――あの日、ロアを助けてくれたクライヴが、こちらの方向に去っていくのを見届けた。
恐らくあの方角に街があるのだろうと見当をつけて、今日初めて足を運んでみたのだが……美しい街並みではあるのに、生き物の影も形も見えず、その静謐さが非常に不気味に感じられた。

「なんだ、誰も居ないではないか」

だが、ロアとは違い、不気味さを欠片も感じていないらしい男が、ロアの背後で街を睥睨している。

「……」

返事をするべきか迷った。
今のは独り言であったのか、それともこちらへの問いかけであったのかわからなかったからだ。
迷ったが、無視したといわれるよりは返事をしておいたほうがよかろうと、ロアは少し長めの沈黙の後に、答えた。

「……そのようです」
「控えろ。貴様ごときの意見は聞いていない」

「……申し訳御座いませんでした」

結局薮蛇だった。

苛立ちは内心に押し込めて、ロアは丁重に頭を下げる。

「ふん。儂が来るのを知って、逃げ出したか？」

誇るように胸を張り、男――大きく透明度の高い宝石を先端につけた高価な杖を手に持ち、金糸・銀糸で彩られた、非常に派手でたっぷりとしたローブを身にまとった男が、にやりと笑った。

男は魔道士であった。

「ふむ、しかし――これほどとはな。これならば、」

「……！　お下がりください」

ロアは、魔道士の言葉と視界をふさぐように立った。

「何？　無礼な……む」

一兵卒如きに指示されたのが不愉快で、魔道士は叱責しようとしたが――ロアの肩越し、先に見えていた十字路に、いつの間にか人がいたことに気が付いて口を閉じた。

ロアは、身を盾にして魔道士を守ろうとしているのだ。

下賤な一兵卒が、身体を張って高貴な魔道士を守る。それは、魔道士の基準では当然の行動だったが、自尊心を満足させるものでもあった。

「！？　おい、君たち！　一体ここで何をしている！」

十字路に現れた男も、ロアたちに気がついた。
誰何しつつ駆けてくる、白銀の鎧に、盾を手にした騎士。

「ふん」

一応は名のある騎士らしいが――魔道士にしてみれば、魔法が使えず、剣に頼るしかないものたちは全て、下賤なる者であった。

「ここは今、立ち入り禁止区域に指定されている！　どうやってここまでやってきた？」
「ふん、貴様如きに、我の行く道を指図できるものか」
「何だと？　いいかね、私は運営者権限を持って……っ！？　ログが、現れない……！？」

魔道士の尊大な態度に、騎士は色めき立ったが……不意に虚空を見つめたかと思うと、何事かに驚愕している。
何を言っているのか、ロアには理解が出来なかったが――

「っお、お前たちは……一体、何者だ！？」

騎士が、動揺も露に剣を抜いたのを見て、ロアも素早く剣を抜いた。

「……魔道士様、お下がりください」

魔道士に怪我を負わせては、ロアは命がない。とにかく安全圏に居てもらいたくて、騎士を警戒しつつ、願った。

「……ふん、まあよかろう。そやつに思い知らせてやるがいい。ああ、殺してはいかんぞ。まだ用がある」

「……了解いたしました」

ロアは、目の前の騎士を見据えた。
何がそんなにショックだったのか、手が震えている。あれではまともな打ち合いも出来ないだろう。

「――ふ……っ」

相手の動揺が治まるのを待つのも、馬鹿らしい。
ロアは素早く打ちかかった。

「っ！？　ぐ……っ！」

ロアが動いたのを見て、騎士はびくりと肩を揺らし――だが逃げることはなく、ロアが振り下ろした剣に、かろうじて自らの剣を合わせた。

ぎぃん！

「うあっ！？」

だが、所詮は動揺し、震える手で持たれた剣だ。ロアの鋭い振り下ろしの一撃に、騎士の剣は、あっけなく叩き落された。

「っひ……！？」

がら空きになった騎士の懐に、ロアは一気に間合いを詰めて入った。
驚愕、恐怖。
騎士の顔に浮かんだ感情は、戦い慣れた者のそれではなかった。

こんなものが騎士だというのなら――ここは余程平和で、戦いとは無縁の場所なのだろう。
そんなことを考えながらロアは、騎士の顎めがけて、右の拳を振りぬいた。

「……ふむ、こんなものか」

ロアが殴り飛ばして拘束した騎士を、適当に見つけてきた椅子に座らせて、魔道士は杖を掲げた。

目を閉じ、小さく何事か呟く魔道士。恐らくは呪文だろうそれを、ロアは注意深く聞き取ろうとしたが、意味を成す音を捕まえることは出来なかった。
だがそれも仕方ない。魔道士が唱える呪文は、人に聞かせるためのものではない。魔道士が精神集中し、求める魔法効果が正しく発動するよう、イメージを補佐するためのものだ。

また、魔道士が唱える魔法が高度であればあるほど、それはオリジナルであることが多い。効果の高い魔法を、他人に聞き取られて盗まれるのは、魔道士にとって最大の屈辱だ。声高らかに唱えるものではない。

杖の先端の宝石が、徐々に輝きを増していく。
周囲のマナが淡く発光し、椅子に座らせた騎士の周りを飛び回る。
やがて、騎士の瞳がゆっくりと開かれた。
ただし、そこに意思の光はない。ただ亡羊と、宙をみている。

「――さて、それではそなたに指令をあたえる」
「……はい」

定まらない視線が、魔道士の声を聞いて固定された。
響いた声はうつろだ。

「マナの多いものを、連れて来い」
「……マナ……？」
「……む？」

肯定の返事でなかったことに、魔道士は気を悪くしたが――マナとは何かわかっていなさそうな声に、考え直した。

「……では、魔法が得意なものを、連れて来い」
「……魔法が得意なもの……魔道士……」
「そうだ」

今度は意味が通じた。
魔道士は、己の機転に気をよくして、鷹揚に頷いて見せた。

「よいな、一人でも多くつれてくるのだぞ」
「……はい、かしこまりました……マスター」

そんな二人のやりとりを、ロアは黙して――そして複雑な思いで、見ていた。
魔道士が連れてこられてしまう。
その中にはきっと、クライヴがいる。
マナが多い魔道士という条件から、彼が逃れられるとは思えなかった。

「……」

助けたい。どうにかして。
だが――どうすれば？
ロアは、何も思いつかず、何も出来ない己に、苛立った。

キャラクターと中の人

吉野は、ＶＲ喫茶のいつもの席に座って、携帯でネットにアクセスしていた。

ＶＲ喫茶の出入り口付近、出入りする人間が必ず目にする場所に「Ｃｒｏｓｓ　Ｍｙｔｈｏｌｏｇｙ」のポスターが貼られており、そこにコードが印刷されていた。

吉野は早速コードを接写し、サイトアドレスを手に入れたのだ。

「ＩＤとパスワード……と」

ＩＤとパスワードの打ち込みを求められたので、吉野は財布のカードポケットから、ＶＲシステムを利用するのに必要なＩＤカードを取り出し、番号を確認しながら入力した。

次に、パスワードを入力する。

通常、ＶＲシートの利用には、シートについている指紋認証と網膜認証で本人確認が行われるので、パスワードの出番はない。だが、ＩＤカードを紛失した際、再発行するときの書類手続きには必要ということで、誰でも設定はしてあるのだ。

あんまり出番がないのでうっかり忘れかけていたが、吉野は何とか正解を思い出して入力を終えた。

「お、まずはエリクサー、ゲット」

たったそれだけで、Ｃｒｏｓｓ世界では中々手に入りにくい、完全回復アイテムをもらえてしまった。

「これはおいしい。……まあ、お詫びの品だから、奮発したんだろうけど」

結局Ｃｒｏｓｓは、大規模メンテナンスとヴァージョンアップの名目で、一時閉鎖となった。

閉鎖期間中は、現実世界で宝探しをしてお待ちいただきたい、と告知がなされ、まずはごく簡単な暗号が表示された。解読すると、ＶＲ喫茶の出入り口付近、となったわけだが……まあ、暗号が解読できなくとも、このコードを見逃すことはなかっただろうと思われる。

「桜庭」

「ああ、夏崎君。おはよう」

「おう、おはよう」

吉野の隣に座った夏崎もまた、携帯を操作していた。

「……お、エリクサーじゃん。やった。桜庭も貰ったか？」

「うん、さっきね」

今はもう閉じたが、吉野は携帯を振って見せた。

「次のコードはどうする？　俺は、槍か、鎧か……」

携帯画面をスクロールさせながら夏崎が問う。

コードで手に入れたサイトアドレスには、他にもいくつかの暗号が記されていた。それぞれ、装備品によって暗号が異なっている。

夏崎がチェックしている装備品から考えると、彼のキャラは戦士系。槍といっていたから槍使いだろう。

ということは、最近吉野がよく組んでいたリーンでもシンゴでもないということだ。

「どうやら私と夏崎君は、必要とするコードが違うみたいだね」

「何？　ってことは、桜庭は魔道士系か？」

初めて吉野が、自らのキャラについてヒントを出したので、夏崎は顔を上げた。

「さあて、どうでしょうね？　もしかしたら鍛冶かもしれないし、情報屋してるかもしれないよ？」

「む、そうくるか……」

夏崎が腕組みして考え込んだところに、「あ、吉野！　夏崎君！」と、二人を呼ぶ声があった。

「千鳥、おはよう」

「おー、梅沢も来たのか」

「おはようー！」

千鳥もまた、ポスターからコードを接写してきたのだろう、携帯を手にしている。

「二人とも、もうコードとった？　――う、パスワード？」

「その顔だと忘れたな？」

「ぐ」

夏崎の指摘に、千鳥は言葉に詰まった。

「いやあ、忘れるよね。私もちょっと危なかった」

「普通忘れてるよー！　……仕方ない。家に帰ってメモ探すわ。ねえ、何貰った？」

パスワードが分からないことには進めない。千鳥は携帯をしまって、吉野に尋ねた。

「エリクサー」

「へえー」

「……なんだよ、嬉しそうじゃねえのな？」

もっと喜ぶかと思ったのに、と呟く夏崎に、吉野も同感だった。

「あー、私、エリクサーが必要になるほど厳しい戦闘はしない主義だから」

「弱いものいじめか……お前、最低だな」

「違うわよ！」

大袈裟に身を引いて見せた夏崎を、千鳥が叩いた。

「私はバトル重視じゃないの！　生産重視なの！」

「あ、そうだったんだ」

「って、桜庭も知らなかったのか？」

「だって、私は言わないし、聞かない主義だから」

クライヴのことを秘密にしておくために、吉野は友人のキャラのことも聞かないスタンスを貫いている。なので、今初めて、千鳥が生産に力を入れていることを知った。

「ああ、そっか。――で、梅沢は、何系だ？　鍛冶か、錬金術か？」

Ｃｒｏｓｓの生産系は、武器防具を作る鍛冶師、攻撃・回復系アイテムとアクセサリー類を作る錬金術師が人気だ。

「鍛冶よ。ふふん、これでもリストに名前がのってるんだから！」

「何！？」

「……」

鍛冶リストに名前を載せたキャラと聞いて、吉野は真っ先にカリファを思い出した。

だが、いやいやいや、と首を振る。

鍛冶でリストに名を載せたものはカリファ一人ではない。偶然だと結論付けようとしたが。

「ちなみに、何を作ったんだ？　剣か？　俺、槍なんだけど！」

「……あんた、調子いいわねー。私が作ったのは槍よ」

「……」

また一つ、カリファの条件を埋めた千鳥。だがそれでも、吉野はまだ偶然説にしがみつく。

「うっそ、マジ！　どれ！？　いいものなら俺に売ってくれ！」

「駄目よ。もう依頼者に渡したもの」

「依頼者……やっぱ槍使いか？　俺、結構チェックしてるんだけど、有名なプレイヤーか？」

「ううん。槍使いじゃなくて、魔道士さんよ。心が広くて頼りになる、素敵な魔道士さんのご協力を得て完成させたあれは、そう、いわば、私とあの人との、愛の結晶！」

千鳥は夢見る……否、恋する乙女になっていた。

「……」

流石にそろそろ偶然ではすまなくなってきて、吉野の頭にはどうしよう、という疑問が渦巻いていた。

「……おいおい、梅沢。お前、ちゃんと現実見ろよ……」

「うるさいわね、分かってるわよ！　いいじゃない、芸能人に憧れるようなものなんだから！　ねえ、吉野！」

「え？　あ、ああ……まあ、いいんじゃない？」

千鳥に同意を求められて、半ば反射的に頷いた吉野だったが……頷いてから、本当にいいんじゃなかろうか、という気がしてきた。

もともと、Ｃｒｏｓｓのカリファとは気が合って仲良くしてきたのだが、思い返せば、リアルでの千鳥とのやりとりに近かった気がする。

カリファは千鳥よりも色気過剰気味だとか、クライヴは吉野よりも落ち着いている、というような差異はあれど、会話のテンポや雰囲気は、千鳥と吉野のそれであった。

ならば、千鳥には、自分の操作キャラがクライヴであることを暴露してもいいだろうと、吉野は思えてきた。リアルでもゲームでも、似たようなやり取りをしているのだ。暴露してしまっても、そんなに影響はないだろう、と考えられたからだが――

さて、では問題は、いつ千鳥に暴露するかである。

「いつかリアルでもあってみたいんだけど、それで夢が壊れるのも怖いわよねー」

「……」

会いたいけど幻滅はしたくないという千鳥に、暴露しないほうがいいのかもしれない、と考え直す吉野であった。

夏の定番、肝試し

「あ、ところでさ、桜庭」
「ん？」

クライヴの中の人は一体どんな人かと想像して百面相している千鳥を放って、夏崎は吉野に話しかけた。

「桜庭は、肝試しどうする？」
「肝試し？」

いきなりの話題転換に、吉野は首を傾げた。

「何、ＶＲのゲームの話？」

Ｃｒｏｓｓが出来ないのなら、他のＶＲゲームをしようというお誘いかと思ったのだが、夏崎は、違うと手を振って否定した。

「リアルの話だよ。夏休みだろ。うちのクラスで、肝試ししようぜって話が終業式んときに出てたの、忘れたか？」
「……あー……あれね、思い出した」

確かに、一学期の終業式の日、肝試しの提案があった。
最近不可思議現象が目撃されている場所があって、そこを皆で探検してみよう！　という趣旨であったことが、うっすらと思い出されてくる。
なぜうっすらかというと、吉野は、本日のＣｒｏｓｓはどう進めようかと考えて、ほぼ聞き流していたからだ。

「吉野って、肝試しにあんまり興味ないわよね？　遊園地でも行きたがらないし」
「まあね」
吉野は肩を竦めてみせた。
正直、作り物に興味はないし、本物の心霊現象にも、関わりたいとはあまり思っていない。
「なんだ？　怖いのか？　桜庭って、動じなさそうだけど」
「うん、まあ、動じないけどね。二人はいくの？」
「そうだねー、ちょっと興味あるかな。夏の定番！　って感じだし。それに私、ちょっと霊感あるっぽいんだ。もしかしたら、何か見えるかも！」
「俺は……どうしようかなって」
千鳥は半分以上行く気になっていて、夏崎は吉野の動向を探っている。
「……二人がいくんなら、いっとこうかな。場所、どこだっけ？」
「そ、そうか？　じゃあ、決まりだな！」
吉野の言葉を聞いて、夏崎は顔を輝かせた。
「場所は学校の裏の林だよ。明日の夜だって話だから、詳しいことはメールする」
「ん、よろしく」
喜びから、明らかにテンションが上がっている夏崎と、平静の吉野。

「……ねえ、吉野？」
「ん？」

千鳥が周囲を見回しながら訊いた。
絶対夏崎はすぐに排除されると思っていたのに、何故だか今日は話が上手く進んでしまっている。これはおかしかった。

「吉野の叔父さんはどうしたの？」
「！　そういえば、いつも何かと邪魔してくるあの人がいない……！」

言われて気付いた夏崎が、慌てて店内を見回す。
が、吉野のガードマンの如き店長殿の姿は、どこにも見当たらない。吉野の居るところには必ず一緒に居たようなイメージがあるのに、今日は、いなかった。

「お、すっげー、ゴスロリ」

その代わりといってはなんだが、同年代くらいのゴスロリ少女が、Ｃｒｏｓｓのポスター前で携帯カメラを構えているのを見つけた。

「あ、本当だ」
「可愛い子だね。あの子もＣｒｏｓｓユーザーなのかな……って、ああ、で、叔父さんは？」
「ああ、うん。何か、助っ人の要請が来たから、しばらく留守にするんだって」

なんとなく、ゴスロリ少女が喫茶スペースのテーブルにつくのを見守ってしまいながら、吉野は答えた。

「助っ人？　ＶＲ喫茶の店長が、何を助っ人するの？」
「さあ？」
詳しいことは何も聞かなかった吉野は、それ以上は知りません、と肩を竦めた。

肝試しの約束をした吉野は、その足で現場へと向かった。
別に、日時を忘れているとかではない。下見をしにきたのだ。

「……」

林を目の前にして、吉野は、いつもはわざと切っている意識のスイッチを――入れた。
それだけで、吉野の視界は変化する。

「……うわあ、いつの間に……」

目に映るのは、ただの林ではない。
ぼんやりとした光、人の姿をとっているモノ、あるいは動物の姿をしたモノ。種々雑多なモノを、吉野は見ていた。

「これは……ねえ。まずいでしょ」

吉野の存在に気付いたらしい「彼ら」が、ゆっくりと近づいてくる。口が利けるものは何か訴えかけているようだったが、吉野は耳を貸さなかった。
徹底的に無視して、進む。
これだけたくさんの「彼ら」――霊たちがいるのなら、霊障の一

つや二つ、起きて当然だ。遊び半分で肝試しなどやったら、取り憑かれて体調を崩すものも出てくるだろう。

「……でも、おかしいな。前はこんなにいなかったのに」

吉野は、自分が通う学校が、昔は戦場であったということを知ったときに、今回のように「視て」みたことがある。その時は、こんなにたくさんの霊たちはいなかった。

「――そこで止まってください」

「!?」

突如背後からかけられた声に、吉野はびくりとして足を止めた。振り返れば、和服姿の青年が立っている。

「……あれ……乃木（のぎ）　宗琳（そうりん）……さん？」

よくよく見れば、吉野は彼のことを知っていた。

知ってはいたが、知り合いではない。テレビを通して一方的に知っているだけだ。

「……はい」

テレビと言っても、彼は芸能人ではない。彼の紹介時の肩書きは「霊能力者」である。そしてついでに、イケメンもつけられる。

年若く、見目良い彼は、優秀な霊能力者という触れ込みで、夏休みの心霊特番には欠かせない人となっていた。

「……貴方は……」

その宗琳が、吉野を見て軽く目を見開いた。
吉野を知っているから、ではない。
――同じだと、直感的に知ったからである。
そして吉野も、同じことを知った。
彼と吉野は――同じものを「視て」いる。
すなわち、霊を。
「……何をしに、ここにいらしたのですか」
先に口を開いたのは宗琳だった。
「……最近、このあたりで不思議なことが起きると聞いて……クラスメイトが、肝試しをしようと言い出しました」
「……なんてことを……」
宗琳は眉を顰めた。
彼の言いたいことは吉野にも想像がついた。そして、同感でもある。
遊び半分、面白半分で霊たちに接触するのは、危険極まりない。
遊園地のお化け屋敷で恐怖を楽しむのは別にいい。だが、現実の世界で、本当の霊現象があった場所での肝試しは、するべきではないのだ。
「――それで、貴方はどうしてここに？」
宗琳の声には非難の響きが感じられた。

霊の存在を知っていながら肝試しを行おうとしている吉野に対する、軽蔑といってもいいだろう。
無理もない状況とはいえ、濡れ衣をきせられるのは、吉野も面白くない。

「下見です。本物を回るのは危険でしょうから」
「……そうでしたか。それは失礼しました」

宗琳の視線から険が消え、彼は謝罪した。吉野の言葉を信じたのだ。

「それで――どうなさるおつもりですか？」
「なんとか中止にしてもらいます。……ああ、ところで、そういう乃木さんは、どうしてここに？」

一方的に質問されっぱなしなのも癪なので、吉野は聞き返した。

「仕事です。最近、この周辺で怪現象が起きているということでしたので」
「お仕事……というのは、テレビの？」

撮影クルーらしきものは見えないが、宗琳も下見だろうかと吉野は小首を傾げる。

「いえ、テレビではありません」
「あ、そうですよね。テレビだけがお仕事じゃないですものね」

どちらにせよ、ここの問題を解決するために来てくれたのならば、これ以上吉野が手を出すこともない。

「では、すいませんがお任せします。ええと、中止理由に乃木さんのお名前を使ってもよろしいでしょうか？」
「――ええ。それで思いとどまっていただけるなら。ご学友には、くれぐれもよろしく」
「はい、ありがとうございます」
ぺこりと頭を下げて、吉野は宗琳に背を向けた。
そしてもう一度意識のスイッチを切り替えて、視界から霊の存在を締め出すと、振り返らずに出口へ向かった。

運営者たちのお仕事

八月下旬。
ＡＲＧを初めて一ヶ月が過ぎた。
それはつまり、Ｃｒｏｓｓを休止してから一ヶ月が経とうとしている、ということだ。

「――では、行方不明者が、意識不明で発見される事件が相次いでいます。病院で原因不明の昏睡状態にある被害者もおり、市民の間では不安が広がっています。また、被害者たちに共通点は発見できておらず、警察は調査を急いでいます」
「おーおー、最近はどこも物騒だねえ」

テレビのニュースを偶然耳にした榊は、煙草をふかして呟いた。

「人のことをとやかく言ってられる状態じゃないですよ、榊さん」

部下の一人が、榊を追い立てに掛かる。

「俺らだって、原因不明の現象を抱えてるんですから」

原因不明の現象とは、勿論、ブチの灰色狼出現と、ナビマップに反映されないバグのことである。

「……っつってもねえ。ほら、あれから大人しいものじゃない」

榊は、ふう～と煙を吐いた。

Ｃｒｏｓｓを休止にしてから約一ヶ月。

腕のいい技術者を総動員して、Ｃｒｏｓｓ世界の警邏とデバックに勤しんできたが、何故だか異変は起きていなかった。
ブチ狼が出現しないのでは、ナビマップに反映してこないバグも確認できない。平穏なのは良いが、問題の確認が出来ないのでは解決の糸口も掴めない。

「――体調不良で倒れたって人も無事退院したし」

海外の学生から始まった体調不良者たちの一件も、結局、Ｃｒｏｓｓとの因果関係が解明されなかったからか、幸いなことに会社側には大した被害や訴えもなく話がついた。学生の体調不良が噂として広まって、自分もそうであるという思い込みからきたのではないか、という見方で落ち着いたのだ。
こうなってくると、Ｃｒｏｓｓを休止することはなかったな、とすら思えてくる。

「まあ、休止にして徹底的な調査をするのは、必要だったんだろうけどね」

ＶＲは、まだまだ伸びしろを抱えている。これは、裏を返せば未知の部分もある、ということだ。
安全を確保し、ユーザーに安心して遊んでもらうためには、Ｃｒｏｓｓの休止は必要な処置だったと理解している。

が、それでも、休止したために、本来入るはずだった収益がなくなったのは、会社的には大打撃だ。そして、榊もボーナス二十パーセントカットという憂き目にあった。これは地味に悔しい。

「――それより、あちらさんのほうは順調に進んでるのかね？」

休止はやむをえない。だが、再開したときに、可能な限りユーザーに戻ってきていただきたいし、出来るならば新規ユーザーも取得したい。

となると、必要なのは話題性だ。

故に、休止が決定したときから、復活時には新エリア実装を予定しており、調査班と新エリア班とに分かれて活動してきている。

榊は、その新エリア班の状況を尋ねたのだ。

「あ、はい。……なんとか、九月一日には間に合うだろうという報告がきています」

多少押してはいるが、休み返上で働けば、予定の九月一日には間に合うだろうという報告が届いていた。

「そうか。ま、無理せん程度に頑張ってくれやと伝えてやってくれ」

「はい」

仕事の合間の雑談を終えて、榊たちはまた、それぞれの仕事に戻る。

「……」

再開に向けて動いてはいるものの、榊自身は、まだ納得のいかないものを抱えていた。

画像データに残っていた、銀色のことだ。

榊は、吉野からロアという青年のことを聞いたとき、もしかしたら彼のことではないかと直感的に思った。

根拠があったわけではない。だが、他に手がかりもなかったので、

可能性を潰すために、調べてみた。

「……そうしたら、いないんだもんなあ……参ったね、こりゃ」

煙草を噛みながら、小さく呟く。

ロアという青年は、リストに載っていなかった。いや、ロアという名前は、複数あるにはあったが、キャラクターが銀色の髪をしていなかったのだ。

Ｃｒｏｓｓでは、同名でも登録が出来る。

ただしその場合、容姿を変える必要がある。分かりやすく髪の色を変えるか、体型を変えるか。とにかく、同じ名前の人が並んでも、一目で別人とわかるような外見であれば、同名登録が可能なのである。どうしても姿にこだわりがあるのならば、名前を変えるしかないが。

どのロアも該当者ではなさそうだったので、榊は偽名の場合を考慮して、銀色の髪、男、と条件を絞って検索をかけてみたが、それでも出てこなかった。

「吉野ちゃんが嘘をいったとも思えないしねえ……」

そもそも、吉野がそんなところで嘘をつく理由がない。

吉野は、榊がＣｒｏｓｓの運営者であることを知らない。あれは、本当に雑談であったはずだ。

となると、やはり不正アクセスしか可能性が浮かばないのだが、それが可能な人間を調べられる限り調べてみても、これだ、と決定的に疑わしい人物は出てこなかった。

「……」

榊は、溜息とともに紫煙を吐き出した。
手詰まりである。
終わったというのなら、それはそれでいい。だが、異変がないと判断して再開してしまった後に、また問題が出てくるのだけは避けたい。
そのために、今出来ることは――地道に、Ｃｒｏｓｓ世界を警邏することしかないのだった。

Ｃｒｏｓｓは、予定通り九月一日に再開された。
結局、徹底調査で問題は発見されなかったというから、漠然とした不安や噂は残っているのだけれど、私にしてみれば、よくぞ再開してくださった、というものだ。

「ここが、エジプト地区か」

で、早速、本日実装された新エリア、エジプト地区までやってきました。
いやあ、たくさんの人が来ておりますね。皆さん、新し物好きですね。私も人のことといえないけど。

さて、このエリアの最大の特徴はなんといっても、ＮＰＣの姿だ。
エジプト神話には、獣の頭をしていて、でも身体は人間、という神様が多い。
その繋がりなのだろう、ここではＮＰＣは全員、半人半獣の姿だ。

いわゆる獣人ですね。毛並みが素晴らしいですよ。もふもふしたいですよ。今のところ耐えていますが。

ちなみに、新規ユーザー登録をすると、この獣人の姿を選ぶことが出来るそうだ。で、設定的には神の眷属、という立ち位置になるらしいので、初期身体能力値にボーナスがつくらしい。

……いいなあ、優遇されていて。

とはいえ、魔法の扱いはあまり得意な設定じゃないらしいので、私が選ぶことはなかっただろうけど。

「！」

お、猫顔！

周囲観察に勤しむ私の目の前を、猫人ＮＰＣが通っていった。

思わずガン見。

尻尾もある～！　かーわーいーいーっ！

お友達ＮＰＣに出会ったのか、立ち話を始めた猫人さん。

おお、笑うと尻尾も楽しげに揺れている！　さ、さわりたい！

猫が猫じゃらしに飛びつきたくなる衝動と同じものが、きっと今、私を襲っている……！

「……クライヴさん？　どうしたんですか？」

「！？」

訝しげな声に、私は小さく息を呑んだ。

「――ああ、ユラか」

大急ぎで我が身を振り返ってみるが――うむ、大丈夫だ。猫人さんをガン見していただけで、怪しげに手をわきわきさせていたとか、目を怪しく光らせていたとかはしていない……はず。……多分。

「……猫、好きなんですか？」

私の視線を追って、ユラが訊ねてくる。

ふむ？　猫が好きかといわれれば、勿論好きだが。

「どちらかというと、私は犬派だ」

猫の気まぐれも可愛いけれど、ご主人様一筋の犬の可愛さのほうが私好みだ。

「犬ですか……」

ユラが、自分の頭を片手で撫でた。

「――なあ、そこのヒーラーさん？」

「あ、はい？」

不意に声をかけられて、ユラは反射的に背筋を伸ばした。

そして振り向けば、そこには戦士装備を黒で整えた、緑の髪に緑の瞳の青年がいた。

「俺、ジオっていうんだ。槍使いな。もしよかったら、俺と組んでくれないか？」

「あ、私……ですか？」

突然の勧誘に、ユラが戸惑う。

うむ、中々率直な勧誘だな。ユラが戸惑うのも無理はない。大抵は、知り合いの紹介とか、ギルドで募集とか、あるいは現地に居合わせた人とパーティーを組むのだが。

「そ。あ、もちろん、そっちの兄さんもよければ一緒に」

「ふむ、何かクエストを進めているのか？」

私は、このエリアに足を踏み入れてからは観察をしていただけな

ので、まだ何もクエストを拾っていないのだが、彼――ジオは、何か人手が要りそうなクエストをゲットしたのだろうか。

「ああ。ギルドに、ピラミッド探索が出てたんだ」

「ピラミッド」

なるほど、エジプト地区らしいチョイスだ。

盗掘者対策として罠も多いだろうから、回復役のヒーラーは欲しいだろう。

また、内部で宝を見つけたとき、回復薬を手放せないから入手を泣く泣く諦める、という事態にもしたくないのだろう。手に入れられるアイテムには総重量制限があるからな。

「クライヴさん、どうしましょう……？」

「さて、私は別に構わないと思うが」

今日はエジプト地区の観光で終わらせようと思っていたが、思いがけなくクエストが舞い込んできたのなら、久しぶりのＣｒｏｓｓでもあることだし、やってみたい気持ちはある。

お誘いの声はユラにだったので、私が決定するのは遠慮するが。

「そうですね……では、二人でご一緒させてください。私はユラです」

「魔道士のクライヴだ。よろしく、ジオ」

「ああ、よろしくな、二人とも。んじゃ、早速だけど、出発していいか？　何か準備があるんなら、待つけど」

ジオは気が急いているようだ。

無理もない。ギルドで掲示されていたクエストならば、他にも多くのプレイヤーが受注しているはずだ。

今回は、ピラミッドというダンジョン探索クエストになるのだが、それを複数のプレイヤーが受注した場合、ダンジョン内にあるフリーの宝箱は、早い者勝ちになる。他のプレイヤーに先を越されたら、私たちは何も手に入れられなくなるのだ。

もちろん、イベントの宝箱はちゃんと開けられるし、フリーの宝箱であっても、一定時間が経過したらまた再設置されるので、頃合を見て出直せばいいのだが……やはり、期待が持てるうちに探索したいではないか。

「あ、私は大丈夫です」
「私も、すぐにいける」
「ならよかった！　じゃあ、歩きながらパーティー登録しようぜ」

笑顔で頷いて、ジオは早速歩き出した。

「で、誰がリーダーする？」
「ええと……」

ユラが私を窺うように見てきた。
なにかね、その視線は。私にリーダーをやれと？
だが断る！　私は、リーダーなんてやりたくない。

「ジオでいいだろう。クエストをとってきたのは君だ」

ということで、ジオに任せた。

「そうか？　ユラはそれでいい？」
「あ――はい、いいです」

ユラも、何が何でも私にリーダーをさせたかったわけではないようで、すぐに頷いてくれた。よかったよかった。

リーダーをやるということに、なんらかのメリットやデメリットがあるわけではない。意思決定の指標くらいだろう。

が、それが面倒くさいのだ。少人数パーティーならまだしも、人数が増え、しかも初対面、寄せ集めであったりしたら、意思統一にも一苦労ではないか。

まあ、今回はそうではないし、意思統一も楽そうだから、それほど嫌でもないのだけれど……ユラが、何かと私を推してくるからな。前例は作らないでおくほうが無難かと思われる。面倒臭い、という気持ちもあるし。

「わかった。じゃあ、俺が」

私たちの前にウィンドウが表示され、ジオをリーダーと認証して、一時的なパーティーを組むことを了承するかの確認が出た。

勿論、ＹＥＳを選択する。

このパーティーを組むという認証をすることで、経験値やアイテムの分配が計算されるのだ。

「個人、非公開でいいか？」

言葉が少し省かれていたが、ジオが聞いてきたのは、入手アイテムの分配方法だ。

「私は構わない」

初対面の相手には一般的な設定だ。

「はい、私も」
「よし、じゃ、そういうことで、手続き完了！　じゃ、改めてよろしくな、ユラ、クライヴ！」
「ああ、よろしく」
「はい、お願いします」

滞りなくパーティー登録を終え、いざピラミッドへと、街を出る私たちであった。

さて、ピラミッドは、砂漠の真ん中にある。
砂漠というものは――当然ながら、暑かった。

「……ぐえええええ……」
「……大丈夫か？　ジオ」

ようやくたどり着いたオアシス、その木陰に倒れこむように、ジオは座り込んだ。

「……だめかもしんない……」
「黒ですもんねえ……」

ジオほどではないが、ユラもバテている。ユラは白を基調とした服なので、まだマシだったのだろう。

「よ、予想外だったぜ……」
「うむ、砂漠の設定はなかなかきついな」

砂漠ステージなのだから、多少の暑さは覚悟していたが、まさかここまでとは。
黒で統一したジオの服装は、下手な毒ステータスよりも彼のＨＰを削っていた。

「着替えはないんですか？」
「もってきてない。アイテム開けとくために」
「え、でも、替えくらい……」

ジオの言葉に、ユラは微かに眉を顰めた。
初めて行く場所には、出来る限り軽装でいくのがセオリーだ。どんないいアイテムが不意に手に入るかわからないからな。
だがそれでも、替えの装備くらいはもっていくのもまた、セオリーだ。
なにしろＣｒｏｓｓでは、戦闘に伴って、攻撃したり受けたりすると装備品の耐久値が減っていく。そしてポイントが０になると、装備が壊れて攻撃力や防御力が劇的に下がるのだ。加えて、地域ごとの環境やモンスターの特性に対応するためにも、替えを用意しておくのが冒険者のたしなみであるのだが……。
「この装備、修理に出したばっかで、耐久値、余裕なんだよ」
「ああ……それじゃあ仕方がないですねえ」
「暑さ対策は考えなかったのか？」
「……暑いところは初めてなんだ……ここまでとは……」
「……そうか」
見通しが甘いのだ、とは言わなかった。あまりに辛そうだったので。
口に出さねど思いは同じだったのか、ユラが溜息ついた後、私を見上げてきた。
「クライヴさんは、どうですか？　何か、良さそうな装備は……」
「――いや、ないな」
私はアイテム欄をチェックした結果、首を横に振った。
そもそも私は替え自体を持っていない。
というのも、私の装備品は一級品揃いだからだ。

装備品にはレア度が設定されていて、Sが最高、以下、AからDへ下がっていく。このうち、SとAランクのものは、どれだけ酷使しても耐久値が下がらない。つまり、SとAで固めてしまえば、耐久値に備えて一式持ち歩く必要がないということだ。

なので面倒くさがりな私は、おしゃれしたい気分なとき以外は、大幅なプラスマイナスのないSとAで固めて、基本、着たきりです。さすがに暑さ寒さには負けるので、それは用意したけれど。

で、もちろん今装備しているのは暑いところ用です。

さて、そんな私が今もっている余分な装備品といえば……カリファが作ってくれて、用途を考え中のアキレウスの槍だけである。

「――悪いな。もう、大丈夫だから」

「そうですか？」

ユラのヒールも受けて大分回復したジオは、身体を起こして詫びた。

「時間を無駄にしちまったな。急いでピラミッドまで行こうぜ」

オアシスからピラミッドは見えている。が、距離的には微妙だ。今からいっても、全部探索する時間はなさそうだ。

まあ、それでも、ピラミッドの内部把握のため、探っておくことに意義はあるだろうが。

「……しかしだな。私はあれが気になっているのだが」

「ん？」

私は、ピラミッドの右方向を示した。

そこには人の頭らしきものに、動物の身体をしているような像が見える。

「あれは――もしかして、スフィンクスですか？」

「だと思う」

「へえ！　やっぱエジプトだなー。距離的には……ピラミッドより、少し近い感じか？」

「恐らくな」

「ふうん……」

ジオは、スフィンクスと思しき像を見つめて、なにやら考え込んだ。

「……なあ、今日は、あっちにいってみるか？」

「え？　スフィンクスにですか？」

「ああ。俺のせいで面目ないんだけど、今日このままピラミッドに向かっても、探索しきれないだろうし……スフィンクスなら、探索じゃないだろ？」

「確かにな」

スフィンクスは、旅人に謎かけをして、間違ったら食べてしまうという物語だから、恐らくイベントだ。ピラミッド探索よりは短い時間で終わるだろう。

だが問題は。

「フラグを立てていないが……さて」

イベントを起こすには、情報を得て、フラグを立てておく必要がある。フラグ無しで通りがかりに起きるイベントもあるにはあるが、スフィンクスがそれだとは限らない。いざ行ってみて、フラグが立

ってないから何も起きませんでした、の可能性もあるわけだ。

「私はどちらでもいいです」

「クライヴは？」

「――そうだな、いってみよう」

駄目なら駄目で、またフラグを立ててから訪れればいいのだ。一度いっておけば、次の移動は瞬間移動魔法でいけるようになるしな。

ということで私が頷けば、満場一致になって。

「よし、じゃ今日はスフィンクス討伐に決定！」

勢いに乗ったジオが、拳突き上げて宣言した。

「え、討伐なんですか！？」

「いや、ごめん、言葉のあや」

突き上げられた拳は、てへ、と頭に添えられた。

さて、また熱中症で倒れられても大変なので、黒装備のジオには、ユラ備品の白ヴェールが貸与された。

……花嫁の、純白のヴェールである。

「……なんで、こんなの持ってんの？」

非常な葛藤な後、背に腹はかえられないということで結局被ったジオだが、とても恥ずかしそうだ。どんな羞恥プレイだよ！？　と

叫んでいた。

「だって、結構魔法防御力あるんですよ。私は今、回復効果アップの髪飾りですけど」

「確か、ヴェールは限定販売アイテムだったと思うが……」

「はい、ジューンブライドにちなんで、六月限定販売でした。ドレスは高かったので買えませんでしたけど。でも友人が買ってたので、必要になったら借りようかなって」

「ああ、そういえばニュースになっていたな」

ニュースといっても、リアルのニュースではなく、Ｃｒｏｓｓ世界のニュースだ。プレイヤーの有志が瓦版みたいなものを発行している。

で、そこに、六月限定販売のウェディングドレスにタキシードを装備して、結婚式を挙げたカップルが紹介されていたはずだ。

「……っていうかさー、現実見ようぜー……所詮ゲームだろー……」

「――ん？」

ジオの呟きに、私は何かひっかるものを感じた。

「何言ってるんですか！　リアルだろうがゲームだろうが、結婚式、花嫁さんは、女の子の憧れですよ！　むしろ、外見が完璧自分好みのこちらのほうが、遠慮なく夢に浸れるってものじゃないですか！」

「そ、そんなもんですか」

ユラの熱弁に、ジオが引いた。

「そんなものなんです！」

……うん、ちょっとわかる。

雑誌とかでいいな、と思った服でも、自分が着ることを考えると、「あ、似合わないな」と諦めることってあるし。その点、外見は自分好みで作ったＣｒｏｓｓなら、自分好みの服装もばっちり似合うだろうし。

いや、まあ、私の場合クライヴ君なんで、女物なんて、無理ですけどね？

それでも、クライヴ君にはこんな服装が似合うだろうなとコーディネイトして遊んでいる。

――って、あれ？　私はさっき、ジオの言葉の何に、ひっかかりを覚えたんだっけ？

「……」

しまった、ユラの勢いに押されて忘れてしまった。

「……」

……まあ、いいか。大事なことなら、そのうち思い出すだろう。

思い出す努力を早々に放棄して、私はだんだん近づいてくるスフィンクスの顔を見上げた。

そして何故だか、スフィンクスと戦闘になっています。

「ブリザード！」

氷系中級魔法が、見上げるほどあるスフィンクスの全身を包み、氷で覆う。

「刺突！」

足回りが凍って動きを鈍らせたスフィンクスの身体に突撃するのは、槍を構えたジオだ。

槍が風を纏うエフェクトを発生させながら、鋭い一撃が繰り出される。

ジオの一撃は、スフィンクスの前足の付け根辺りに、こぶし大ほどの風穴を作った。

足に激痛を感じたスフィンクスは、悲鳴を上げながら、まだ傍にいるジオを、身体を捩って後ろ脚で踏みつけようとする。

「うおっと！」

少しのバックステップでは逃げ切れないと判断したジオは、スフィンクスの動きをみて退避する方向を決めると、一気に駆け抜け、無事安全圏まで離脱した。

「行きます！」

そしてユラは、あれからいくらか育った投擲スキルを使って、ボムをスフィンクスの頭に命中させた。

頭に衝撃を受けたスフィンクスは、ジオを踏み潰そうとしていた態勢の悪さもあいまって、横倒れる。

「お見事」

「っはい！　有難う御座います！」

見事命中させたユラに賛辞を送りながら、私はすでに次の魔法の発動準備にかかっていた。

「サンダーブレード！」

雷系上級魔法。太い一条の雷撃が、スフィンクスの身体を貫く。もはやスフィンクスは声もない。砂漠に縫いとめられた巨体は、雷を浴びて痙攣を起こしている。

だが、スフィンクスのＨＰは、レッドゾーンであるものの、まだ若干残っていた。

「よし！　それじゃあ最後は俺だな！」

ジオは槍を一振りして構えなおすと、スフィンクスに向かって走り出し――

「くらえ――っえ！？」

これで終わり、と思い込んで突き出された槍は、最後の力を振り絞ったか、それともただの偶然か。身を起こそうと足掻いたスフィ

ンクスの前足によって弾かれ、踏み潰されてしまった。

「えええええええ！？」

「これは……」

まさかの武器破壊である。

プレイヤーのスキルには、人型魔物が装備している武器を壊して攻撃力を落とす武器破壊のスキルがあるが、まさかこのスフィンクスがそれをしてくるとは、まったくの予想外であった。

スフィンクスは、自分が相手の武器を壊したとは思ってもいないようだ。痛みのせいか、闇雲に暴れているので、動きを読み辛い。その傍にいるジオが、いつ巻き込まれてしまうか、分かったものではなかった。

「じ、ジオさん！」

「！？　っと、やべ！」

ユラの、警告を込めた呼びかけに、ジオは慌ててバックステップで距離を取った。

「……では」

仕方ないのでトドメは私が。

「……ライトニング」

雷系初級魔法。その一撃で、スフィンクスのＨＰは、今度こそ全て削り取られた。

「あああああ……俺の武器～……」

スフィンクスの巨体が光のエフェクトで消えてから、ジオは無残に壊れた槍を掻き抱くようにして泣いていた。

「これは……見事に壊れていますね……」

柄が真っ二つ、くらいならば、鍛冶師に頼んで直してもらえばいい。だが、スフィンクスは槍の穂先を見事に砕き、柄も踏み潰してしまっていた。

これは、直しようがないだろうなあ。

「ううううう。俺の槍……」

「ジオ、諦めて、馴染みの鍛冶屋で何か新しい得物を探してはどうだ？」

ちらりと、アキレウスの槍を渡すことも考えたが、カリファの力作を、初対面の人に譲るのは躊躇われた。というか、勿体無い。

それに、戦士系プレイヤーには、大抵、馴染みの鍛冶師プレイヤーがいるものだ。武器の相談はそちらにするのが筋だろうと思って勧めてみたが。

「……それがさ、俺の馴染みの鍛冶師は、猫になっちまったんだよ」

「は？」

「猫？」

私とユラは思わず聞き返していた。

猫になるとは、これ如何に？

「……ほら、エジプト地区の実装で、獣人が開始になっただろ？　獣人に憧れもってたみたいでさ……キャラ作り直しちまったんだよ」

「あー……なるほど。それは……思い切ったものだな」

Ｃｒｏｓｓで作れるキャラクターは一人だけだから、もし私が同じことをしようと思ったら、クライヴ君と永遠にお別れしなくてはいけなくなる。育てた手間暇は勿論、アイテム、お金も投げ捨てて。

嫌だ、勿体なさすぎ！

「……うーん、他に、誰か心当たりはいないんですか？」

「ないんだよ、残念なことに。あ、でも一人いないこともないけど……ううん。なあ、逆にきくけど、二人は？　誰か知り合いいるか？」

「すいません、私は鍛冶屋にはあまり……」

「そっかあ。クライヴは？」

「――そうだな。少し待ってくれ」

私はカリファに連絡を取ってみた。

いつでも来ていいとは言われていたが、やはりお伺いはたてておくのがマナーだろうし……ん？　今またひっかかったな。

カリファは千鳥で……でも私はまだ暴露してなくて……。

――槍？

「……」

私は、思わずジオをみた。

「ん？　鍛冶師さん、なんだって？」

「あ……ああ。今からいっても大丈夫だと」

カリファは快く承諾してくれたから、それはいいのだが……。

「やった！　助かったぜ、クライヴ！　サンキュな！」

「……あ、ああ……」

――槍。

夏崎君も、槍だといっていたなあ……。

「ジオさん、さっきの、いないこともないって、なんなんですか？」

「ああ、リアルでの知り合いが鍛冶師してるってきいたんだけど、こっちのキャラの名前とか、拠点にしている地区とかまでは聞いてなくってさ」

「あんまり親しくないお友達なんですか？」

「そうでもないけど。共通の友達が一緒に居て、そいつはリアルとキャラを混同させたくないって主義だったから、聞きそびれた感じだな」

「そうなんですかー」

「……さて、行こうか。ケルト地区だ」

もはや決定的になったといってもいいだろう。

だが私は、まだ確信を持った名指しを受けていないので、これ幸いと沈黙を通すことにした。

彼女の行方

Ｃｒｏｓｓが再稼動して、一ヶ月ほどが経った。
その間、特に問題らしい問題はなく、エジプト地区の評判も上々で、順調に運営されていた。

「……」

そんなある日の日曜日。吉野は、昼食には若干早い時間ではあるが、混雑を避けて、とあるファミレスで食事をしていた。このファミレスはＣｒｏｓｓのＡＲＧに協力していて、メニューの隅にコードが載っているのだ。

ここのコードで手に入ったのは、装備していると徐々にＭＰを回復してくれるアクセサリー。回復量は微々たるものだが、実はこれ、錬金術師に加工してもらえば、魔法攻撃力中アップの腕輪になると、情報サイトに書かれていた。
魔道士としてそれは見逃せない！　ということで、吉野は本日ここまでやってきた。

「――ん？　あの子、なんだか見覚えが」

食事を終えて、ドリンクバーの一杯で寛いでいると、一人の少女が入ってきたのに気付いた。友人でもない人の顔は中々記憶しない吉野ではあったが、その格好――ゴスロリ姿とあっては記憶が刺激される。
以前、ＡＲＧが始まった当初にＶＲ喫茶で見かけた子に、よく似ていた。

「……そっか、あの子も魔道士系か」

なんとなく親近感が沸いて、ドリンクを飲みえ終える束の間、ちらちらと様子を窺ってしまった吉野であった。

ランチタイムに突入して混み始めたファミレスを後にした吉野は、その後、細々とした用事を済ませた。

全てを終えたのは、ファミレスを出て二時間ほどたった頃だ。

今日はこのまま家に帰るべく道を歩いていたところで、またしても見覚えのあるゴスロリ姿が目に入ってきた。

「今日は縁があるなー」

などと思いながら、自分の先を行く少女を見ていると――不意に、気付いた。

少女の後を追う、数人の男の姿がある。

いや、本当に少女の後をつけているのかは、わからない。

だがその男たちは、少女のことを指差し、何かひそひそと言葉を交わしている。

――正直、いい気分はしなかった。

「……」

だからといって、面識もないゴスロリ少女に、確信もなく「つけられてますよ」と声をかけることも、吉野には出来なくて。

迷っているうちに、少女と男たちは駅の構内に進み、見えなくなってしまった。

「……」

ゴスロリ少女のことは多少気になったものの、決定的な悪事というわけではない。

所詮は通りすがりの出来事だ。

結局吉野は、追いかけてまで見届けることに必要性を見出せなくて、釈然としないものを抱えながらも、家に帰ることにした。

その夜――久しぶりに、夢を見た。

静かな森の小屋の中。

吉野は――彼女は、弱っていた。

身体がだるくて、ベッドから起きられない。

だというのに、それでも彼女は、室内にある鉢植えたちを気にしているのだ。

もう数日、水をあげていない。

横たわる彼女の視界の中、徐々に萎れていく鉢植えたちに、彼女は心を痛めている。

彼女自身、食事も満足に取れず、水も――ベッドサイドに置いた水差しの残りも少なくなっているというのに。

もしこのまま体力が回復しなければ、彼女はきっと、脱水症状で命を落としてしまうだろう。

それなのに、彼女が気にかけるのは鉢植えたちのことだ。

咲かせられないことを悲しみ、水すらやれないことに、罪悪感を抱いている。

「……だれか……」

ぽつりと呟かれた言葉は掠れていた。
まだ若い――恐らく吉野と同じくらい若い女性のものであるはずのその声は、枯れて、年老いたもののように聞こえた。

「……っ」

彼女の声はそれきり途絶えた。
代わりに、吉野が叫ぶ。

「誰か助けて！」

彼女を助けて、と。

「っ」

誰かに助けを求めて――吉野は目を覚ました。
何故だろうか、酷く喉が渇いていて、吉野はベッドを出た。
キッチンにいってコップに水を注ぐ。
一杯を勢いよく飲み干し、続けて、コップにもう半分を飲む。
そこでようやく、人心地ついた。

「……」

横たわる彼女の渇きと、鉢植えに対する罪悪感。

それが未だに吉野を包み込んでいるようで――ぶるりと、身体が震えた。

「……なんで……」

夢なのに、こんなにも恐怖を感じるのか。

死の淵にある彼女をみることが辛いというのは、まだわかる。

ゲームや映画、物語のキャラクターの死を悲しみ、涙することは吉野にもあった。

だが、あの夢の彼女は、それの比ではなかった。

「……」

どうしよう、と思う。

いっそ、彼女が現実世界の人だったら良かったのに、と思う。

現実の世界で、知っている人間が相手だったら、吉野が乗り込んで救急車でも呼んで、そして鉢植えに水をやればいい。

けれど――これは所詮、夢だ。

どれだけ本物のように思えても、行って助けることは……。

「……できない？　……本当に？」

ふと、思いついた。

夢だから助けに行けない――のではない。

「夢だからこそ……行ける？」

夢は、その気になればコントロールできると聞いた。

見たい夢を見るために、その写真を枕の下にいれるとか、波の音を流して海の夢を見るとか、やりようはあったはずだと、吉野は思い直した。

「……」

無言でコップを洗うと、部屋へと戻る。

そして眠りにつくべく、気合を入れて目を閉じた。

「さて、今日はどうするか」

私はＣｒｏｓｓの私室で呟いた。

エジプト地区関連の、すぐに終わりそうなクエストは一通りやってしまった。

これ以上は連鎖するイベントになるし、そうなると一人では少し厳しいだろう。

ちなみに、ジオの槍はカリファが新調した。

――お互い、夏崎君と千鳥であることを知らぬままに。

ふふふ、人が悪いとはわかっていても、中々興味深いやりとりだった。

色気を振りまくカリファと、それにどぎまぎしつつ、丁重に槍をお願いするジオ。リアルでは、まず有り得ない。

「――と、いかんいかん。時間は大切だ」

一日二時間ルールは未だ健在だ。

ログインしたのなら、無駄なく行動しなくては。

「……そうだな、久しぶりにアリスを訪ねてみようか」

フレンドリストをチェックしてみれば、丁度ログインしているようであるし。

情報屋の彼女なら、何か面白いネタを拾っているかもしれない。

そう思った私は、アリスの邸付近を目標に、瞬間移動魔法を発動させた。

アリスは私の訪問を大歓迎してくれて、そしていつものように、花咲き誇る庭で、優雅なティータイムだ。

「……そういえば、アリス」
「なあに？　クライヴお兄ちゃん」
「ここの花の手入れは、どうやっているんだ？」
「お花の手入れ？　庭師を雇っているんだよ。なあに？　お兄ちゃん、お花育てるのに興味があるの？」
「ああ……まあ」

つい二、三日前、鉢植えを気にする彼女の夢を見た。

それで思ったんだけど、私って、植物の世話をしたことがないのですよ。

行って、彼女と鉢植えを助けるんだ！　と決意したはいいけれど、どうすればお世話できるのかがさっぱりだということに、たったいま気がついたわけです。

まあ、まだ行けてないんだから、今気付けてよかったんだけど。

そして、聞いたところで、ここでの方法が使えるとは限らないんだけど……まあ、聞いとけば何かの参考にはなるかな、と。

「基本はリアルと同じだよ。水をあげて、肥料をあげて、虫とか雑草をとってあげる。あ、でもこっちでは、魔力を一緒にあげると、綺麗に丈夫に咲くんだよ！」
「魔力？」

それは予想外というか、ある意味ゲーム世界っぽいというか。

「そう。クライヴお兄ちゃんなら簡単だよ。手に触れて、魔力を流し込んであげればいいの。やってみる？」

「ふむ……なるほど」

私はアリスの言葉に甘えて席を立つと、庭の薔薇に歩み寄った。ひんやりとしてしっかりとした手触りの茎と、ビロードのように滑らかな花びら。

私がつぼみの一つに手を触れると、ウィンドウが出てきて「魔力を与えますか？」と表示されたので、「ＹＥＳ」を選択。

すると、淡いばら色の光がつぼみを包んで光り――やがて、花開いた。

「うわあ……すごい……！　すごいよ、クライヴお兄ちゃん！」

感激のあまり、アリスが私の腕に飛びついてはしゃぐ。

「……すごい、な」

私も、呆然としながらも同意した。

これはすごい。

何がって、咲いた薔薇は、透き通って輝いているのだ。

まるでルビーで出来た細工のように。

けれど、その手触りは生花そのもの。

これは――すごいとしか、私の語彙では表せない。

「綺麗だねえ」

アリスが透き通って輝く薔薇を、うっとりと見つめている。

「――どうぞ、お嬢様」

私は、片膝ついてアリスの視線に合わせると、輝く薔薇をアリスに捧げた。

気分は貴婦人に傅く騎士である。

「え？」

私の行動に、アリスは目をぱちくりとさせたが――ふわりと微笑んだ。

「有難う、騎士様。貴方のご好意、大変嬉しく思います」

ドレスの裾を摘んで優雅にお辞儀。

そして私の手から、輝く薔薇を受け取った。

両手でそっと胸に寄せ、輝く薔薇に口付ける。

絵にもかけない美しさ――ならば写真にとりましょう！

……でも、流石にこの高貴な雰囲気を壊すのは躊躇われるので、もうちょっとしてから。

なんて思っていたら、遠くから、ぴろーん、という音がした。

「？」

何の音……というか、まさしく私が狙っていた、写真のシャッター音ではないか？

アリスは気付かなかったらしく、まだ輝く薔薇を見つめているの

で、私はそっと視線だけを彷徨わせ――少し離れた横手に、カメラ構えたスチュアートさんの姿を見つけた。

「……（その写真、後でください！）」

「……（勿論ですとも）」

アイコンタクト終了。

心置きなく私は、薔薇を手に微笑む美少女を眺めることにした。

「えへへー」

メイドさんに持ってこさせた、アリスお気に入りの一輪挿しというやつに、輝く薔薇は生けられた。

それをお茶テーブルの真ん中に据えて、アリスはにこにこ笑顔だ。

ちなみに、この一輪挿しを持ってきてもらう間に、スチュアートさんによる、アリスお嬢様撮影会が実施された。

たくさんの画像データがとれたので、一通り私にも送ってもらった。その中の一枚、輝く薔薇を手に微笑むアリスの画像は、私の携帯待ち受けに決定である。

「――さて、そろそろ話題を変えてもいいかな？」

「うん？　あ、ごめんねクライヴお兄ちゃん。何か知りたいことあった？」

「いや、特別これといって狙っているものはないんだが……エジプト地区が実装されてそれなりに時間がたっただろう？　何か面白いネタは入っていないか？」

「そうだねえ……」

考えながらアリスは、右手人差し指で中空をダブルクリックした。
マウスを持っているわけではないから、厳密にいえばダブルクリックとは違うのだろうが、要は、コントロールリングを嵌めている指を素早く二回、動かすことに意味があるのだ。

コントロールリングとは、全プレイヤーにスタート時から支給されているサポートツールだ。
一昔前のコントローラーが指輪の形をしていると思ってくれればいい。で、指輪を嵌めた指で各種操作を行うのだ。ダブルクリックは、メニューウィンドウの展開である。

アリスの目の前に、ノートを広げた程度の淡い半透明グリーンの枠――ウィンドウが展開される。
アリスの向かいに座っている私には半透明グリーンの枠しか見えていないが、展開させたアリスには、そこに色々な情報が読み取れる。ステータスとか、所持アイテム一覧とか、クエストログとか。あとは、個人的に覚えておきたいメモの欄もあるので、アリスは恐らくそれを見ているのだろう。

「スフィンクスとは戦った？」
「……ああ、真っ先に。何故かなぞなぞもないうちに、攻撃を受けた」

スフィンクスといえば、あの有名な、「朝は四本足、昼は二本足、夜は三本足」だと思っていたのに、そんな問いかけもないうちに攻撃されてしまったのだ。

「駄目だよ。そのなぞなぞは、ギリシア神話のスフィンクス。エジプト神話のスフィンクスは王様の守護者的な位置づけなの。だから、ピラミッドの探索イベントを受けてる状態でスフィンクスに会

いに行くと、問答無用で強制戦闘なんだよ」

「……あー……なるほど……」

そうだったのか……。フラグが立っていなかったんじゃなくて、むしろフラグを立ててしまっていたのかー……。

なんだかがっくりきた私は、かくりと首を倒したのだった。

「でね、そのスフィンクスを倒した後に、秘密の入り口が現れるの」

「何？」

初耳の情報に、私は顔を上げてぴしりと姿勢を正した。

しかし、秘密の入り口……？　そのようなもの見かけなかった気がするが……いや、あの時はジオの槍が折れてしまったから、それの対応であまり周囲を探索しなかったか。

槍を新調してからは、スフィンクス周辺の調査はせずにピラミッドに行ってしまったし。

「砂に埋もれているんだけど、スフィンクスの足元に秘密の入り口があって、そこの鍵は、アンクっていうアイテムであけるんだよ」

「アンク……？」

聞きなれない単語を聞き返した。

「うん。十字架に似てるんだけど、頭？　の、ところはわっかになってるの。どうする？　アンクの手に入れ方も教えようか？」

「――いや、少し自分で探してみるよ」

あんまりヒントを貰いすぎると、自分で進める楽しみが削がれてしまうので、とりあえず少し自分で探してみることにする。

「うん、わかった！　それでこそクライヴお兄ちゃんだよね！」

アリスはにっこりと笑って――そして不意に、表情を改めた。

「あ、あとね、身辺には気をつけてね。リアルでも、Ｃｒｏｓｓ内部でもだよ」

「？　何故だ？」

「最近ね、どうも魔道士系の人がリアルで失踪しているみたいなの」

「……なんだって？」

物騒な話に、私は眉を顰めた。

「まだ発表になってないし、多分まだはっきりとしたこともわかっていないみたいなんだけど、アリスが調べてみた感じでは、Ｃｒｏｓｓの魔道士系の人が失踪して、でも二、三日中には発見されてるの。怪我とかはしてないみたいで、病院で少し休んだらすぐ退院できているみたいなんだけどね」

「……」

それは……もしかしなくても、結構な大事ではなかろうか？

「地域的には？」

「世界中って言っちゃっていいんじゃないかな。Ｃｒｏｓｓユーザーが多いところには大体被害が出てるみたい」

「……何故、ニュースになっていないんだ？　そのような世界的な規模で失踪が起こっているのなら、大々的なニュースになっているはずではないか？」

というか、Ｃｒｏｓｓユーザーが多い地域というのなら、日本だって含まれるはずだ。だが、そのようなニュースを聞いた覚えはな

い。

……いや、私がニュースを聞き逃したという可能性は高いけれど。

「多分まだ国を越えて情報を共有していないんだよ。基本は失踪で、でもすぐに戻って健康だから、大きくは取り上げられてないし」

「……」

確かに、海外の事件というものは、余程大きなものでないと日本まで伝わってこない気がする。日本で耳にする海外のニュースといったら、政争、自然災害、テロ、大事故、あとは銃乱射事件あたりだろうか。失踪事件がリアルタイムで報道されているのは……覚えがないな。

「全員がＣｒｏｓｓをしていたら、きっともうニュースになっていたと思うよ？　でも、休止期間中に他のゲームに乗り換えた人もいたりするから、詳しく調べていないと、Ｃｒｏｓｓが共通項だとは、考えないんじゃないかな。もともとＣｒｏｓｓってＶＲユーザーの大半を取り込んでいるし……あ、あと、ＶＲユーザーじゃない人も、被害者にいたんだよ」

「……なるほど」

ＶＲユーザーでない人も被害者に出ているというのなら、責任をＣｒｏｓｓに負わせるのは時期尚早か。

だが、Ｃｒｏｓｓのプレイヤーの職業傾向を見ると、魔道士系に失踪者が多い、と。

「……魔道士系、なのか」

「それもその傾向が強いってだけなの。戦士系も、居なくなって発見されてる例があるしね」

「……確かに、それだけ曖昧では……まだニュースにはし辛いか」

というか、Ｃｒｏｓｓのプレイヤーであることまでは判明しても、その失踪者がどのようなキャラクターを使っているかまでは、プライバシー保護で公開されないはずだ。

……改めて、アリスは一体何者だ？　運営者権限もちなのか？

「うん、だから一応気をつけてね？　もしかしたら、このＣｒｏｓｓで目星をつけて、リアルでどうにかしちゃってるかもしれないんだから」

「……そうだな、気をつけるよ」

もし本当にＣｒｏｓｓのキャラクターの傾向を目安に失踪が……否、この場合はもう誘拐といったほうがいいのだろう。誘拐が起きているというのなら、犯人は、余程凄腕のハッカーか――運営者側、に居ることになるのではないか？

「……」

そういえば、あの少女……。

男たちにつけられていたかもしれないゴスロリ少女のことを、私は不意に思い出していた。

あのファミレスにきていたということは、彼女は魔道士系であった可能性が高い。

もし――もしも、そうだったとしたら……。

「クライヴお兄ちゃん？　どうしたの？　大丈夫？」

「……あ……ああ……」

黙り込んだ私を心配して、アリスが覗き込んでくる。

「……平気……だ」

「……？」

声が震えてしまっていては、虚勢にもならない。むしろ余計に心配をかけてしまったのだろうが……それ以上の平静を装うことは出来なかった。

私の動揺はアリスにも伝わったはずだが、私の虚勢を尊重してくれたのか――あるいは、今聞いても無駄だと思ったのか。アリスは何も言わずにいてくれた。

心配するアリスのもとを辞去して、私はふらふらと通りを歩く。

……あの少女は、大丈夫だったろうか？

……どうして私は、あそこで少女に何らかのアクションをしなかったのだろう？

決定的ではなかったからといって……犯罪は、決定的になってからでは遅すぎるというのに……！

「……どうしたら……」

どうすればいい？

あのゴスロリ少女を捜すと言っても、こちらのキャラクターはわからないし、彼女の名前も知らない。いや、リアルではゴスロリ衣装に興味がいって、まともに顔も見ていなかった。

――どうしようも、ない。

「……いや……出来ることは……ある」

手段を選ばなければ、私にも出来ることは――いや、頼める相手は、いる。

「……行こう」

もうこれ以上、もやもやと悩んで時間を無駄にしたくなくて、私はログアウトするために私室に飛んだ。

ＶＲの制限時間に大幅の余裕を残して、吉野はログアウトした。

「吉野！？　え、あれ！？」

当然、守は驚いて、時計を二度見した。以前、三十分を残してログアウトしてきたことがあったが、今回は三十分しか、ログインしていない。

「ど、どこか悪くしたのか！？」

わたわたと、守は焦った。

その守の焦りようを綺麗に無視して、吉野はカウンター越しに詰め寄る。

「叔父さん、お願いがあるの！」

「う、うん！？　ま、まっかせなさい！」

真剣で決意の篭った声と、そして何より、可愛い可愛い姪っ子の、滅多にないおねだりに、守は、ほぼ反射で承諾していた。

とりあえず、ＶＲ喫茶はバイト君に任せて、守は吉野をスタッフルームに招きいれた。人払いをしてあるので、内密な話もできる。

「で、何をしてほしいんだ？」

「人を捜したいの」

「人？」
「そう。――名前も知らないんだけど……このＶＲ喫茶にも来てた……ゴスロリ姿の女の子」
「ゴスロリ？　あーあーあー、いたな、そんな子も」
吉野の言葉で思い出した守は、ノートパソコンを引き寄せて、データを探す。
守はほどなく、ゴスロリ少女の写真データを見つけ出した。
「お、いたぞ」
「本当!?」
ＶＲ喫茶は、ＶＲの使用時間で金額が変わる。そのチェックをＩＤカードで行っており、ＩＤカードには顔写真がついているのだ。ちなみに、顔が別人に変わるほどの化粧は不許可であるが、衣装は自由である。
ということで、ゴスロリ少女はＩＤカードでもゴスロリだった。バストアップだけの写真ではあったが、それだけあれば十分だ。
「いつ来てる!?」
「まあ待て。ええと……おや、一週間前だな。それまではほぼ毎日来ているのに」
「え……」
守の言葉に、血の気が引いた。
一週間前。それは、吉野がゴスロリ少女を見かけた日だ。
「だが、それがどうした？　他の喫茶にいってるだけかもしれんぞ？」
「……」

守の言うことはもっともだ。ＶＲ喫茶はここだけではない。使いやすいＶＲ喫茶が変化して、ここに来なくなっただけと考えるのが普通だろう。あるいは、ちょっとした旅行で来られないだけとか。

だが、吉野にはそうは思えない――というか、それくらいの理由では拭いきれない不安がある。

「叔父さん、最近、Ｃｒｏｓｓの魔道士系が失踪しているって話、知ってる？」

だから吉野は、順に話すことにした。

「――……いや？　海外の話じゃなくてか？」

「海外だけど……多分、日本も。まだ大規模なニュースにはなってないらしいんだけど……各国で失踪者が出てて、それの被害者は高確率でＣｒｏｓｓの魔道士なんだって」

「……」

守は、眉間にぎゅっと皺を寄せて――無言でパソコンを操作し始めた。

ネットで検索項目を入力し、該当するニュースを呼び出す。

「……成程な……」

出てきた結果は、吉野の言葉を裏付けるものだった。

「だが、失踪者がＣｒｏｓｓの魔道士とは書いてないが？」

「それは私もわからない。Ｃｒｏｓｓの凄腕情報屋に聞いた話だから」

「ふうん……？　名前は？」

「アリスだけど……今はそうじゃなくて」

吉野は、脱線しかけた話を戻す。

「一週間ほど前、私、ＡＲＧでファミレスにいったの。魔道士系にはちょっと嬉しい装備アイテムが手に入るコードだって聞いて。そこで、彼女を見かけた」

「……なるほど。だから、この子は魔道士系であると推測したわけだ」

「うん。……で、その後……彼女が、男につけられているみたいに見えて……」

「……」

強い後悔に襲われている吉野の肩を、守は優しく叩いた。

「しかしなあ、それが誘拐犯とは限らないだろ。ゴスロリ少女のストーカーかもしれん」

「……いや、それもそれで大差ないような……」

不器用ながらも慰めようとしたのだろうが、成功したとは言い難い。

犯罪をみすみす見逃してしまったという罪悪感は、変わらない気がする。

だが、守の言葉に突っ込みをすることで、自責の念からはほんの少し、気が逸れた。

「さて、もし他のＶＲ喫茶にいったというのなら……まあ、調べられんこともない」

「ほんと？」

「ふっふっふ。叔父さんに、入り込めない場所などないぞ」

不敵に笑いながら、守は手をわきわきさせた。

「……本当は犯罪だから、止めるべきなんだろうけど……」

それでも吉野は、彼女のことが気になって気になって仕方がない。守ならば、この迷いに白黒つける情報をくれると思ったから、頼んだのだ。

――そのためにきっと、犯罪に該当する手段を使うであろうことも……予想した上で。

「――さあて、まずは何処から……って、ん？」

守は目を瞬いて、ノートパソコンの画面を覗き込んだ。ゴスロリ少女のＩＤデータ画面が更新されていたのだ。

「……なんか、たった今、うちに来たみたいだぞ？」

「え、嘘！？」

吉野はスタッフルームを飛び出して、ＶＲの待合スペースに駆け込んだ。

「……いた……！」

見逃すはずがない。紛れもないゴスロリ少女が、そこにいた。

「……っ」

駆け寄りかけて――吉野は躊躇った。

なんと話しかければいいか迷ったのだ。

結局、少女は無事だったのだから、それでいいではないかと。

「……っ」

だが、迷いを振り切って、吉野は動いた。
もしまだ少女が狙われているのだとしたら、やはり警告をしなかった自分を悔やむだろうから。

「っあの！」
「？　はい？」

吉野の思い切った声かけに、ゴスロリ少女はすぐに反応した。
うっすらとメイクをした、可愛らしい顔立ちの少女であった。

「……あの、一週間ほど前のお昼、ファミレスに行きましたよね？」
「……はい」

少女の表情が強張り、吉野を警戒するように見上げている。
無理もない。
吉野だって、同じように声をかけられたら、同じように警戒する。
いや、少女の警戒は控えめと言ってもいいかもしれない。

「その、私もあの日、ＡＲＧであそこに行っていて……何度か、ここでもその、見かけていたから……」
「――ああ、貴方もＣｒｏｓｓプレイヤーなんですね。……魔道士さん？」

しどろもどろに、でもどうにか話を続けようとする吉野に、少女は少し警戒を解き、微笑みすら見せた。

「ええ。それで……ちょっと良く見かけていたのに、最近いなかったから……心配になっちゃって……」

先ほど守から仕入れた、少女のログイン情報を流用させてもらって、吉野は何とか最近の動向に話を向けていく。

「……それは……ありがとうございます？　心配していただいて……」

「あ、いえ、すいません。……なんか、ストーカーみたいで……ごめんなさい」

言えば言うほど、己が怪しい人物になっていくような気がして、自己嫌悪で声が小さくなっていく。

「――ふふ。いいんです。あ、すいません。……ええと、どうぞ？」

幸い、少女は不愉快には思わなかったようで、吉野に向かいの席を勧めた。

「……お邪魔します」

恐縮しながら、吉野は席に着いた。

ゴスロリ少女の証言

「ええと、自己紹介させてください。私、桜庭　吉野です。高校二年生です」
「私は松本（まつもと）　友香子（ゆかこ）です。高校一年です」

初対面であることだし、吉野はまず自己紹介をした。ゴスロリ少女改め友香子も、抵抗なく自己紹介して返し、お互い頭を下げた。

「……ええと、体調でも、悪くされていたんですか？」
「――ううん……それもあるんですけど……」
「？」

友香子の曖昧な言葉に、吉野は首を傾げた。
言葉を探しているらしい友香子を急かさずに待っていると、やがて、話すべきことをまとめたらしく、吉野をまっすぐに見た。

「さっき、一週間前にファミレスで私を見かけたといっていましたよね？」
「ええ」
「そのあと、私、バイトしませんかって、声かけられたんです」
「……はい？　バイト？」

予想外の言葉に、吉野は驚くとともに拍子抜けした。
まさか、バイトで忙しくして、ちょっと体調悪くしたからＶＲは控えていたのだという、何の事件性もない――勿論、そのほうがいいにきまっているのだが――普通の話であったのか。

「ええ。ほら、ＶＲって、二時間しか出来ないじゃないですか」
「？　ええ」
バイトの話から突然ＶＲの話に移って、吉野はまたも首を傾げるが、友香子のいっていることは間違っていないので頷いた。
ＶＲは、健康に配慮して、一日二時間しか出来ない。それは、ＶＲユーザーのほぼ全てが不満に思っている、最重要改善ポイントといえるだろう。
「もっとたくさんやりたい、出来れば制限無しでって思いますよね？」
「思いますとも！」
吉野は、力強く同意していた。
我知らず、だん！　と両拳をテーブルに叩きつけて。
「ですよね！」
友香子もまた身を乗り出して、二人は互いを同志と認め合った。
「で、ですね。その研究のために、色んな人のデータが欲しいんですって。それでバイトを集めたそうなんですけど、当日になって、一人都合が悪くなっちゃって。でもレポート提出期限が迫っているから、どうしてもすぐにやりたくて……で、私が丁度良かったみたいで」
「……えええええー？」
同志の言葉ではあるが、吉野は信じられなかった。
いきなり街中でバイトスカウトされて、それを鵜呑みにしていくなんて、吉野にとっては有り得ないことだ。

大体、本当にＶＲのバイトかどうかも怪しい。街中で声かけてくるのは悪質キャッチセールスだけと信じている吉野だ。声をかけられたのが吉野であったら、絶対、相手にせずに歩き去ったことだろう。

しかし、友香子は違った。素直というか、危機感がないというか……とにかく、本当にＶＲのバイトだと信じたのだ。

「その日、もう二時間やっちゃった後だったんですけど、そもそも二時間を越えるためのテストだから、余計いいってことになって……」

「……ＯＫしちゃったんですか」

「――はい。親に怒られました。勝手にそんなことしてって」

吉野の呆れた声に恐縮し、また、親の叱責も思い出して、友香子は身を縮めた。

後になって考えてみれば、浅はかであったと友香子自身も思うが――しかし、信じてついていってしまったものは、もうどうしようもない。

「でも、幸い、本当にＶＲだったんですよ」

「……じゃあ、ＶＲしたんですか？」

「はい。ビルの一室に一台のＶＲシステムがあって、普通に起動しました。Ｃｒｏｓｓ、出来ました」

「え、嘘！？　Ｃｒｏｓｓ、もう二時間やったあとだったのに？」

「はい！」

「えー、ずるいー……って、そうじゃなくて！」

思わず本音が真っ先に口をついて出たが、ここは羨ましがってい

い場面ではない。吉野は慌てて、気持ちをシリアスモードに切り替えた。

「それで、体調が悪く？」

「はい。多分、リアルで一時間くらいたったあたりでしょうか？気分が悪くなって……気がついたら、病院でした」

Ｃｒｏｓｓでの一日は、現実時間の一時間に相当する。

友香子は、Ｃｒｏｓｓで一日過ごした辺りまでのことは覚えていたのだが、それ以降のことは覚えていなかった。

なんでも、自分から気分不良を訴え、モニターしている外の人間がそれを受け取って速やかにＶＲシートから救出し、病院に搬送したらしかった。

「気分が悪くなるかもしれないよとは事前に言われてましたし……でも、ちゃんと病院に連れていってもらえましたので、翌日には退院できました」

「……」

大したことがなかったからだろう、友香子は普通に笑っている。

不安や恐怖がなかったというのなら、それに越したことはない。

友香子の笑顔のおかげで、吉野がつい先ほどまで抱いていた後悔は、ほぼ払拭されつつある。心も落ち着いてきた。

「……あれ、でも、一週間もここに来なかったのは……？」

やはり体調不良が長引いたのかと、吉野の不安がぶり返す。

「あ……それは……親に禁止令だされちゃいまして」

「ああ……納得です。……というか、一週間で解けるなんて、お

優しい」

苦笑しながらの友香子の言葉に、吉野は頷いた。

勝手にバイトをして入院沙汰にまでなったのだ。その原因たるVRが禁止されるのは不思議ではない。これが吉野の親や――とりわけ、叔父が相手であったならば、一週間ですむとは、到底思えなかった。

なので、優しいご両親でいいなあ、と羨ましがった吉野であったが。

「……いえ……本当はまだ許可貰っていないんです」

「え？」

吉野は、まじまじと友香子を見た。

「……ええと……その」

吉野の視線を居心地悪げに受けて、やがて友香子は――

「……我慢しきれなくなって、来ちゃいました」

てへ、と笑った。

「……」

「……」

しばし無言で見つめあう二人。

怒るべきか、呆れるべきか、それが問題だ。と考えた吉野であったが――己が身に置き換えれば、友香子の行動を責める気にもなれなくて。

「……お主も悪よのう」

にやり、と、同志、あるいは共犯者として、笑った。

運営者たちの獅子身中

「――おい、榊」
「あれ、先輩。どうしたんです？　先輩のほうからくるなんて」
ビルの一室――ＶＲシステム中央管理室にいた榊に、意外な来客があった。
呼ばないと来てくれない――いや、呼んでも滅多に来てくれない、ＶＲシステムの基本設計者、桜庭　守である。
「いえ、来てくれるのはありがたいですけど」
せっかく自主的に来ていただけたので、ちょっと困っていたところを助けてもらおうと、榊はいくつかのデータをかき集め始めた。
が、そんな榊の行動を他所に、守は用件を切り出した。
「お前ら、ＶＲの規制緩和のデータ集めに、一般人ナンパしてるってマジか？」
「……は？　なんですか、それ？」
データを集める手が止まる。
榊にとって、全く予想外の言葉であった。
驚く榊の様子、その真偽を慎重に見極めようとしつつ、守は続ける。
「……なんでも、街でＶＲのデータ集めに協力してほしいって、バイト持ちかけられた奴がいるらしい」
「……だれが、そんなことを」

「お前の指示じゃないんだな？」
「当たり前です」

守の確認に、榊は断言した。

「そりゃ、時間制限の延長は最優先で研究していることですけど、一般人の協力を求めるほど、研究は進んじゃいませんよ」
「威張ることじゃねえだろ」
「まあ、そうなんですけどね」

呆れる守に、榊は苦笑を返して――煙草を咥えると、頭をがりがりと掻いた。

「……誰なんですか、その話の出所は」
「松本　友香子。一週間ほど前に声をかけられて、体調不良で病院に一日入院したらしい」
「まつもと、ゆかこ……っと」

榊は、ライターで火をつけた煙草を咥えたままでパソコンを操作し、まずは松本　友香子のデータを呼び出した。

「あー……同姓同名がいますね」
「どれ……ああ、こいつだ」

三名ほど居た同姓同名の松本　友香子の顔写真を見比べ、そのうちの一枚で確定する。
ぱっと、画面にＶＲの利用履歴が表示された。

「一週間前は……二時間、Ｃｒｏｓｓをしてますね。その次のログインは、昨日ですが」

「……いや、そいつはＣｒｏｓｓを二時間やった後、もう一時間ほどログインしたらしいぞ」
「……それは……普通、出来ませんよ」
「んなことはお前にいわれんでもわかってるよ」

ＶＲの利用履歴は、システム管理室のパソコンに集められる。どの端末ＶＲシートを使ったとしても、集められたログイン情報と照らしあわされて、一日二時間以上はログインできないように設定されている。
それを掻い潜れるのは、腕のいいハッカーぐらいだ。

「そりゃあ、腕のいいハッカーなら出来ますが……その場合でも、履歴には残ります」

例えば本当に松本　友香子が、腕のいいハッカーの協力を得て、三時間ログインできたのだとしても――そのことは、今表示させている履歴に、間違いなく記録が残る。
履歴にその表示がない以上、榊は、この噂話はガセだと判断するしかない。

「履歴を消しゃいい」
「消すって……そんな」

榊は椅子の背もたれに寄りかかり、隣に立つ守を見上げた。

「ＶＲを三時間。それはいいですよ。腕のいいハッカーなら出来ます。ですが、外部から、ここのログイン履歴を操作するなんて……並の腕じゃ無理です」

厳重なセキュリティを施したここのパソコンに外部から不正アク

セスできる者は、世界中探してもそうそういない、と榊は信じている。

「並じゃなけりゃいいんだろうが」

「そうはいいますけど、先輩の心当たりの凄腕ハッカーさんたちは、白っぽいですけど？」

「なら他にいるんだろうな」

「……」

簡単にいってくれちゃう守を、榊は胡乱に見上げた。

溜息とともに、長く紫煙を吐き出す。

「――あるいは、内部に」

「っごほ！？　な、なんすか、いきなり……！」

榊は咽た。

「凄腕ハッカーじゃないとしたら、内部の人間だ。それなら容疑者はプログラマーのほぼ全員だ」

「ちょ、待ってくださいよ！　容疑者が増えればいいってもんでもないですから！」

煙草を灰皿に押し付け、榊は守に詰め寄った。

確かに、外部から不正アクセスするよりは、内部の人間がアクセスするほうがずっと簡単だ。まして、ここで働く人間は、殆どが腕の良いコンピューター技術者たちである。ここで働けるだけの腕があるのなら、内部からログイン情報履歴を操作するのは可能だろう。

しかし、それは身内に犯人が居るということで――それはある意

味、外部からの不正アクセスよりも深刻な事態といえる。

「大体、どうして、そんなことを……」

「理由なんざ、俺が知るかよ」

少しばかりパニックを起こしかけている榊を軽くあしらいつつ、守がいくつかキーボードを叩けば、ログイン履歴に変化が起きた。

「これは……」

榊は、食い入るようにモニターに見入った。

松本　友香子のログイン情報が、増えていた。

一週間前の日曜、午前中に二時間のログイン。これは変わらない。問題はその後――午後三時台に、もう一時間のログインが記録されていた。

「やっぱ、消されてたな」

消されていたデータを難なく復元した守は、モニターを榊に明け渡した。

「……」

「それと、もう一つだ。最近耳にする、ＶＲ後の体調不良。……Ｃｒｏｓｓの魔道士系が多いっていうのは、もう知っているか？」

「……初耳です。ちょっと先輩、一体何処からそんな噂、手に入れてきてるんですか！」

次から次へともたらされる、新情報という名の爆弾。守のせいではないとわかってはいても、なんだか八つ当たりしたくなってきた。

「魔道士がってのは、Ｃｒｏｓｓの凄腕情報屋だ。アリス」
「アリス……」

画面を切り替えて、アリスという名前のキャラクターを呼び出す。数人出てきた。アリスそのものの姿のものから、似ても似つかない姿のものまで。

「どのアリスですか？」
「知らねえ」
「って、先輩！」
「なんでもかんでも俺に頼るな。それよりもだ。もし本当に魔道士を狙っているってんなら――そいつはＣｒｏｓｓのキャラと、リアルの人間とを合致させるデータを持ってるってことだ」
「……！」
「――俄然、内部犯行説が信憑性を帯びてくるじゃねえか」
「……ああああ、もう……っ」

とてつもなく、面倒な雲行きになってきた。
これからやらなければならないことを考えた榊は、逃げ出したい衝動に駆られた。

犬面人身と私

ゴスロリ少女こと松本さんと知り合ってから数日。
まだちらほらと、ＶＲの後に気分不良になったというニュースを聞くけれど、病院の検査では何の異常もないし、思い込みの類だろうという見方が強いから……多分、Ｃｒｏｓｓには影響がないと思うんだけれど……。

「……気持ち、人が減った？」

エジプト地区の通りを眺めてみて、私はそう思った。

……いや、でも、エジプト地区が開かれてそれなりに時間が経ったから、単に人がばらけただけかな。

――でも、あれから気にしてネットでニュースを探してみると、各国で似たような事件が多いらしい。
ＶＲのデータ集めにご協力ください、っていうのと……それから、アリスが言っていた、失踪後、発見というものも。
その人たちがＣｒｏｓｓの魔道士系ってことまでは、流石に載ってなかったけど……。

「……むむ」

私は、通りを歩く、魔道士系と思われるキャラたちを中心に、観察する。

この中の誰かが狙われている！　もしかしたら、犯人すら居るか

もしれない！

……なんて、ミステリ空気を盛り上げてみたところで、私に出来ることは何もない。無理無理、探偵じゃないから。

私に出来ることは、Ｃｒｏｓｓが休止されないように祈りながら、今日も今日とてプレイを楽しむことくらいだ。

「――あの、すいません」

「はい？」

不意に声をかけられて振り向くと、そこには犬の頭に人の身体のキャラクターがいた。毛並みは白で、目の色は淡いピンク。

「魔道士系の方ですよね？　実は、ちょっと手伝っていただきたいクエストがあるんです」

「ほう？」

「あ、すいません。俺、カーパスといいます。エジプト地区の実装で新しく始めたんですけど……黄金の羊毛というクエストをやりたいんです」

「黄金の羊毛……ああ」

黄金の羊毛とは、ギリシア・ローマ地区で発生するクエストだ。眠らぬドラゴンが守る秘宝、黄金の羊毛を手に入れて、依頼主であるＮＰＣ王子に届ける。

これの攻略方法には二パターンある。

まずは、真正面からドラゴンを倒す方法。これは、レベルが高いプレイヤーのパーティーでないと討伐できない。何しろドラゴンだ。弱かったら、全ファンタジーファンの怒りを買うと思われる。いや、強すぎても、プレイヤーから文句が出るんだろうけど。何事もほど

ほどがいいっていうことですかね。

さて、もう一つの方法だが、カーパスはこちらのために私をスカウトしたのだろう。

魔道士の眠りの魔法でドラゴンを眠らせ、その隙にお宝をかっさらう方法である。

「……さて」

ドラゴンを眠らせることは出来る。私はもうそのクエストを眠りルートでクリアしているから、それは間違いない。眠りの魔法の成功率には、多少ランダム要素が入ってくるけれど、今の私のレベルなら成功率は悪くないはずだから、難しいクエストではないが……。

よくよく考えると、メリットがないなあ。

腕組みして考え込んだ私をみて、カーパスは分が悪いと焦ったようだ。

「あ、勿論、手に入れたお宝は、黄金の羊毛以外は差し上げます」

「おや」

慌てて言い添えられた条件に、私は目を瞬いた。

それは――結構いい条件かもしれない。

プレイヤーは、黄金の羊毛以外にも、ドラゴンが守っているお宝を数点手に入れられる。とはいえ、数も品もランダムになるので、確実に良いものが手に入るとは限らないのだが。

「――わかった、協力しよう」

初心者に手を貸すのは、先輩プレイヤーの務めでもあるし。
私は頷いた。

「ありがとうございます！」

「……ああ」

喜ぶカーパスに、私の良心はちくりと痛んだ。

け、決っして、お宝に目が眩んだわけではな……いえ、すいません。嘘つきました。半分くらい、目が眩んでます……。
で、でも、お仕事はちゃんとしますから、許してください。

早速歩き出したカーパスの背中に向けて、私はこっそり謝罪しておいた。

さて、早速ギリシア・ローマ地区にきたわけだけれど。
クエストの場所であるコルキスの森の手前で、私は驚きの再会を果たしていた。
鬱蒼とした森の入り口付近、姿が見え隠れしている銀髪の男性は――

「ロア？」

「……！　クライヴ様……っ」

私の呼びかけに、ロアは目を見開いて――それから慌ててぴしりと姿勢を正した。まるで、上官の叱責を覚悟して待ってます、という感じで。
というか、何故に様付け？

「……お知り合い、ですか？」

カーパスが訝しげに聞いてきた。

ううむ、犬顔だと、眉を顰めた、とかは分かりづらい……かな？

「ああ、以前、」

「クライヴ様、こちらへ」

「？　あ、ああ」

ロアが話をぶったぎるように促したので、私はカーパスから離れて歩み寄った。

「申し訳ありませんが、もう少し、こちらへお願いいたします」

「……わかった」

ロアは、カーパスに背を向けるまではいかないが、正対するのは避けて――私の立ち位置もそのように誘導した。

こちらからはカーパスの動向を窺えるが、こちらが何をしているかは、カーパスにはわからないだろう位置、という感じか。

……なぜ、こんなことをするのだろうか？

疑問に思う私に、ロアは声を潜めて――しかも、口の動きがカーパスにはわからないようにしてまで――いった。

「今すぐ、お帰りください」

「……はい？」

なんですと？

「……この森は危険です。今すぐお帰りください」
「……ええと……」
ロアの真摯な視線と言葉に、私は戸惑った。
そりゃあ、この森にはドラゴンがいますから？　時折ＢＧＭ的に聞こえるドラゴンの遠吠えは中々腹に響いて、緊張感を呼び起こしたりしますけれど。
「……別に、倒しにきたわけではないから、それほど危険はないと思うのだが」
ここの森はドラゴンのために存在しているようなものなので、他のモンスターは比較的低いレベルに設定されている。
ドラゴンにさえちょっかい出さなければ、そんな危険な森ではないのだけれど……。
「――いいえ、クライヴ様のような魔道士にとって、ここは危険なのです」
「……？」
それでも、ここは危険だと譲らないロア。
何がそんなに危険なのか――不思議に思って、私は森をみやる。
ロアは、私が森を見ていることをカーパスに知られたくないようなので、視線だけを、森に向けた。

事情聴取と私

同じギリシア・ローマ地区のナルキッソスの森とは違って、こちらの森は暗い。鬱蒼と生い茂る木々が外の光の侵入を阻み、昼間でも薄暗いのだ。

外観は、前きた時と変わらない。

「……」

だが、いわれてみれば……なんだろう、嫌な感じがする……と、思う。

「……いや、しかし……」

しかし、その嫌な感じの原因は何だと問われれば、答えに詰まる。とても漠然としたものでしかない。もしかしたら、ロアが真剣にいうから、そうなのかな、と思い込んでしまっているだけかもしれない。

「っ」

不意に、目の前にあるロアの身体が、僅かに強張った。

かと思えば、一つ息を吐いて、意図的に緊張をほぐすロア。その左手は――そっと、剣の柄に添えられた。

何事かと思ったが……すぐにわかった。

「――すいません、そろそろいいですか？」

カーパスが近づいてきたのだ。

「……」

ロアが、私にちらりと視線を寄越した。

私は、ロアとカーパスとに視線を向けてから――選んだ。

「……カーパス。申し訳ないが、このクエスト、辞退させてもらいたい」

「え？　……どういうことですか」

私の突然の申し出に驚いた後、カーパスは、キッとロアをみやった。

「あなたが、クライヴさんに何かいったんですか」

「自分は、」

「ロアは関係ない。すまないが、リアルで用事があるのを思い出したんだ」

「……」

カーパスは、探るような視線で私を見つめている。

……うん、まあ、怪しいですよねー。あからさまに、とってつけた言い訳っぽいですよねー。

なんて、思いつつ、でもクライヴ君はそれくらいの視線では動じないのですよ！

私はすまし顔で続ける。

「正直、始めたばかりの新人冒険者が受けるクエストではないし、

もう少し他でレベルを上げてからにしてはどうだ？」

「それは……」

カーパスは口ごもった。

今の私の言葉は、あながち建前というわけでもない。

ここコルキスの森は、ドラゴン以外はそれほど怖くないとはいったが、それは私のレベルから見ての話だ。先ほどパーティー登録をした際にステータスを見たが、十台のレベルでくるようなところではない。

「適性レベルになって、その時まだ、君に魔道士系のフレンドが出来ていなかったら、まあ考慮しよう。――では、すまないが失礼する」

言い終えた私が素早くロアに視線を送ると、ロアは口端に僅かな微笑を乗せて、浅く頷いてくれた。

……ううむ、美人さんの微笑。レアだ。

私のお宝フォト、「美少女と薔薇」といい勝負をするくらい眼福で、是非ともカメラに残しておきたいところであったが――残念ながら、そんな時間はないのである。

私は素早く身を翻した。

「あ、ちょ」

そして、慌てて引きとめようとするカーパスを置いてロアの腕を取った私は、瞬間移動魔法を発動させた。

「っ！？　こ、ここは……」

瞬間移動魔法の白いエフェクトがおさまったところで、ロアは驚いて辺りを見回した。

あー、まあ、なんの断りもなく連れてきてしまったからな。驚くのも当然か。

「すまない、勝手に連れてきてしまって。……ここは日本地区のギルド前だ」

「日本地区……ですか」

ロアは物珍しげに、ギルドである神社の入り口――赤い鳥居を見上げている。

……もしかして、日本地区に来たのは初めてかな？

「私の最近の拠点はエジプト地区なのだけれど……カーパスもそこを拠点にしているだろうし、ギリシア・ローマ地区はあのクエストのある地区だからな」

顔を合わせてしまう確率が、比較的低そうな日本地区に逃げてきたわけだ。

……私とロアの格好でリアル日本に出没したらとても浮くのだろうけど、所詮ここはＣｒｏｓｓ世界の日本地区。

私やロアと同じ西洋系キャラも普通に行き来しているし、何の注目も浴びていない。

私は、鳥居の傍にある、荒く削った木のテーブルと切り株の椅子にロアを導いて訊ねる。

「――さて、詳しく話を聞かせてもらってもいいか？」

「……はい。出来る限り、お答えいたします」

ぴしりと背筋を伸ばし、ロアが堅苦しく応じる。

……もっと肩の力を抜いてくれていいのだが……まあ、いいか。

とりあえず質問質問。

「では……何故、あそこが危険だといったんだ？」

「……あそこには、魔道士に対する罠があるのです」

「罠？」

私は目を瞬いた。

罠ですと？　それも、魔道士に対する？

――なんだか、非常に物騒な話になってきたな。

「はい」

……嘘や冗談でいっているようには思えない。

「誰が、何のために仕掛けた？」

それは、最近リアルで起きている一連の事件と何か関係が……っていうか、こんなタイミングで無関係ですといわれても、信じ難いな。

「……申し訳御座いません。自分は、それをお答えできる立場にありません」

そう詫びるロアは、本当に、心底から申し訳なく思ってくれているようだ。

声には悔しさが滲み、両膝に置かれた手は、強く握りこまれている。

……と、いうことはですよ？

「……では、もしかしたら、私を逃がしたことは、ロアにとってまずいことになるのではないか？」

ロアの言い方や態度から、規律のしっかりとした組織で、上から命令を受けていることが察せられる。

で、カーパスが私を罠にかけようと連れて行ったのなら、それを阻止してしまったロアは……立場上まずい……よなあ、やっぱり？

「……いいえ、そのようなことはありません」

「……嘘だな」

迷うことなくダウトです。

もし、さらりと、微笑みつきで「そのようなことはありません」といわれたら、笑顔に誑かされて丸め込まれてしまったかもしれないけれど、明らかな逡巡の後、辛そうな表情のままいわれても、信じられませんて。

「っいいえ、自分は嘘をついてなど……！」

私に一刀両断されたロアは慌てて否定するけれど、駄目駄目、もう今更取り繕ったって、信じませんよー。

ロアの言い訳は綺麗に聞き流しながら、善後策を考え始めた。

「――しかし、そうなると……カーパスはロアを責めるか？　彼とは事前に面識があったのか？」

仲間内で顔見知りだったのなら、ロアを連れて瞬間移動してしまったのは、かなりまずかった……と思われる。

カーパスと残すのも悪いかと思って連れてきてしまったけれど……戻ったときに言い訳のしようがないな。

「……はい。本日が初めてではありましたが……彼が、クライヴ様をお連れする少し前に、顔合わせをいたしました」

「……」

あー、それじゃあ、かなり深刻にまずくなってくるな。

腕組みし、天を仰いで溜息をつく。

だってロアは、カーパスが罠にかけるつもりで連れてきた獲物を、それと知りながら逃がしてしまったことになるんだから。

いや、逃げたのは私の瞬間移動魔法でだけれど、それまでは疑いもなく罠に嵌りに行くところだったのに、ロアと話したら急に態度を変えて逃げ出したんだから――間違いなく、ロアの責任問題になるだろう。

「……彼とロアと、どちらが偉いんだ？」

「偉い……？　……どうでしょう。自分は、上からの命令で来ま

した。カーパスも、上からの指示で動いているはずです」
「命令系統は違うのか。……では、ロアの上司と、カーパスの上司と、どちらのほうが偉い？」
「カーパスであると思います。最終的なトップは同じと考えますが、自分と最終的なトップとの間には、上司が一人、入っております」
「……カーパスは、直接指示を受けているというわけか」
「はい、恐らくではありますが」

……これは……ますます、ロアをこのまま帰すわけには行かなくなった。
私のためを思って逃がしてくれたロア。その責を彼が負うなんて、申し訳がない。

「――ロアは、その上層部とリアルで知り合いなのか？」
「……リアルで……？」
「……あれ？」

私とロアは首を傾げあった。
どうも、いまいち単語の意味が取れなかったらしい。

おやおや？　ＶＲシステムの、高性能同時翻訳機能がまさかの翻訳ミス？
リアルって、普通に使っちゃったけど、これって和製英語？　現実でってイメージで使っているのは……一部日本人だけ？

「ああ、ええと……ロアの自宅住所や職場を知られている……のか？」

この表現で通じるかな？　言葉を選んで問い直してみた。

「……はい」
「……ううう」

今度は通じたらしく、それはいいんだけれど……残念なことに、頷かれてしまった。

ああー、泥沼だー。

Ｃｒｏｓｓ世界でだけの知り合いなら、徹底的に逃げてしまえばいいかなと思ったんだけれど……リアルで知り合いなら、現実世界での対処法を考えなければいけない。

「……クライヴ様、どうかお気になさらないでください。自分は、承知の上でクライヴ様にお話しいたしました」
「っそんなこと……！」

罰則は覚悟の上だったと静かにいうロアに、私は思わず机を、ばん！　と叩いて詰め寄っていた。

「気にしないなんて、出来るはずがない！　私の安全を思って、彼らを裏切ってくれたのだろう？！」
「……クライヴ様……」
「……は！？」

しまった！　つい興奮してしまった！

突然声を荒げた私に驚いて、目を瞬くロア。その反応を見て、私は我に返った。

「……ええと」

深呼吸深呼吸。
私は今、常に冷静なクライヴ君だから、興奮してはいけないいけない。
「――こほん。失礼した」
咳払い一つでなんとか軌道修正を試みつつ、詫びる。
「……いいえ。……ご心配頂いて……恐縮です」
ロアがはにかみ、微笑んだ。
……。
「クライヴ様？」
「っ！？　あ、ああ、すまない。ええと……それでだな」
思わず見惚れてしまったじゃないか！　ロアが美人さんなのがいけないんだっ！
と、心のうちで八つ当たりしつつ――ええと、何をしようとしていたんだっけ？
「――クライヴ殿ではござらぬか？」
「え？」
軽くパニクる私に、静かな声がかけられた。
「――ああ、リーン」

振り返った先に居たのは、リーンだ。
流石、日本地区出身のリーン。刀に侍衣装の彼は、鳥居の背景に違和感なく納まっている。

「日本地区で活動するのなら、連絡してほしかったでござるよ」
「すまない、実は突発的な事情でな」
「さて、その事情とやらは、そちらの御仁でござるか？」

リーンの視線が、私の肩越し、ロアに移る。

「ああ、紹介しよう。リーン、こちらはロアだ。ロア、彼はリーンだ」
「お初にお目にかかる、ロア殿。拙者はリーンと申す、刀使いでござる。以降、お見知りおきくだされ」
「……こちらこそ」

リーンが丁重な挨拶をし、ロアは言葉少なに応じた。
リーンに浅く礼をしたロアは、その後すぐに、私に向き直る。

「――申し訳ありません、クライヴ様。自分は、これで失礼させていただきます」

いうなり、私にも一礼。そして足早に歩き出してしまった。

「え、しかし、ロア？」

まだカーパス他、上司対策を何も練っていないのに。

「ロア、待っ」
「――クライヴ殿」

「リーン？」

私はロアを追いかけようとしたが、リーンに腕を取られて、止まってしまった。

「……あの御仁……尋常ではござらん」

「……何を……」

それは、何か複雑な事情があるようだけれど……リーンがそこまで険しい顔をするような、尋常じゃないとまで言われるような人じゃないはず……。

「――気付いておられぬか？　……あの御仁、会話の記録が残ってござらん」

「……！？」

私は、自分のメニューウィンドウを呼び出すと、会話ログをチェックした。

Ｃｒｏｓｓは、最新の会話ログの数件が残っていて、参照できるようになっている。

現に今、私とリーンが交わした会話は、私とリーンの名前とともに、しっかりと残っている。

だが――ロアの名前と、彼が発した言葉は。

「……ない……」

私の、ロアに向けた言葉は残っているのに。

ロアが私に向けた、リーンに向けた言葉は何一つ、記録されていない。

「どうして……」

何度見ても、表示されていない。

「……あの御仁は――」

「……リーン？」

「……否。なんでもござらん。……しかしクライヴ殿。ロア殿に関しては……深入りなさらないほうがよいでござるよ」

「……」

私は、何も言い返せなかった。

ロアは、私を心配して、助けてくれた――はずだ。

けれど、彼は記録に残っていない。システムに、認識、されて……いない……？

助けてくれた――しかし、不可解すぎる彼。

私は、ロアに対してどういう行動をとればいいのか、わからなくなってしまった。

「……」

Ｃｒｏｓｓ世界からログアウトした吉野は、ＶＲシートに座ったまま、動けないで居た。

ロアのことが気になって仕方がない。
ロアのことをどうすればいいのか、わからない。

「……ねえ、ちょっと？」
「！？　あ、はい？」
「終わったんなら、席、空けてくれる？」
「あ、すいません！」

ＶＲシステムの外からの要求に、吉野は慌ててｏｐｅｎボタンを押した。

「失礼しました」

ドアが開ききる前に身を屈めて滑り出た吉野は、すぐ前で待っていた次の男性客に頭を下げた。

「いいえ」

吉野の謝罪を受け入れて、入れ替わりにＶＲシートに座る男性。
吉野の目の前で、ＶＲシステムのドアは閉まり始めた。

「……」

もう男性に見えていないことはわかっていたけれど、吉野はもう一度軽く頭を下げてから――喫茶スペースに向けて歩き出した。

ロアは、魔道士に対する罠が仕掛けてあるといった。

ならば彼は、Ｃｒｏｓｓの魔道士ユーザーを狙ってなにやら暗躍している奴らの仲間なのだ。

「……助けてくれたけど……」

悪事に加担しているのは、彼の本意ではないのだろうか。それとも、以前クライヴがロアを助けた返礼だろうか。

ロアの真意も気になるが、もう一つ、気にかかることがある。

「……どうして……」

どうして、会話ログが残らなかったのか。

クライヴやリーンのログも残っていなかったのなら、それは単なるバグだ。

だが、クライヴとリーンのログは普通に残っている。

「――吉野？　どうした？」

「……叔父さん」

無意識のうちに、吉野はいつもの席に座っていた。

そして、カウンター越しに、守が心配げに覗き込んできている。

吉野は少し迷った末に、聞いてみることにした。

吉野ではコンピューターの技術的なことはわからないが、叔父の

守は、その手のことに非常に詳しいからだ。

「……ねえ、叔父さん。会話ログに、私と友達の会話は残っているのに、一緒に会話していたある一人だけ残ってないって……どういう状態だと思う？」

「は？　なんだそりゃ」

しかし、詳しいはずの守にとっても馴染みのないことであったらしく、目を丸くしている。

「私とリーンの会話はしっかり残ってるの。一言一句、間違わずに。でも、一緒に会話していたロアの言葉は、一言も残ってないの。……彼の名前も」

「……ロア？　それは前に言っていた、銀髪のイケメンか？」

守の目がきらりと光った。

「……なんか、変なところで反応してない？　私が知りたいのは会話ログのバグについてなんだけど」

「しかし俺が知りたいのは、ロアのことだ！」

「……」

力説されて、吉野はがっくりきた。

「また会ったのか？」

「……うん」

こうなれば、まず守の知りたいことを聞かせてしまったほうが早い。

「エジプト地区で、クエストクリアに手を貸してほしいっていわれたの。で、OKしてコルキスの森まで行ったら、そこにロアがいて……」

そこまでいったところで、吉野は言葉を止めた。

ちらりと、周囲を見る。

とりあえず、こちらに注目している人はいないようだが――それでも、普通の音量でいってしまうのは憚られた。

「……どうした？」

吉野は椅子から軽く腰を浮かせると、訝しむ守に顔を寄せ。

「……魔道士に対する罠が張ってあるから、逃げろっていわれた」

囁いた。

「……っ」

守が息を呑んだ。

「……」

吉野は身を引いて椅子に座りなおすと、守の反応を待った。

守は、握り締めた両の拳をふるふると顔付近まで持ち上げて――

「……吉野が、自ら至近距離に……！　一体何年ぶりか……っ」

感極まって天に向けてガッツポーズをした。

「――天誅！」

人がシリアスしているときに、何ボケとるか！　と、吉野はハリセンをフルスイング。

ずぱーん！

いつもよりも重く鋭い音が響いて、周囲の客が何事かと振り向いた。

「――んじゃ、後は頼んだぞ」

「はい、店長。お疲れ様でしたー」

お店は従業員に任せて、守は本日のシフトを終えた。吉野がＶＲを終えて帰って、一時間後のことである。

ＶＲ喫茶を出て、駐車場の従業員スペースに置いてある車に乗り込むなり、守は携帯を開いた。

アドレス帳から目的の名前を呼び出して、電話をかける。

「――はい、榊です。どうしたんですか、先輩？」

数コールで出たのは、現在Ｃｒｏｓｓの管理運営に技術顧問として応援にいっている榊だ。

いつものことであるが――いや、心なし、いつもよりも声がだるそうである。

「喜べ、榊。Ｃｒｏｓｓのバグ情報をくれてやる」

「……うえええええ」

心底嫌がっている声に守は苦笑したが、言うのをやめることはしない。

「俺の可愛い姪っ子が、ロアにあった」

「!?」

電話口の向こうから、息を呑むとともに緊張の気配が伝わってきた。

榊は、面倒くさがりではあるが、切り替えの早い、やるときはやる男でもある。

そのことを知っている守は、続ける。

「なんでも、エジプト地区のカーパスっていう、白い犬ヅラキャラに、コルキスの森まで誘い出されたんだと。で、そこにロアがいて――これは魔道士に対する罠だから逃げろといわれたそうだ」

「……エジプトのカーパス。白い犬ヅラ。コルキスの森の前で、ロアですね」

電話口から、キーボードを叩く音が微かに漏れ聞こえてくる。

「それから、ロアとの会話ログ。ロアの分だけ、残ってなかったそうだ。カーパスはまだいるか？」

「……カーパスはいませんね。……恐らく、消されたんでしょう」

「復旧できるな？」

「やります」

「よし」

榊の断言に、守は満足して頷いた。

たとえデータを消されていたとしても、榊ならば復旧できる。

データが復元できれば、そのキャラを作った人物――魔道士を狙

っている内部犯を、特定できる。そこまでいけば、この問題は解決したも同然だ。

「んじゃあ、俺の可愛い吉野のために、全力で下手人を引っ立てろよ。間違ってもＣｒｏｓｓをまた休止にしたりすんなよ」

「……善処します。色々、ご協力ありがとうございました、先輩」

「おう」

後のことは榊に任せればいい。

口には出さないけれど、守は、ものぐさな後輩を信頼していた。

自分の役目はこれで終わり、と安心して通話を終えると、上機嫌で車のエンジンをスタートさせた。

夢の鉢植え

「……」

息苦しさを覚えて――私は、目を開いた。

「……！？　……ここは……」

目が覚めたら、そこは私の部屋ではなく、見覚えのある森だった。
思わず息苦しさも忘れて、きょろきょろと辺りを見回す。

緑濃い葉が茂り、その隙間から微かな日の光が差しているここは、
Ｃｒｏｓｓで訪れた森でも、リアルで行ったことのある森でもない。

そう、ここは――夢で見た、森だ。

「やった！　ついにきたんだ！」

ぱん！　と手を打ち合わせて喜ぶ。
夢の中の彼女が弱っていく姿を見て数日。毎晩寝る前に、いくぞー、いくぞー、と念じた甲斐があったというもの！

「さて、それじゃあ、あの人はどこに？」

私はぐるりと周囲を見回して――

「……さっぱりわからん」

がっくりと肩を落とした。
何しろ周りは似たような木が乱立するだけ。足元には雑草が生い茂り、道らしきものはない。

「いつもは小屋の周辺だったけど……」

小屋らしきものは何一つ、視界に入ってこなかった。

「……どうしようか……って、ちょっと待って？」

私が夢でここを見たとき、それは私――桜庭　吉野の姿ではないことが多かった。
ここの住人である「彼女」が、私だったから。

「ってことは……んん？」

鏡はないので、とりあえず手を見てみれば、右の人差し指に、見慣れた指輪が嵌っていた。

「……Ｃｒｏｓｓのコントロールリング？　どうして……っていうか、服も！？」

腕、足、肩と視線を動かしてみれば、全体の扮装は、Ｃｒｏｓｓのクライヴそのものだった。

「……なんで……っていうか、私、そこまでＣｒｏｓｓにはまってたのか……」

確かにクライヴ君は、私の理想を形としたキャラクターですよ。
それを自分で演じて、かなり身に沁みついてきたことも認めましょ

う。

しかし……夢でまでクライヴ君になっているなんて――骨の髄までしみこんでいたとは、思っていなかったわー……。

「……いや、いくぞー、いくぞー、と念じた後、明日のＣｒｏｓｓ予定に思考がスライドしたせいかも……って、どちらにしても、大差ないかな」

どちらにせよＣｒｏｓｓにどっぷりはまっているということだから、廃人決定？

それは人として……現役女子高生としてはちょっとどうよ？　と思わないでもない、が。

「……うん、でもまあ、いいか。楽しいし」

それに、所詮これは夢である。

夢でどんな姿をしていようと、驚くべきことではないのだ。

何しろ、夢なのだから。便利な単語だな、夢。

「まあ、クライヴ君の姿をしているというのなら、クライヴ君でいこうじゃないですか。――さて？」

状況把握が一段落したところで――クライヴとして考える。

「どちらへ向かうか……」

何か目印になるものはないかと、もう一度見回して――再び息苦しさに気付いた私は、右手で喉元を軽く押さえた。

「……なんというのか……空気が、薄い……？」

ここは夢だ。空気がどうの、などと感じるはずがないんだが……
いや、それはともかく、どちらに行くのが、まだマシか。

「……？」

そう考えたところで、ふと、黄色と緑と白の光がちらついている
ことに気がついた。
先ほどまでは無かったはずの光だ。
それが――まるで蛍が光るように明滅している。

「……」

私はじっとその光を観察した。
うっすらと、小さな人らしき姿が……見えなくも、ない？　いや、
やっぱりただの光か？
とにかく、その光は、ふわふわと揺れて――行きつ戻りつしつつ、
徐々に近づいてくる。

「……」

手を伸ばせば触れられる距離にきても尚、私はじっと待った。
ふわり、と黄色い光が、私の視線の高さで止まる。他の光よりも
一回りほど大きいその光は、幾度か明滅したかと思うと、すいっと
動いた。
私の右手方向に幾らか動いて、止まる。

「？」

他の光も、その動きを追った。右手方向に動いて、止まる。

黄色と緑と白の光たちは、その場に止まったまま、明滅している。
まるで、私がついてくるのを待っているかのように。

「……まあ、他に目印もないしな」

呟いて、光を追って歩いてみれば、光は滑るように動き始めた。
とはいっても、こちらを引き離すようなことはしない。一定距離を保つように動いている。
そうして、導かれるようにして辿りついた場所は――

「……小屋だ」

まさしく、探していた小屋であった。

「案内してくれたのか……ありがとう」

小屋を取り巻くように漂っている光たち。そのうち、一回り大きい黄色の光に視線を合わせてお礼を言えば、光は一際素早く明滅を繰り返した。

「……」

お礼に対して喜んでくれているのだろうと、そう納得することにした。
さて、それでは、小屋のくたびれた感じのドアをノックして――

「……あれ？」

ドアを叩こうとした手は、ドアに触れることなく、突き抜けた。
私の手は、手首辺りまでがドアの先に消えている。

「……もしかして、幽霊状態なのか？」

呟いて、今度は額をドアに近づけてみる。

「お」

何の抵抗もなく、顔はドアをすり抜けた。

「――失礼する」

こうなってはノックも出来ないので、声だけかけて、身体ごとドアを通り抜けた。

……まあ、幽霊状態の私の声が、彼女に聞こえるかどうかは疑問ですけどね。気は心というやつですよ。

そうして小屋に滑り込んだ私は、勝手知ったる部屋の中、まずは彼女の寝室に直行する。

「……っ」

そして、息を呑んだ。

ベッドに横たわる彼女は――痩せこけて、冷たく、なっていた。

……間に合わなかった……！

唇を噛み締めて――そっと、彼女の手に触れる。

触れると言っても、私の手は彼女や物に触れられない。だから、触れるかどうかの位置で、そっとなでるように動かしただけだ。

目を閉じ、黙祷を捧げてから――私は、鉢植えを探す。彼女が横たわるベッドの向かいに、それらは並んでいた。
彼女が寝込んでしまってから、満足に水も与えられなかっただろう鉢植えたち。
土は乾き、緑であろう葉っぱは黄色く変色し――力なく項垂れている。

間に合わないのかもしれない。けれど、植物に詳しくない私の知識で、間に合わないと安易に断定してしまいたくなかった。
水をやってみたら、もしかしたら元気になってくれるかもしれない。

「……いや、水は……無理か……」

幽霊状態の私では、水を運ぶことも出来ないのだ。
かといって、彼女が必死に護ろうとした鉢植えたちを、このままにしておくのは心苦しい。

「……」

私は、鉢植えにそっと両手を翳した。
目を閉じ、祈る。

「どうか……強く生きて」

植物に話しかけると、長持ちするという。
水もなしに、こんな言葉だけでは無理だろうが……でも、今の私には、これくらいしかできることがない。
だから、せめてもの気持ちを注ぐ。

「……？」

不意に、手の中が暖かく感じられた。

目を開けば、そこには変わらず鉢植えが――

「……うん？」

黄色く草臥れていた葉っぱが、心なし、緑っぽくみえて……元気になった？

いやいや、まさか……ねえ？

「……」

有り得ない、とは思いつつも、私は、彼女が残した鉢植え全てに、同じ願いを囁いた。

運営者たちの密談

榊が仕事の合間に一服していた時に、携帯が震えた。ディスプレイを見ずに出る。

「はい、榊」

「Ｈｅｌｌｏ，Ｍａｓａｔｏ」

「Ｏｈ，Ｋａｔｅ」

聞こえてきた声で、榊の思考と言葉は、瞬間的に英語に切り替わった。海外に留学経験がある榊にとって、英語は使い慣れた言語だ。

「どうだ、何か進展はあったか？」

「ええ、勿論。マークしていた彼、尻尾を掴んだから引きずり出してやったわ」

「お、マジか、やったなー」

榊は、安堵の息とともに紫煙を吐き出した。

マークをしていた彼、とは、カーパスを操作していた人間のことだ。

捜し始めたときには、カーパスというキャラクターは既に抹消され、その存在がなかったことにされていたが――存在した、という視点で徹底的に探れば、そうそう榊の目を誤魔化せるものではない。痕跡はあらかた消されていたが、しかし榊は優秀な技術者である。蜘蛛の糸ほどの細い手がかりを追って、海外の端末にたどり着いた。

しかし、カーパスは――敢えて、彼をカーパスと呼ぶ。勿論、本名ではない――あの時点では、キャラクターを作っては消していた、

だけである。

魔道士たちを罠にかけているというのは、まだ真偽がはっきりしていなかった。根拠は、一ユーザーの申告だけである。例えそれが、ＶＲシステムの基本設計を行った天才プログラマーを経由していても、たった一人の申告だけでは、積極的な行動は出来ない。

キャラクターを作っては消しをしているだけでは、警察も、いや、内部監査すらも動けない。キャラクターをある程度自由に作成・消去できる権利が、カーパスを始めとする技術者たちには与えられているからだ。勿論、ユーザーのキャラクターをいじっていたのならまた別だが、カーパスは、彼のためのキャラを作っては消していただけだ。

だから榊は、カーパスが所属する支社にいる友人に、個人的に話を通した。

それが、ケイトだ。

「――んじゃ、そういうことで」

「ちょっと待ちなさい！」

榊が携帯を切ろうとした気配を感じ取って、ケイトは叫んだ。

「あなた、人に厄介事押し付けておいて、自分だけのんびりしようなんて、私が許さないわよ！　いい、彼はね、」

「あー、聞きたくない。いわんでくれ」

それでも携帯を切らずに律儀に繋げているのは、切ったとしても、ケイトはきっと榊のコンピューターに、手に入れた情報を丸々送りつけてくるからだ。当然、上のほうにも報告するだろう。榊の指示で動きました、と。

「きーきーなーさーい！」
「わーわーわーわー」
「彼、ユーザーの個人情報を盗んでいたのよ！」

努力空しく、その言葉は榊の耳に滑り込んでしまった。

「……あーあー……」

榊は溜息をついた。
聞いちまった、というのと、厄介なことしてくれやがって、という気持ちが半々である。

「どうする？　雅人」
「どうするって……俺にいわれてもねえ……」

榊は所詮、一社員である。そのような重要事項を決定する立場にはない。

「でもまあ、隠せないでしょ、そういうことって」

こういうことは、どうしたって、どこからか漏れるものだ。隠蔽工作をしても、いずれ情報が漏れたときのバッシングが怖い。
それくらいならば、早い段階で自ら申告しておいたほうが、企業イメージ的にはまだマシ、であろう。

「……問題は、奴が情報をどんなことに使ったか、だけどねえ……」

榊は、煙草を咥えて吸った。

「それがわからないのよ。私もちょっと調べてみたんだけど、金銭的被害が出ているわけではないし」
「やっこさんは、何かいってないわけ？」
「完全黙秘。――というか、クスリでもやってるみたいで、支離滅裂？」
「どゆこと？」
「なんでも、ＶＲ空間で幽霊に会ったとか、魔道士がどうとか、命令がどうとか？」
「……」
榊は無言で目を細めた。
会話ログに残らない相手。これは幽霊といってもいいだろう。
魔道士というのは……魔道士に対する罠、だろうか。
そして――命令、ということは。
「雅人？　ちょっと、聞いてる？」
「……ん？　ああ……まあ、上のほうには、ケイトから報告よろしく」
榊は、嫌な予感はとりあえず置いておいて、後々の面倒の回避にかかった。
携帯の向こうから、ケイトが苦笑した気配が伝わる。
「……仕方ないわねえ。わかった。私のほうから報告しておくわ。そのかわり、貸し一つだからね」
「へーい」
流石に、大学時代から付き合いがあるケイトだ。榊のものぐさに理解がある。榊は、有難く借りておくことにした。

ケイトとの電話を切ったあと、椅子の背にもたれかかって溜息をつく。

「しっかし、困ったねえ……結局、吉野ちゃんの情報の真偽はわからずじまいだわ」

状況は、カーパスが黒だと示している。

だが。

「……命令、ね」

それはつまり――まだ、終わっていないということか。

ケイトの言うとおり、カーパスがクスリを使用しているのなら、その証言に信用は置けない。個人情報をどのように扱ったのかも、判明するには時間が掛かるだろう。

「……なんか、結局何も変わってなくない？　うわ、俺無駄な仕事しちゃった？」

タダ働き、あるいは無意味な超過勤務。その手の言葉は、榊のやる気をごっそり削り取る。……もともと、そう多くもないのだが。

「……今は、待つしかない、かね……」

魔道士に対する罠に関しては、少し様子を見てみるしかないだろう。カーパスの単独ならばこれで終わってくれるだろうし、そうでないのなら――また、何かアクションがあるだろう。被害が出てからしか動けないので、後手に回ることになるのが非常に心苦しいが、現時点で打てる手は……思いつかなかった。

「それと……情報漏洩」

こちらの対応は、会社のトップのお手並拝見である。

何週間かの休止は、致し方ないだろうが――

「……やっぱ。先輩にどういいわけしよう」

Ｃｒｏｓｓ休止させんなっつっただろうが！　という守の怒鳴り声が聞こえてきた気がして、榊はぶるりと身体を震わせた。

再会

「さて、コードはどこかな」

吉野は、ＣｒｏｓｓのＡＲＧでコンビニまでやってきていた。

吉野がロアとカーパスに出会って少ししてから、Ｃｒｏｓｓの海外支社社員がユーザーの個人情報を盗んでいたことが判明し、Ｃｒｏｓｓは自主休業した。

現在も自主休業中なのだが、ＡＲＧは行われている。当初はＡＲＧも撤去していたのだが、ユーザーから多くの要望があって、ＡＲＧは行うことになったのだ。

ただし、個人情報に関しては神経質になっている時期のため、ＩＤや登録パスワードは必要ないつくりになっている。コードを接写してパスワードを手に入れて、Ｃｒｏｓｓ再開時、ギルド職員に合言葉として伝えれば、限定クエストが出現するという方式である。

「噂では、そう遠くないうちに再開してもらえる……みたいだし」

個人情報流出による実質的被害が報告されていないおかげだ。個人情報をどうにかする前に逮捕できたらしいので、むしろ、本社の素早い対応に賞賛の声があがっているくらいだ。

「――これでよし、と」

ぴろーん、と、コード接写完了の音が鳴った。

これで、Ｃｒｏｓｓ再開時に遊べるネタが一つ増えたというわけだ。

吉野は上機嫌で、コンビニのドアを押して入る。ついでなので、コンビニスイーツも買うつもりで出てきたのだ。

「ありがとうございましたー」

コンビニ店員さんの声に背中を押されながら、吉野は一人歩く。

――その後からついてくる人間の存在には、気付かずに。

「♪」

上機嫌で、吉野は歩いている。

しばらくは通り沿いを歩いていたが、家への近道のため、人通りの少ない路地に入る。

背後に足音は聞こえるが、吉野の前方には誰もいない。

だがそれも、この路地では珍しいことではなかった。いや、吉野の後ろに人がいることのほうが、むしろ珍しいくらいで――

「っ!?」

背後の足音がいきなり早くなったかと思うと、吉野の顔が、何か白いものに覆われた。

「な、何!?」

がさがさという、ビニールの音――恐らくは買い物袋が、吉野の顔に被せられていた。

慌ててビニール袋をはがそうと、吉野は手をやるが。

「え!?」

なんと、その手ごと、何かに巻かれ、拘束されてしまった。

「ちょ、ちょっと！　何を……誰か！」

何とか自由になろうと、吉野はもがく。

「チッ！」

舌打ちして、男は、吉野の身体を乱暴に引っ張った。

「わっ」

引っ張られ、吉野の身体が横に泳ぐ。予想外の動きだったので、吉野の足はもつれた。

「な！？」

そしてそれは、男にとっても予想外であった。

吉野が男に体当たりをしかける形になり――それをまともに受けた男は、しりもちつく破目になった。

「……！」

男の上に重なるように倒れた吉野は、それでもこれはチャンスだと、急いで身を起こそうとするが――

「っ」

両手は首元で何かに縛られてしまっている。素早く起き上がるのは難しかった。

「くそ……！」

男の手が、乱暴に吉野の腕を掴む。

「っ誰か、助け」

「！？　何をしているんですか！」

「っチィ……ッ！」

別の男の鋭い誰何の声に、吉野を掴んでいた手が離れた。

そして、すぐ傍を走り抜ける足音。

「大丈夫ですか！？」

「は、はい、有難う御座います……」

今度は、通りかかってくれた男が吉野に駆け寄って、腕を拘束するものを解いてくれた。

吉野は、頭に被せられたビニールを剥ぎ取って、お礼をいい――

「……の、乃木さん？」

「……あなたは……あの時の」

吉野と乃木　宗琳は、互いに驚き、まじまじと見つめ合った。

「……すいません、ご迷惑お掛けして……」

「いいえ、大変なことにならなくて良かったです。しかし……一体なんだったのでしょうね」

あの後吉野は警察に被害届を出し、宗琳はそれに付き添った。

襲われたとはいえ、吉野はビニール袋を被せられていたので犯人の顔は見ていない。宗琳も、見たのは一瞬程度。モンタージュを作成できるほどではなかったので、あまり期待は出来ないが、届けを出しておけば、警察が見回りをしてくれる。

まさか戻ってくるとは思わないが、それでも警戒してもらうことで、多少は安心できるだろう。

「桜庭さんにも、心当たりがないんですよね？」

「ええ、さっぱり」

警察にも答えたが、吉野には襲われる心当たりがない。

「コンビニに行くだけでしたので、財布はポケットですし、そもそも、ひったくりとも違う感じでしたし……」

言いながら、吉野は自分のコンビニ袋を持ち上げた。

がさがさという音が、突然視界を覆われたあの恐怖を思い出させるが――しかしこのビニール袋を捨ててしまうのは、中のものが持ち辛くなるので、いまいち踏み切れない。

「……あー……ロールケーキがぐちゃぐちゃ……」

せっかくのスイーツが、あのもみ合いの最中に潰されていた。見るも無残な姿に、悲しくなる。

「災難でしたね。……よろしければ、どこかでお茶でも如何ですか？」

「――はい？」

突然の申し出に、吉野は宗琳を見上げ――今更ながらに、彼が洋服姿であることに、気がついた。

「ああ、丁度いいですね、そこのＶＲ喫茶にしませんか」

「はいい？」

またしても聞き返した。

今、目の前の人はＶＲ喫茶といわなかったか？

確かに、交番を出て少し歩いた今、吉野たちの前にはＶＲ喫茶の看板が見えているけれども。

「あの、ＶＲ喫茶って、どういうところか……ご存知です？」

思わず聞いた。

目の前の人は、霊能力者殿である。偏見ではあろうが、なんというか……そういうハイテクなものには疎いのではなかろうかと、聞いてしまった。吉野自身、霊能力を持っていてもＶＲにどっぷりはまっていることを棚に上げて。

「勿論知っていますよ。ただ、入ったことはないので」

「あ、ああ、なるほど。好奇心ですね」

それなら、まあ、納得できる、と吉野がこくこく頷いたところで。

「ええ。いつもは自宅でやっているものですから」

「……いつもは、自宅で……？」

「はい。さ、行きましょう」

「えええええ、ちょ、ちょっと待って乃木さん！？」

さっさと歩いていく宗琳の後を、吉野は慌てて追いかけた。

混乱には一撃を

「いらっしゃいませー……って……あれ、もしかして……？」

自動ドアを潜れば、受付にいたバイトに挨拶されて――訝しげに、見られた。

「……もしかして、乃木　宗琳さん……ですか？」

「――ええ」

「っマジ、本物！？　あ、あの、俺、聞いてみたいことがたくさん……！」

「何々？　誰か有名人でも来たの？」

「え？　乃木　宗琳？」

「どこどこ！？」

騒然である。

「……そうだよねー、そういう反応するよねー」

宗琳を囲む人垣から逃れて、吉野は一人呟いた。

有名人が、何の変装もなく人のいるところに入ったら、こういう反応をされるだろう。

「……いや、いつもは和服姿だから、洋服の今日は変装していることにならなくも？」

とはいえ、一目で看破されてしまったのだから、洋装程度では変装にならないと実証されてしまったわけだ。

「――お客様方、お静かに願います」

張りのある低い声が響いた。

思わずその声の主を振り仰いでしまうような、力のある声だった。

「どうぞ、御席にお戻りください。そちらのお客様は――」

宗琳に向けられた視線が、ふと、吉野に止まり……そこで言葉も止まった。

「……」

吉野はとりあえず、笑ってみた。

「……そちらのお客様は、お連れ様とご一緒に、どうぞ、こちらへ」

に、と、どこか不穏な笑みを吉野に返し、声の主――店長である守は、二人をスタッフルームに招いた。

「――で、どういうことだ、吉野」

宗琳に話を聞きたがるお客を手早く、それでいて丁重に追い返し、バイトはぞんざいに仕事に戻して、守は聞いた。

「ええと……どういうことかは……私も聞きたいくらいで」

意外にもシリアスモードの守に、吉野は戸惑いつつも本音を言う。

何故に宗琳はいきなり吉野をお茶に誘い、しかもその席をＶＲ喫茶……よりにもよって、守の店で取るのか。

結果として、守と吉野は二人して、宗琳に視線を向けることになった。

さて、その宗琳はというと、守と吉野を交互に見て「――ああ、なるほど」と、一人で納得していた。

「ご家族なんですね」

「？　まあ、叔父と姪だが……？」

話したのか？　と視線で問うてくる守に、吉野はぶんぶんと首を横に振った。

「お二人とも、オーラが似ていらっしゃいますね。強くて、明るい」

「……」

いきなりのオーラ鑑定に、守は苦虫噛み潰したかのように顔を顰め、吉野はそんな守を不思議に思い、仰ぎ見た。

「霊感が強くて……ご苦労なさったでしょう」

「っ。……一体、何をしに来たんだ」

ハッと息を呑んだ守は――押し殺した声で、聞いた。

「……」

吉野は不安になった。こんな守は、初めてだった。

「――そもそもは、学校近くの林の確認に来たのですが」
「……あ……」
言われて、吉野は気付いた。
確かに宗琳と出会った路地は、吉野の学校裏の林にも続いている。以前、宗琳はそこの林を仕事で訪れていた。
「もしかして、また何かあったんですか？　というか、そういえば、夏にあの林が大変なことになっていた原因って、なんだったんですか？」
「大丈夫ですよ。夏は、あそこの林にあった要石が劣化して割れてしまっていたのが原因でした。新しい石に移しておきましたので、もう直っていたでしょう？」
「はい。……あ、結局、覗きにいってしまった友人が何人かいたんですが……」
不可思議現象が続いていた学校裏の林に、肝試し行こうという提案があったのだが、吉野は、霊能力者、乃木　宗琳がやめるようにいったから、と中止を申し入れた。
本物と評判の霊能力者が止めたということで、素直に忠告を聞いたか怖気づいたか、とにかく中止は受け入れられたが、余計に見に行きたがったものも何人かいた。
仕方ないので吉野も付き添ってみたが、その頃には既に宗琳が仕事を終えていたらしく、何事もなく終わったのだ。
「ええ。そういう方もいますので、急いで修復しました」
「お見通しでしたか。おみそれいたしました」
吉野は深々と頭を下げた。

そんな二人のやりとりを見ているうちに、守の肩からも力が抜けていた。

スタッフルームのドアを開け、そこで聞き耳立てていたバイトを追い払うついでに、飲み物を持ってくるよう指示する。

「一応、アフターケアで、確認に来てみたのですが……まさか、あのような場面に行きあうとは。今日、確認にいかねばと思ったのもまた、お導きだったのですね」

「……あのような？　吉野？」

「ああ……うん。……ちょっと、路地で……襲われた」

「なにい！？」

最後の一言は小さかったのだが、守の地獄耳は聞き逃さなかった。吉野の肩をがっしと掴んで、がくがくと揺さぶる。

「誰に、どこで！？　何ために……っていうか、怪我！　怪我はないかー！？」

「お、おおお落ち着いて、叔父さんっ」

強く揺さぶられ、舌を噛みそうになりながらも、吉野は訴える。

「あの、お茶をお持ちしました……」

バイト君の控えめなノックは、興奮する守と、揺さぶられている吉野には届かなかった。

「ああ、ありがとうございます」

宗琳が、お茶とお茶菓子が乗ったお盆ごと受け取る。

「……あの、サイン、いただけませんか？」
「――ええ、いいですよ」
お盆をテーブルに置き、差し出された手帳にサインをする。
芸能人ではないので、普通に名前を書くだけだ。別にありがたみはないはずなのに――何故か、サインを頼まれることがあった。
「……有難う御座いました！」
まるで、それ自体がお守りかのように、バイト君は大事に抱えて退室した。
「……私の名前のサインには、別にご利益はないのですけれどね……」
護符を書いたわけではないのに、あそこまで感激されると――ちょっと呼び止めて、改めて護符を書いたほうが良いのだろうかと、宗琳が少し迷っているところで。
「――いい加減に落ち着けっ！」
がす！　と、ハリセンならぬ、コンビニ袋アタックが、錯乱する守の頭にクリーンヒットした。

乃木氏の見解

「つまり、コンビニ帰りに、いきなり後ろから襲われたと？」
「うん」

ようやく理性を取り戻した守に、吉野はロールケーキを口に運びながら頷いた。形が崩れているが、もったいないので美味しく頂く。

「一体どこの不届きものだ。俺の吉野に手を出しやがって……夏崎か？」
「なんでそこで夏崎君が出てくるかがわからない」
「ストーカーだろ？」
「違うから！　彼とはただＣｒｏｓｓ……」

不名誉なレッテルが貼られるのを回避するため、夏崎の弁護を試みた吉野であったが――その途中で言葉を止めた。

「？　どうかしましたか？」
「……あ……い、いえ……」

吉野は、素直に話すべきか迷って言葉を濁す。

「……Ｃｒｏｓｓの魔道士系が、狙われているってやつか？」

しかし、吉野が躊躇った言葉を、守が口にしてしまった。

「！　そうなのですか？」
「い、いえ、そうと決まったわけではないんです！　ただ、知り

合いが、そういう傾向があるんじゃないかって、可能性を以前、指摘していたことがあって……」

驚く宗琳に、吉野は急いで手を振って否定する。

魔道士系が狙われているかも、という話をしたのは確かだし、吉野が魔道士で、今日襲われたのも確かだが――その二つが繋がっているとは、まだ限らない。

「……大体、私が、Ｃｒｏｓｓの魔道士系かなんて、そんなの……！？」

呟く途中で、気がついてしまった。

流出した、ユーザーの個人情報。確か、その個人情報には、ユーザーが作ったキャラクターのステータスも含まれていたはずだ、と。

「……いや、流出したとは言っても、個人情報がどこかに流された痕跡はなかった」

「そう、なの？　じゃあ、やっぱり偶然……」

守の言葉に、吉野は胸を撫で下ろした。

何故襲われたかという不安が残るとしても、これ以上、Ｃｒｏｓｓの評判が落ちるような事態は起きて欲しくなかった。ましてそれが、不確定な推測であり、吉野自身がきっかけになってしまうのは、余計に避けたい。

「……と、断言も出来ねえだろうな」

「え……どういうこと？」

「コンビニに行ったんだろ？　コードを撮らなかったか？」

「……撮った……」

コンビニに行って、そこに貼ってあったポスターからコードを貰い、その後買い物をして帰ったのだ。

「コンビニにあるコードは、魔道士系のために作ったクエストコードだ」

「……」

そう、確かにホームページではそういう触れ込みであった。

「……なるほど。では、そのコンビニのコードを撮りにきた人は、魔道士系である可能性が高いということですね。……しかし、お詳しいですね、守さん」

「……まあな」

得心する宗琳に、守はそっけなく返す。

守は吉野に、自分がＶＲシステムの基本を設計し、Ｃｒｏｓｓの製作にも関わっていたことを話していない。そして、後輩の榊が現行で関わっていることも話していない。

吉野にも話していないことを、赤の他人である宗琳に話すつもりはさらさらなかった。

「……そういうあんたも、なんか普通に話についてきてるが、ちゃんとわかってるのか？」

「……ふふ、流石ご家族ですね。反応が良く似ています。理解はしているつもりですよ。私もＣｒｏｓｓプレイヤーですから」

「え、あ、やっぱり！」

吉野が身を乗り出した。

先程それらしいことを言われて気になってはいたのだ。いや、正

確にはＣｒｏｓｓプレイヤーとはいっていなかった。「いつもは自宅でＶＲをしている」といっていたのだ。

「あの、気になっていたんですけれど！　……ＶＲシステムを、個人でお持ちで……？」

「はい」

「……」

あっさりと頷いた宗琳に、吉野は絶句した。

一台八十万超えのＶＲシステムを個人で所有している。

その事実に、嫉妬の炎がめらめらと……。

「社会人ならば、手が出ないものでもありませんよ？　車一台買ったと思えば」

「ローンもきくしな」

「……大人の金銭事情と一緒にしないでくださいー」

吉野は不貞腐れた。

「まあまあ、吉野にはここがあるじゃないか」

守が、吉野の頭をぽんぽんと叩いて慰める。

何を隠そう守は、吉野の高校近く、そして吉野の自宅近く、という立地条件を選りすぐって、ここにＶＲ喫茶を開いたのだ。

吉野はマイＶＲシステムを持っているといってもいい状態なのだが、けじめとして、使用料金はきっちり払っている。更に、順番待ちなしで、いつでも入れるようにするとも守に言ってもらえたが、これもまたけじめとして、吉野は順番待ちをしていた。

「……うう。……でも乃木さん、こういうゲーム、お好きなんですか」
「そうですね。好きですけれど……でも、きっかけは違うんです」
「違う？」
「はい。実は知人に、Ｃｒｏｓｓの世界は……霊界に近いのではないか、といわれたものですから」
「霊界ぃ？」
大変失礼ながら、吉野は非常に胡散臭く感じ、問い返してしまった。
「おや、納得できませんか？　吉野さんは強い霊力をお持ちですのに」
「それは……」
改めて言われると――確かに、突拍子もない、と断言しにくいことに気がついた。
霊界、とはいっても、それはイコール死者の世界、ではない。普段見ている夢の世界も、魂が霊界に里帰りしている結果だという説がある。確か宗琳も、その説を支持していたはずだ。
Ｃｒｏｓｓ世界は夢の世界である。
そういいなおしたとしたら……むしろ吉野は、納得するかもしれない。
勿論、Ｃｒｏｓｓをしているのが夢だ、とはいわないが。
「……たしか、ＶＲシステムは、シートに座ったユーザーを、半睡眠状態に導いて……とかなんとか……」

以前聞き流した説明を、記憶の底から掘り起こす。
難しいことは吉野にはさっぱりだったが、半睡眠状態といわれれば……夢、というのに更に信憑性が出てくるように思えた。

「ええ。それを聞いて私も興味を持ちまして。ですがまあ……このような場所に頻繁に通うのも躊躇われましたので、思い切って買ってみたのです。そうしたら、予想以上に面白かったものですから。今では立派なヘビーユーザーですよ」
「ミイラ取りがミイラになったか」
「おや、別にＣｒｏｓｓをバッシングするつもりは無かったですし、本来の目的を忘れていたわけでもありませんよ。確かに、Ｃｒｏｓｓ世界は霊界に近い。……一部、重なっているといっても、いいかもしれません」
「「……」」

宗琳の言葉に、吉野と守はそれぞれ黙り込んだ。
それをみて、宗琳は言葉を足す。

「ああ、ご心配なく。重なっていると感じても、それはごく一部、それもごく短い時間です。人体に悪影響はないでしょう。まあ、多少、酔うことはあるでしょうが」
「あ……なるほど」

ＶＲを始めた当初、確かに吉野は「酔って」いた。回数を重ねることで慣れたのか、今ではもう感じることはないが。

「ですので、向こうでお会いしたら、またよろしくお願いするでござるよ、クライヴ殿」
「――は！？」

全く予想外であった宗琳の言葉と、茶目っ気たっぷりの笑顔とに、吉野はフリーズした。

襲撃と私　1

無事、Ｃｒｏｓｓは再開した。
流出した個人情報が悪用されなかったのが幸いしたのだろう。

……私が襲われたのも、結局アレきりで、原因ははっきりしない。
まあ、口を噤んでおこうと思う。これ以上不祥事が続いたら、Ｃｒｏｓｓ、休止どころではなく、閉鎖されてしまうかもしれないし。

さて、私は今、日本地区での討伐クエスト、百鬼夜行斬りを終えたところだ。
斬る、とはいうものの、剣スキルは必須ではない。要は、百匹の妖怪を倒せばいいのであって、広範囲攻撃魔法を使える私には、結構良い経験値稼ぎのクエストなのである。
現に今、私のレベルは一つ上がり、早速、手に入れたポイントを割り振ったところだ

そして――そこで私は、気がついた。

百鬼夜行が出没するという設定の大通り――日本地区は平安京のようなつくりになっているため、大通りというのは本当に広い――の中央にある人影に。
夜の時間、月明かりを弾く、銀の色は……。

「……ロア……？」
「……クライヴ様」
「ロア！」

私はロアに駆け寄った。

ロアが私を罠から逃がしてくれた後すぐに、Ｃｒｏｓｓは休止になってしまった。彼がどうしていたか、ずっと気にかかっていたのだ。

「心配していたんだ、ロア！　あれからどうなった？　何か罰を受けたとかは……！」

「……申し訳ありませんが、今、そのことをお話しする時間がありません。――お逃げください」

「！？　……今度は……一体、なんだ？」

開口一番の警告に、私は気を引き締めた。

また罠が張られているのか？　だが、私は今単独行動だ。まさか、ロアが私を嵌めようとしているとも……思えないし。

「……これから数箇所で、襲撃があります」

「襲撃……？　それは……何かのイベントか？」

いや、それなら逃げろとはいわないだろう。防衛クエストならば、むしろ人手が欲しいはず。手を貸してほしいというのならともかく、逃げろとは……？

「――魔道士様が……いいえ、我々が……クライヴ様方を、襲撃致します」

「っ！？　……一体、どこを……！？」

「……街を」

「何処の！？」

「……」

名前を求める私に、しかしロアは沈黙した。

そうか……そうだよな。

「……いや、すまない。今回もきっと、規律を破ってまで、教えてくれたのだろう？　ありがとう」
「いえ……」
彼には彼の立場がある。こうして情報をくれるだけでも、非常にありがたいことなのだ。
「だが――すまない。私一人が逃げるなんて、出来ない」
「……そのように仰られると、思っておりました」
ロアが苦笑を見せた。
予想していたと、その微かな笑みは告げている。
「……ロアに、迷惑をかけることになるか？」
確認するまでもなく、そうなるだろう。彼は、内部情報を私に漏らしているのだから。
私がこの情報を広めたら――私を逃がした前科があるロアは、真っ先に疑われるだろう。
「――いいえ。クライヴ様の思うとおりになさってください」
「……すまない」
けれど――それでも私は、彼の言葉に甘える。
「――ご武運を」
「ありがとう。ロアも、気をつけて……」
踵を返して去る彼に、心からの感謝を告げて――そして私は、フ

レンドリストをチェックした。
アリス、カリファ、ジオ、シンゴ、スチュアートさん、ユラ、リーン……今ログインしている知り合いはこれで全てか。
結構居るな。

「……いや、待てよ？　というか……そもそも、どうやって襲撃をするんだ？」

Ｃｒｏｓｓは、モンスター以外への攻撃は、システムで禁止されている。例外として、一対一の決闘というものがあるが……まさか、ロアがこれを指していったとは思えない。
だが、決闘以外で、ロアたちの攻撃がこちらに通るはずもない。

「……ん？　もしかして意表を突いて、あれは本当に、イベントのお誘い……だったりするのか？」

ロアが運営者権限もちのプレイヤーで……実は前回の罠もイベントで、私が撤退したから続かなかったとか？　そして今回は、ああいうやりかたで、これからイベントが起きますよと、知らせに来てくれたとか？

「……いや、しかし……」

ロアの「逃げろ」という気持ちは、本物だったと……思うんだがなあ……？
軽く混乱してきたので、腕組みして考え込む。
……ここ最近、イレギュラーなことが起きているのは確かだし。

「――とにかく、行ってみるか」

まずはカリファにしよう。
ケルト地区の鍛冶場に一人でいるのなら、襲撃イベントが起きたときは大変だろう。

「テレポート」

杖を構えて、とりあえず、ケルト地区への瞬間移動魔法を発動させた。

辿りついた先では、既に混乱が始まっていた。

「これは……っ」

火が人々の行く手を遮り、乱雑に積み上げられた岩々が通りを分断し、建物には氷が張り付いている。
逃げ惑う人々が私の横を通り過ぎていくが――彼らは、一体何処を目指しているのだろう？　何処に逃げれば安全を確保できるか、わかっているのだろうか？

「……いや、今はそれよりも……っ！」

私は通りをざっと見回した。
行きかう人々の頭上に、名前の表示はない。少なくとも、私とフレンド登録した人間はここにはいないということだ。

「カリファはまだ、鍛冶場か……！」
「！　ここにもいたか！」
「！？」

突然の誰何、そして眼前に迫った剣先に――私は反射的に手で顔を庇い、ぎゅっと目を瞑っていた。

本当の剣であれば、これくらいの対ショック態勢で防げるはずがない。が、システムが正しく機能していれば、このショック態勢すら、必要がない。

対人への攻撃行動は、システムで全て急制動をかけられる――その、はずだった。

けれど、反射的に防御行動を取った私の耳に届いたのは、システム警告音ではなく。

ぎぃん！　と、金属で金属を強く打つ音だった。

「っクライヴ！」

「ジオ！？」

私と剣士の間にジオが割り込んで、私に対して振り下ろされた剣を、槍で受け止めていた。

「逃げろ、クライヴ！　今、対人攻撃エラーは出ない！」
「……え……」
「喰らったらマジでやばい！　逃げろ！」
剣士と切り結びながら、ジオが叫ぶ。
「な……っ」
――正直、信じられない、という気持ちが強い。
だが……。
「きゃあああ！」
「っ！？」
悲鳴を聞いてそちらに視線をやれば、女性が一人、別の剣士の攻撃を背中から受けて倒れるところだった。女性を切り伏せた剣士は、更なる犠牲者を求めて、逃げ惑う人々を追いかける。
「……っ」
逃げる女性を、背後から……！
「クライヴ！」
「！？」
戦慄と――それ以上に、怒りに襲われていた私を、ジオの声が引き戻した。

「逃げろって！　こいつらは、特に魔道士を……ぐっ！？」
「！　ジオ！？」

ジオの呻き声に、私は焦った。
慌てて様子を見れば、ジオは腹を抱えて蹲っている。
どうやら、剣を押し留めるのに気を取られている隙に、蹴りを入れられたらしい。

「邪魔だ！」
「が！？」

両膝をついたジオの頭を、剣士が乱暴に払う。ガントレットによる強い衝撃を受けて、ジオは倒れた。

「ジオ！」
「ふん、お前はどうだ？」
「……っ？」

地面に倒れこんだジオに駆け寄ろうとした私の前に――剣の切っ先が突きつけられる。
どうだ……とは……？

「お前は、どれだけのマナを持っている？」
「……マナ……？」

ファンタジーの設定では良くある、魔法の源的なアレのことか？
しかし、Ｃｒｏｓｓの世界にマナの設定はなかったはず……いや、今はそんなことを考えているときではない……！

「っバインド！」

私は、行動束縛呪文を発動した。

剣士の足元に魔法陣が展開し、発生した光が剣士を包む。

「な！？」

突然の発光に、剣士は驚き――よろめいた。

「……っ」

バインドが、効かなかった。効いていたのなら、よろめくことすら、ない。

魔法の失敗に、私は歯噛みして――剣士と距離を取るべく、一歩、後退する。

「驚かせやがって……お前らの魔法は、俺らには意味がねえようだぜ？」

私の逃げ腰を見て、剣士がにやりと笑う。

これ見よがしに、剣が突きつけられる。

「……」

……剣士の男は、もともと抗魔力が強いのか、それとも装備のおかげか……。

いや、そもそもこの事態にＣｒｏｓｓの常識を当てはめることが、間違っているのかもしれない。

――そう、ならば……。

「観念しな」

見せ付けるように、剣士はゆっくりと歩を進め、剣を振りかぶり――

「――吹っ飛べ！！」

私は、叫んだ。

「っな……！？」

直後、剣士の体が不自然に急停止し、驚く剣士の顔が、私の目の前に無防備に晒される。

そして――一拍後には、剣士の体が大きく吹き飛んでいた。

私の予想以上に。

「……たーまやー……？」

思わず緊張感のない声をかけてしまったが……いや、まさか、あんな漫画的な飛び方をするとは、正直思わなかった……っと、そうだ、ぼうっとしている場合ではなかった！

「ジオ！」

私は、倒れたジオに駆け寄った。

「ジオ！　無事か！？」

「……う……クライヴ……？」

「よかった……大丈夫か？　ＨＰは？」

「……平気だ……そんなに、減ってない。少し、意識が飛んでたみたいだな……」

まだ痛みが残っているだろう頭を押さえながら、ジオが身を起こす。

「あいつは……？」

「吹っ飛ばした」

「吹っ飛ばした……？　魔法でか？」

「……まあ、似たようなものだと思う」

目を丸くして驚くジオに、私は考えながら頷いた。

Ｃｒｏｓｓの魔法としては発動しなかった。だが、力を込めて「吹っ飛べ」といっただけで本当に吹っ飛んだのは……魔法と言ってもいいだろう？

「……すごいな。俺が見た感じ、魔法は効いてなさそうだったのに」

「まあな……と、今は悠長に話をしている場合ではない。私は、カリファを助けにいかなくては」

「俺も行くぜ」

私とジオは頷きあって、すぐさま走り出した。

「……俺、カリファに槍の修繕を頼んでいたんだ。それを取りに行こうと思ったら……こんな……っ」

鍛冶場に向かいながら、ジオは道端に倒れている人たちを痛ましげに見た。

彼らは――装備しているものから見て、恐らく、ＰＣたちだ。

ＨＰが０になった瞬間に、ＰＣはその場で倒れ伏し、プレイヤーは操作することが出来なくなる。再び操作可能にするためには、仲間やフレンドに蘇生魔法や蘇生アイテムを使ってもらうか、あるいは救済システムを利用し、ペナルティを払って、私室に戻してもらうかだ。

「……」

倒れている彼らＰＣたちに対して、私が出来ることはない。

私が蘇生魔法を使えれば、彼らを助けることも出来たのだが……残念ながら、私は攻撃系魔法をメインに育てているので、蘇生魔法は扱えないのだ。レアな蘇生アイテムも持ち合わせていないし……それは恐らくジオも同じだろう。

だから私たちは、倒れている彼らをそのままにしていくしかない。

「……一体、やつらはなんなんだ……？」

倒れているＰＣの装備をチェックして、私は呟いた。

Ｃｒｏｓｓに新規参入したばかりなのか、初期装備のままのＰＣや、あるいは、ベテランなのだろう、最高レベルの装備で身を固めたＰＣもいる。

だが最高レベルの装備で身を固めていても、それでも――襲撃者たちの攻撃を防ぎきれなかったのだ。

私に対して振り下ろされたあの剣は、さほど業物には見えなかったが……

「……そういえばジオ、今は何の槍を装備しているんだ？」

「ん？　予備の槍だぜ。カリファが貸してくれたやつ」

「ランクは？」
「Ｃだけど？」
「そうか……なら、こちらを使うといい」
私は走りながらもメニューウィンドウを操作して、アイテム欄からアキレウスの槍を引っ張り出した。
「って、すげ、Ａランクじゃん！　もしかして、これ……！」
「以前、カリファが作ってくれた槍だ。こちらのほうが、攻撃力が高いだろう」
驚くジオに、槍を押し付ける。
……正直、今の状況で、Ｃｒｏｓｓで設定された攻撃力が役に立つのかは疑問だ。何しろ、魔法が効かない相手なのだから。
――いや、でも槍で相手の剣を防ぐことは出来ていたし、それなら、攻撃力が高いほうを持っていてもらったほうが、多少は安心というかなんというか……？
「あ……ああ、サンキュ、借りるぜ！」
とにかく、ジオはそれまで装備していた槍をしまって、アキレウスの槍を受け取ってくれた。
「……って、待てよ？　ということは……もしかして」
「？」
ジオが、走りながら何やらぶつぶついっている。
「愛しい魔道士にあげた槍って……え、カリファって……梅沢？」

あ、とうとう気がついた。

襲撃と私　3

私とジオは、既に人のいない通りを走り抜けて、ようやくカリファの鍛冶場まで辿りついた。

「！　あいつ……！」

鍛冶場から、右手に短剣、左手には杖を持った一人の魔道士が出てきたところだった。
それを見たジオが、頭に血を上らせて――走る。

「っ待て、ジオ、迂闊に……っ」
「おおおおっ！」

私の制止など、ジオの耳には届いていなかった。
雄叫びを上げ、槍を構えて突撃する。

「――ふん」

遠目からでもわかった。
魔道士が、余裕の表情と態度で、ゆったりと左手の杖を掲げる。
杖の先端についた宝石が、きらりと光った。

「っ！？」

一条の閃光が、突進するジオを貫こうと、迫る。

「っ跳ね返れ！」

閃光がジオに届くより早く、私は、気合を込めて叫んだ。

大型ブチ狼の足を止めたときのように。
ロアの怪我を治したときのように。
先ほど、剣士を吹き飛ばしたときのように！

果たして――ジオを貫こうとしていた閃光は、見えない壁にぶつかって跳ね返ったかのように、唐突にその動きを変えた。

「……なんだと……！？」

閃光が、ジオに向かった勢いそのまま、今度は魔道士のほうに突き進む。
驚愕に目を見開く魔道士は、避けることも忘れ――いや、辛うじて、右手に持っていた短剣を光に向かって突き出した。
閃光が魔道士に接触する寸前に、突き出された短剣が触れ――

「っ何！？」

私は目を疑った。
短剣が触れた途端、閃光が消えたのだ。まるで、短剣に吸い込まれたかのように。

「……は、はは……！　お、驚かせおって……！」

魔道士自身、かなりの恐怖を感じていたようだ。
笑い声は搾り出したかのようで、嗄れて、引きつっていた。

「――俺のことを忘れてるんじゃねえよ！」

その時、魔道士の至近距離にジオが飛び込んだ。
突進の勢いそのまま、一度の命拾いで油断しきっていた魔道士の腹に、アキレウスの槍が深く突き刺さる。

「な……な、おおおあああああっ？！」

魔道士の絶叫。
素早く引き抜かれる槍。ジオは槍を構えなおし、二撃目を狙う。

「お、おのれえええええ……っ！！」
「！？」

私は目を瞬いた。
魔道士の姿が、薄くなっている……？

「お、覚えておれよ……！」

半透明になり、向こうの景色が透けて見え始めた頃、魔道士は憎憎しげにいった。
そして――ジオの二撃目が繰り出される前に、魔道士の姿は掻き消えた。

「消え、た……？」
「……消えたな」

私の呟きに、ジオは槍を一振りした後、同意した。
残されたのは、短剣だけだ。柄に黒い宝石のついた――黒とはいったが、純粋な黒ではない。赤とか黄色とか青とか……たくさんの色が混ざり合う途中で黒になりかけている、といったような……何

故だか、非常に嫌な感じのする――Ｃｒｏｓｓでは見たことのない短剣。

「……」

その短剣を拾い上げる。

先ほど魔道士に跳ね返った閃光は、この黒い宝石が吸い込んでいた……ような、気がするが……。

「……っそうだ、カリファ！」

悠長に短剣を見てていい場合ではなかった！

短剣を放り捨てて、鍛冶場に駆け込む。

「――カリファ！」

鍛冶場と待合室とを隔てるドアの近くに、カリファは倒れていた。

戦いで荒れた室内を大急ぎで横切って、カリファの上体を抱きかかえる。

「クライヴ、どうだ？」

「カリファ……！」

私の呼びかけに、しかし反応はない。

カリファの赤い瞳は、驚きに見開いた状態で……。

「っクライヴ、誰か来るぞ！」

「！？」

外の警戒をしていたジオの声に、私はカリファを抱えたまま、戸

口を見やった。

「！　貴方たち！　早くログアウトを……クライヴ君？」

「……ネネさん？」

私たちを見るなりログアウトを勧めてきたのは、黒髪黒目に黒縁眼鏡の女性――運営者権限持ちのＰＣ、ネネさんだった。

「……知り合いか？　クライヴ」

ジオは槍の構えを解いて、私とネネさんを見比べた。

「運営者権限もちのネネさんだ。ネネさん、これは一体、どういうことですか！　イベントなどでは……っ」

「違うわ！　とにかく、貴方たちは早くログアウトをなさい！」

「っ待ってください！　カリファが……彼女は……っ」

「……ちょっと失礼」

ネネさんが、私が抱えるカリファに駆け寄った。

普通はパーティーを組んでいる相手のステータスしか見ることが出来ないが、運営者権限を持っているネネさんならば、カリファが今どういう状態なのかがわかる。

そして、ネネさんは目を伏せた。

「……彼女……奴らにやられたようね……。この襲撃は、イベントなんかじゃないの。本当に、何処の誰かもわからない連中に、Ｃｒｏｓｓは襲われているのよ」

「そんな……嘘だろ！？」

信じられない、とジオが叫んだ。

無理もない。Ｃｒｏｓｓ世界で、運営者の手に負えない、こんな大規模な事件が起きているなんて……そんなこと、すぐには信じられなくて当然だ。

だが私は、ネネさんの言葉を否定できない。

――ロア。

彼が……彼らが、Ｃｒｏｓｓを襲っている……。

――――だが、何のために……？

「……襲われた人たちは、ＨＰもＭＰも十分残っているのに……攻撃を一度か二度受けただけで、意識を失うようなの」

「意識を……失う……？」

その言葉に嫌な予感がして、私は恐る恐る聞き返していた。

それは……キャラクターが意識を失った状態にある、という意味で……いいんです……よね……？

「――この子もそうよ。……恐らく、シートに座っているユーザー本人の意識がなくなっているわ」

「っどうして……！　Ｃｒｏｓｓで受けたダメージが、意識を失わせるほどなんて、そんなの……っ！」

カリファが――千鳥が意識を失っていると聞いて、私は思わず叫んでいた。

だってそうでしょ！？　Ｃｒｏｓｓで戦闘ダメージを受けても、それはちょっと痛い程度！　意識を失うほどの激痛なんて、許されるはずがない！

「私たちにもわかっていないのよ！」

「っ！？」

ネネさんの苛立った大声に、熱くなっていた私の頭が冷えた。
ネネさんは一つ深呼吸をすると、努めて声を抑えて、私とジオを見据えた。

「……とにかく、私たちはプレイヤーをいち早くログアウトさせるために、回っているの」
「……あ……なら、緊急コールを出せば……」
「出したわ。でも貴方たち、見た？　聞いた？」

ジオが提案するまでもなく、メールは緊急の指定で私たちに届けられていた。

「……気が付かなかった……」

あの異様な戦いや状況に、メールの到着には気付かず、緊急コールも耳に入らなかったのだろう。

「だから今、私たちが回っているの。……さあ、早くログアウトをなさい」
「……」

私たちの安全を確保しようとしてくれているネネさんの言葉に、しかし私は、すぐに頷くことは出来ず――カリファを、見つめた。

「――っ待ってください。貴方が運営者権限を持っているというのなら……襲撃者たちなんて、簡単にやっつけられるんじゃないんですか！？」

「……無理なのよ」

ジオの問いに、ネネさんは悔しげに唇を噛んだ。

「無理？」

「……こっちがどんな最強装備で挑んでも、思うようにダメージを与えられない！　なのにあちらの攻撃は、一撃掠っただけでもプレイヤーの意識を失わせる……もう訳が分からないわ！」

ヒステリックなネネさんの声に――逆に私は冷静になっていく。攻撃が……魔法が効かない。けれど、相手の攻撃はこちらにとって命取り。恐らく彼らには、私たちとは違うルールが適用されている。

「……」

そして、そのルールに、私はそれと知らずに対応している。

「あ、運営側で、強制ログアウトは？」

「やっているわ！　でも多分妨害されてる」

ネネさんが、親指の爪をがじりと噛んだ。

ジオが考え付くことは、すでに運営でもやってみているようだ。

その時、メールの着信音が鳴った。私とジオの二つともだ。

「――っメール……！」

私は急いでメールを開いた。

「……ユラだ！　クライヴ、ユラたちも襲われているって……！」

「あ、ああ、私にも同じメールが来た」

ユラから、助けを求めるメールが届いた。

ユラは今、シンゴとリーンとともに、ギリシア・ローマ地区のギルド前にいるらしい。

「……！」

私はもう一度フレンドリストを呼び出してチェックし――アリスとスチュアートさんの名前が、未だ白表示であるのが目に付いた。

「――どうした？　クライヴ」

「……ジオ、ユラたちは……任せていいか？」

私はジオを見上げ――驚いたジオは、軽く眼を見開く。

「……お前は行かないのか？」

「っちょっと、あなたたち！　私はログアウトをしなさいと……！」

「別の友人がまだ残っているんだ。そちらへ行きたい」

「――わかった」

私の言葉に、ジオは納得してくれた。

「任せろ！　アキレウスの槍、奴らに効いたからな。ユラたちは俺が護る」
「――ありがとう、ジオ」
アキレウスの槍を肩に担いで笑ってくれたジオに、私も笑みを返す。
「え、待って、あいつらに、攻撃が効いたの……！？」
「クライヴ、気をつけろよ！」
「ああ、ジオも。ネネさん、カリファを頼みます」
「え、ちょっと、クライヴ君！？」
私は、カリファをそっと横たえると、ジオに頷き、慌てるネネさんはそのままに、テレポートを発動させた。
テレポートは正常に作動し、私はアリスの邸の前に到着した。
「アリス……！　スチュアートさん……！」
開かれていた門を潜り、右上固定のナビマップを確認しながら走る。
ナビマップには、アリスとスチュアートさんの居場所を表示させている。フレンドリストに載っている相手ならば、表示非表示を好きに切り替えられるのだ。
ナビによれば、二人は今、邸内にいる。
「――っ」

正面玄関の扉を駆け抜け、二人のマーカーがある二階目指して、階段を駆け上る。
途中、使用人たちが倒れているのが見て取れたが――すまない、今は先に行く！
私の耳には、戦闘音が届いていた。

「っ！」

階段を登りきった先、アリスの部屋の前で、レイピアを構えたスチュアートさんと、長剣を振り回す剣士とが交戦していた。

「っスチュアートさん！？」
「！？」

私の呼びかけに驚いたのは、長剣の剣士のほうだけだった。
背後からの声に驚いて、意識を逸らしたその隙に。

「――フレッシュ！」

スチュアートさんのレイピア技、飛び込み突きが、剣士の右肩を強打した。

「ぐあ！？」

手から落ちる長剣。
剣士は右肩を抑えるが、まだ戦意は失っていないようだ。
その剣士に向けて、私は命令する。

「伏せろ！」
「がっ！？」

途端に、剣士の身体が這いつくばった。背中に大きな岩でも落ちてきたかのように。
そして、その這いつくばった剣士の延髄に――レイピアが、容赦なく突き立てられた。

「――下郎め」
「……あ……」

思わず、駆け寄る足が止まった。
す、スチュアートさん……？
唖然とする私の目の前で、レイピアに貫かれた剣士の身体はゆらめき、消える。

「クライヴ様。ご助力、かたじけのうございます」

レイピアを床から引き抜いたスチュアートさんは、ヒュヒュッと露払いをした後、鞘に収めて、優雅に一礼。

「は、はあ……どういたしまして……あの、」

なんといったらいいか……。
私は言葉に困りながらスチュアートさんを見、次に剣士が倒れていた場所を見る。

「――これは、申し訳ないことを致しました。クライヴ様は、あの下郎にご質問がおありでございましたか」

私の視線を追って、意図を理解してくれたらしい。スチュアートさんが深く腰を折って謝罪してくれた。

「は、はい……ですがまあ……もう消えちゃいましたしねえ……」
「真に申し訳ございません。……あの下郎が、アリスお嬢様に無礼を働きましたので、つい、怒りが抑えきれずに……私もまだまだ未熟でございます」
「あ、いえ、そんな……」

途中、スチュアートさんの声に怒りと殺気が乗って、私の背筋が寒くなった。

こ、怖いです、スチュアートさん……！　私に向けられたものじゃないと分かっていても怖いです……！
スチュアートさんは敵に回さないようにしよう……うん。

「あ、あの、それで、アリスは……？」
「はい、こちらのお部屋でお待ちいただいております。アリスお嬢様、もう出てきてくださってよろしゅうございますよ」

スチュアートさんがそういった途端、部屋のドアが勢い良く開いた。
中からアリスが飛び出してくる。

「っスチュアート！　クライヴお兄ちゃん！！」
「アリス、良かった、無事だったか」
「――怖かったよう……っ！」

アリスを抱きとめれば、私の胸元に顔をうずめて肩を震わせる。

「大丈夫だ、アリス。大丈夫……」

声を押し殺して泣くアリスにそっと声をかけ、少し乱れていた髪を、手櫛で整えた。

襲撃と私　4．5――ジオのターン

クライヴがテレポートで消えた後、俺はアイテム欄からテレポートするための道具、転移結晶を取り出した。

「それじゃあ、ネネさん？　カリファは頼みます」

俺は、カリファ――多分梅沢だ――を、運営者権限もちだという彼女に託す。

そして、転移結晶を発動させようとして――

「ちょ、ちょっと待って！　あなた――ジオ君？　あいつらに攻撃が通じたって、本当？」

「……ええ」

発動を止める。

すぐにでもユラの救援に行きたいのに、こんなときに質問タイムかよ？

……無視していくか？　クライヴみたいに。

「どうして……っ」

「……知りませんよ。……でもまあ、確かにこの槍は、特別効果的みたいですけど」

俺はアキレウスの槍を見た。

クライヴと合流する前、カリファに借りていた槍で他のやつとも戦ったけれど、俺の攻撃はあまり通らなかった。まるで霧を突いたみたいにすり抜けたり、通ったとしても、かすり傷程度だったり。

「……」

そんな俺をあざ笑って、敵は魔道士系のＰＣを追っていってしまった。

――俺は、相手にもされなかった。

「どうして……その槍だと……？」

「……知りませんよ、そんなこと」

俺はイラっとした。

そりゃ、この槍は効果覿面だった。まるで、幽霊に霊験あらたかなお札を貼り付けたみたいに。

でも、それだって、こんなところで悠長に話していては宝の持ち腐れだ！

「もういいですか」

「あ、待って！　アキレウスの槍っていうことは、プレイヤーメイドよね？　誰が作ったの？」

「っ」

その質問に、俺は言葉に詰まった。

誰って……それは。

「――カリファですよ」

「！　この子が……」

倒れているカリファを見る。

……梅沢……。

このネネさんがいうには、梅沢本人にダメージが伝わっているってことだけど……大丈夫なのか？　ちゃんと意識が戻る……よな？

梅沢。

でないと、きっと桜庭は……ってそうだよ、桜庭だって危ないんじゃないか！？　あいつ、魔道士系みたいだし……って、まさか！

もしかして、桜庭って……ユラ、だったりしないか！？

「――っもう行きます」

俺は今度こそ、転移結晶を発動させた。

白い光が俺を包んで――そして一瞬後、俺はギリシア・ローマ地区のギルド前に立った。

「っジオさん！？」

「――ユラ！？」

俺を出迎えた声に、こんな場合だけど心底ほっとした。

よかった、ユラはまだ無事だった……！

「大丈夫か！？」

ギルドの壁に背を預け、身を竦ませているユラに駆け寄る。

周りには――！？

「って、なんだよ、この数！？」

ユラに、大剣に、刀に、杖と弓。

ざっと見て五人が、十匹ほどの灰色狼――いや、一時期噂になったブチの狼に、取り囲まれていた。

「なんだ。魔道士が来てくれたかと思ったのに、槍かー」
「！？」

至極残念そうな――幼い声。そいつは、ブチ狼たちの奥に、黒い宝石のついた杖を持って立っていた。

「子供……？」
「――まあ、確かに僕は子供だけど。でも魔道士だから！　君たちみたいなのに見下されるいわれはないんだよ！」

苛立たしげに、がん！　と杖が一つ打ち下ろされると、包囲していたブチ狼が二匹、飛び掛ってきた！

「きゃあ！？」
「う、わあああっ！？」

ユラが悲鳴を上げてしゃがみこむ。
大剣が大振りされたけれど、掠りもしない――いや、当たったけれど、すり抜けたんだ！
ブチ狼は、大剣使いを無視して、ユラを目指してかけてくる……！

「っさせるかよ！」

俺は、飛びかかってくるブチ狼の顔面目掛けて、アキレウスの槍を突き出した。

「ぎゃん！？」

槍は、ブチ狼の鼻頭に接触、容易く貫いた。

「――壱の型、地走り！」

俺の背後で、男の気合の入った声が聞こえた。そして、恐らくは刀スキルの効果音も。

「な！？」

魔道士の子供が驚いた声を上げるが――今は構っていられねえ！

ブチ狼に深く突き刺さってしまった槍を引き抜くべく、ブチ狼の身体を足蹴にしようとしたところで、その身体が霞と消えた。

俺は、飛びかかってきていたもう一匹を探し――それが、縦に真っ二つされている姿を見つけた。

「――貴方は、攻撃が効くようですね」

「……あなたこそ」

ブチ狼を斬り捨てていたのは、刀装備の侍だった。黒い髪をポニーテイルにしている。目の色は、覗けていないので知らない。

「な、何なんだよ、お前ら二人！　どっちも途中から来たくせに！」

子供が苛立たしげに足を踏み鳴らした。

その苛立ちに反応してか、ブチ狼たちが飛び掛ってくる。

「――っさせるか！」

「四の型、疾風！」

俺と侍とで、牙をむいて襲い掛かってくるブチ狼たちを打ち払い、

斬り捨て、押し返す。
幸い、ギルドの壁を背にしているから、俺と侍の二人で、なんとかフォローし切れているが……。

「い、いや……！」
「た、助けてくれ……！」

俺と侍の背後で、ユラたちがパニックに陥りかけていた。
――そうだよな。俺だって、今でこそ立ち向かえているけど……自分の攻撃が全然通じてなかったら、きっと、ああなってた。

「――ああ、もう！　お前らは大人しく狩られてればいいんだよ！」

ブチ狼を半数失った子供が、がんがん！　と乱暴に、連続で杖を打ちつける。

「……な……！？」

俺は目を疑った。
子供の背後に、ブチ狼が次々と出現してきていた。
あいつ……ブチ狼を何体でも呼び出せるのか……！？

「……これは……まずいですね……」

侍が、俺にだけ聞こえるような小さい声で呟いた。

「……」

確かに、これだけの数を相手に……俺と侍の二人だけで皆を護る

なんて……って、そうだ！

「ユラ！　ログアウトは！？」
「え……？」
「ログアウトは出来ないのか！？」
「！！」

背後のユラに向かってそう叫べば、すぐさま、メインウィンドウを操作する音が聞こえてきた。

「っだ、駄目です！　受け付けてくれません……！」

今にも泣き出しそうな声だった。

あーもう、俺も泣きたい！！
……でも……もしユラが桜庭だったら……俺、何としてでも、守りたい……！

俺は、アキレウスの槍を、ぎゅっと握りこんだ。

何としても……！

襲撃と私　5

アリスとスチュアートさんの二人は、無事ログアウトが出来た。
アリスは私にもログアウトするよう何度も言ったけれど――フレンドリストで確認したところ、まだユラたちが残っている。
助けに行かなければ。

「テレポート！」

私は、ギリシア・ローマ地区に座標をあわせて、跳んだ。

テレポートのエフェクトが収まる前に、私は駆け出していた。
いきなり戦場のど真ん中に出現するのも具合が悪い。私は、テレポートを、ユラたちから少し離れた場所に設定したのだ。

路地を走り抜けて大通りへ出れば、そこにギルドが見える。
マップに表示されるマーカーは、ユラ、ジオ、シンゴ、リーンの四つ。
どうやらまだ皆、無事でいてくれているようだ。
大通りに出る前に一度足を止め、先の様子を窺うべく顔を覗かせる。

「――！」

たくさんのブチ狼に、ジオたちが囲まれている……！
そして、ブチ狼の外側で杖を振り回している……子供の魔道士？

子供が杖を振りかざすと、それに応じてブチ狼が、今にも飛び掛らんばかりに――っ止めなくては！
私は路地から走り出るなり、叫んだ。

「吹き飛べ！」

突風が地を走り、ジオたちに飛びかかろうとしていたブチ狼たちを吹き払う。

「ぎゃん！」

ブチ狼たちは、突然の強風に身体を攫われた。
あるものは引きずられ、あるものは高く舞い上げられ、体中に切り傷が刻まれ、強く打ち付けられて――姿をかき消した。

「な、だ、誰だ、お前……！」

子供が私を見つけるなり喚いた。

「今です！」
「っ！」

そしてその隙に――リーンとジオが動いた。

「……っう、うわああ！？」

全速力で二人に迫られた恐怖で、子供の顔が引きつる。
先に間合いに入ったのは、リーチの長い槍……ジオのほうだった。
身を翻して逃げ惑う子供の右肩――杖を持つ手のほうに、ジオの槍が突き刺さる。

「い、ったあああああああっ！！」
「覚悟なさい！」
悲鳴を上げ、身を捩った子供に、リーンの袈裟斬りがまともに入った。
「あああああああっ！？」
絶叫。
そして、その叫びが収まらぬうちに――その身体が揺らいだ。
「……っまた消えるのか！？　逃がすかよ！！」
ジオが子供に手を伸ばす。
だが、その手は子供をすり抜け――子供は消えた。
「……」
その場に沈黙が落ちる。
ブチ狼は全て掃討されていたし、子供も消えた。
――一先ず、危機は去ったようだ。
「……」
リーンは刀を収め、ジオは槍を肩に担ぐ。
私は、二人に駆け寄った。
「ジオ、無事か！？」
「ああ、まあ、何とかな」

ジオの無事な姿に、ほっと胸を撫で下ろす。

「リーンさ……リーンも」

さん、と敬称をつけようとして、リーンさ……リーンに目配せされた。

……実はリーンさ……リーン、が乃木さんだとカミングアウトされてから、どうにも敬称がくっついてこようとするのだが、リーン、から今までどおりにするようにといわれて……頑張っているところだ。

ちなみに、何故乃木さんに、クライヴが私であるということがわかったかというと……なんでも、オーラで個人を特定できるらしい。ＶＲシステムは、その人の魂の色であるオーラを、見ることが出来るのだとか。

……うん、私は基本「視」ないようにしているから、確認したことはなかったけれど、そうかー、プロはそういう使い方が出来るのかー……。

というか、Ｃｒｏｓｓを始めＶＲって、一体どういう技術使ってるわけ？　もうこれ、科学やコンピューター技術じゃなくて、魔術的、ファンタジーの領域っぽくない？

「拙者も大事無いでござる」

「ござる？」

リーン、の語尾に、ジオが目を丸くした。

「ああ、先の戦闘中ではついつい外れてしまいもうしたが、拙者、普段はこのような喋りでござる。――否、それ以前に自己紹介からでござったな。拙者、リーンと申す。刀使いでござる。以後、お見知りおきくだされ」

「あ、ああ……そっか。俺はジオ。槍使いだ。よろしく」

「うむ。――それにしてもクライヴ殿、見事な技でござったな」

自己紹介を終えて、改めてリーンが私を向いてきた。

「あれは……魔法でござるか？」

「……というわけでもない。……気合？　のようなものだろうか」

私にも原理はわかっていないのだが。

だが、強く念じれば、その通りになる……ようだ。

それを魔法というのなら魔法なのだろうが……少なくとも、Ｃｒｏｓｓ世界に存在する魔法ではない。エフェクトもかかっていなかったしな。

「……なんだよそれ。気合でどうにかできるんだったら、俺はもっと前からどうにかしてたぞ。というか、リーンも斬れてたのな？　それ、業物か？」

「否。普通の刀でござるよ。ジオ殿は如何か」

「俺のは……Ａ級武器だ。アキレウスの槍。……友人がつくったんだ」

「……」

「……さようでござるか……」

ジオの沈んだ声と私の沈黙に、リーンも何かを悟ったらしい。軽く目を閉じた。

「――……っだよ……！」
「？」
ギルドのほうから吐き捨てるような声が聞こえて、私たちは振り返った。
見れば、ギルド前で蹲るユラたち――呆然としている彼らの中から、シンゴがゆらりと立ち上がっていた。
「なんなんだよ、これ！？　一体どうなってんだよ！？」
「シンゴさん……」
苛立ちを露にするシンゴに、へたり込んだままのユラが戸惑う。
「こっちの攻撃が効かねえ、あっちの攻撃は一撃で戦闘不能！　敵シンボルだって表示されねえし！！　一体なんなんだよこのイベントは！？　何考えてやがんだよ、運営は！！」
「シンゴ、これは……」
運営の用意したイベントではない、と言おうとして――私は口を噤んだ。
そんなことをいったら、余計シンゴを混乱させるだけではないか？
「抗議してやる！　おい、お前らも訴えようぜ！　こんなの……ぜってー許せねえ！」
「あ……あ、ああ……」
「そう、だよな……？　やっぱ、変だよな……？」
シンゴの勢いに押されて、弓使いの人と、杖の魔道士の人も頷いている。

「……クライヴ……」

「……」

どうする？　と視線で問うて来るジオに――私は眉を顰めて考え込むくらいしか返せなかった。

「――みんな、無事!?」

その時、テレポートで姿を現したのはネネさんだった。

「！　ネネさん！　これは一体どういうことだよ!?　一体何考えてあんな……！」

「――まことに、申し訳ございません」

「……え……？」

運営の一人であるネネさんの登場に、シンゴがここぞとばかりに苛立ちをぶつけ――ネネさんは深く謝罪した。

その、潔く真摯な対応に、シンゴは気勢を殺がれたようだ。戸惑って、ネネさんを見つめている。

「このたびの混乱は、全て私どもの不手際によるものです。皆様には大変なご迷惑をお掛けしてしまったことを、深くお詫びいたします」

「……」

「後日、改めまして、会社のほうからお詫びのご挨拶と、今後の対応についてご連絡差し上げます。今は、どうぞ、ログアウトをなさいまして、最寄りの病院の診察を受けてくださいますよう、お願い申し上げます」

「……」

企業としての誠意ある対応、というところだろうか。

機先を制される形で、シンゴたち、不満を露にしていた彼らは沈

黙した。

「――ですが、ネネさん、他の場所ではまだ……」

襲撃はまだ他所で続いているかもしれない。

対抗手段を持たない人たちが、逃げ惑っているかもしれない。

ならば――どういう理論かは知らないが、対抗手段を持ちえる私は、助けにいったほうがいい。

そう思って、現在の状況を尋ねたのだが。

「――お心遣いは有難く頂戴いたします。ですが、他の場所の混乱も収まったと報告を受けておりますので、どうぞご安心ください」

「収まった……」

――まあ、確かに、リーンやジオも襲撃者に対抗できていたのだから、他にそういうプレイヤーたちがいても、おかしくはないか。

「はい、ジオ様と――カリファ様のおかげで御座います」

「え、俺？」

突然のご指名に、ジオが驚いた。

どうやら自覚がないらしい。

「はい。ジオ様が、カリファ様のお作りになられた武器に効果があったと仰いましたので……無断借用では御座いましたが、カリファ様の工房に残されておりました武器をお借りいたしまして、運営者権限持ちのプレイヤーに渡しました」

「ああ、成程……」

ジオが頷いた。
そうか、カリファが作った武器なら……対抗できるのか。
何故効果があったのかは相変わらず不明だけれど、とりあえず混乱が収められたのなら、それに越したことは無い。

「敵勢力の撤退も確認できましたので、皆様方の端末からログアウトしていただけると思います」
「あ、本当だ！」
「よかった、これで帰れる……！」

弓使いの人と杖の魔道士の人が、それぞれメニューウィンドウを確認してほっと笑うと、すぐにログアウトしていった。

「……っ」

シンゴもまたウィンドウを確認し――ログアウトボタンに触れる寸前、私たちのほうに視線を寄越した。
強い視線が、ネネさんを射抜く。
ネネさんは、その視線を受け止めると――もう一度、深く頭を下げた。

「……っ」

シンゴは何かを言おうとしたが、口を開いただけで、結局は何も言わずにログアウトした。

「……あの、クライヴさん……」
「――ああ、ユラ？　どうした、ログアウトボタンが出ないか？」

へたり込んでいたユラがよろよろと立ち上がり、私に縋るような

視線を向けてくる。
もしかしてユラにはエラーが出ているのかと訊ねるが、首が振られた。

「……あの、ジオさんも。助けに来てくれてありがとうございました……」

そういって、ぺこりと頭を下げる。

「いや、間に合って良かったよ」
「あ、や、そんな、改まってお礼を言われるようなことじゃ……当然のことをしたまでだしさっ」

照れたジオは早口になっている。

「あと、リーンさんも、私たちを守ってくれて、有難う御座いました。リーンさんがいなかったらきっと、やられちゃってました……」
「お気にめさるな。困ったときはお互い様でござるよ」
「――有難う御座います」

強張っていたユラの顔に、ようやく、微かながらも笑みが浮かんだ。

「――あの、それでは私、失礼しますね」

もう一度、軽く頭を下げて、ユラはログアウトを選択した。

「では、拙者もそろそろお暇いたそうか。クライヴ殿、ジオ殿、ネネ殿。失礼仕る」

「ご迷惑をお掛けいたしました」
「ああ、お疲れー」

リーンさんの威儀を正した一礼に、ネネさんは深く礼を返し、ジオは軽く片手を挙げて挨拶する。

「お疲れ様でした、リーンさ」
「クライヴ殿」

すかさず注意されてしまった……。
ううん、もう諦めてくれればいいのに、リーンさんも。
なんて思いつつも、これもロールプレイの一環。

「……お疲れ、リーン。……またな」
「うむ、心得た」

言い直した私に満足げに一つ頷いて、リーン、はログアウト。
さて次は、と私とジオの視線が交差し――その前に聞かなくてはいけないことがある、とアイコンタクトで同意した。

「――なあ、ネネさん。カリファはどうした？」
「はい、こちらでログアウト手続きをさせていただきました。今は――VRシステムから救出され、病院に搬送されていることと思います」
「そうですか……」

カリファ……無事だといいけれど……。

「――じゃあ、俺もそろそろ上がるか。……またな、クライヴ」
「――ああ、また。ジオ」

ジオを見送り、ここには私とネネさんの二人だけが残った。

「……ネネさん」

「はい」

私の呼びかけに、ネネさんが真っ直ぐに見返してくる。

……その真剣さ、それは企業対応としては当然なんだろうけれど……受付に入っていた頃の表情豊かなネネさんがいなくなってしまったようで、私としては非常に残念だ。

「……Ｃｒｏｓｓの閉鎖は、最後の手段にしてくださいね？」

「――はい、誠心誠意、努めさせて頂きます」

「――では、失礼します」

そのままログアウトしようとして――ふと手を止める。

私室ログアウトにしたほうがいいのかな？　なんて、こんな状況でも思いついてしまったから。

私はログアウトボタンに当てた指を少しずらして、私室ボタンに触れた。

「――ありがとう、クライヴ君」

その、僅かに生じた時間、最後の最後にネネさんの微笑が滑り込んできて――少し、嬉しくなった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9190w/

Cross　～夢の架け橋～

2011年12月7日07時45分発行